

---

# 魔法の合成師

Sumire

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法の合成師

### 【著者名】

S umire

N 1 3 8 5 W

### 【あらすじ】

ある日、不思議な女性に魔法の世界に連れて行かれた森嶋聰一。その世界で魔法を手に入れる。

手に入れた魔法は合成魔法。

この魔法は二つの魔法を合成することにより、新たなひとつの中を作りだすというもので・・・

## act1 肝試し

カタカタカタカタカタカタ・・

少女はパソコンで何か文章を書いている。

「ハアー」

少女は溜め息をつくとパソコンをシャットダウンした。  
玄関にむかい、靴を履く。

外に出ると少女は、ゆっくりと歩き始める。

向かつた先は学校だ。

しかし、今日は日曜日で夕方だ。

それでも少女は学校に入る。

正面玄関は鍵がかけられるため、金曜日に鍵を開けっぱなしにして  
おいた一階の窓から校舎内に入る。

少女は行き先が決まっているかのように階段をのぼる。

そして最上階の屋上につながる扉の前まで来る。

その扉を開き、屋上に出る。

少女が学校に入ったときは違い、少し雨が降っている。  
それでも少女は屋上に出て、落下防止用の柵の前まで行く。  
雨は、さらに強さを増してくる。

少女は柵を乗り越え、その先にある、とても狭い足場に立ちつくしている。

しばらく立ちつくした後、少女は笑みを浮かべ屋上から飛びおりる。

「なあ、聰<sup>そうじち</sup>、今日、肝試しに行かないか?」

季節は真夏。夏といえばコレ!と言わんばかりに浩介が言つ。

「別にいいけど、一人で行つても楽しくないだろ?」

「ああ、それなら女子数名確保してあるから。」「

「ふーん。じゃあ、何時にどこ行けばいいの?」「

「八時に町はずれの墓場で。」

「了解。」

朝っぱらから肝試しの話するか?と思ひながらも一応、行くと答えた聰一だが、肝試しが好きなわけではない。なぜなら靈を信じていないからだ。そしていたとしても怖いとは思わない。そもそも、死んだ人には、もう会えないという考えが間違いだとしたら靈は存在してもおかしくないわけだ。「信じていない」理由は、自分で見たことがないだけであつて、

その存在を自分で確認したら、すぐに信じるだらう。

チャイムが鳴り、先生が教室に入つてくれる。

生徒たちは席につく。

「最初に、皆に言わなくてはいけないことがある。」

担任は、とても真剣で周囲の空気を重くさせるような表情をしている。

「誰か、なんかしたのか?」「

「おいおい、なんだよ・・・」「

少し教室がざわつく。

「静かに。これは、本当に重大な問題だ。だから、これから緊急の全校集会を行う。」

詳しいことは集会で話されるが、皆には先に言つておく。三組の高<sup>たか</sup>梨柚月<sup>なしゆづき</sup>が自殺した。

「自殺?」「

「マジかよ・・・」「

また教室がざわつく。

「静かに。体育館に行くから廊下に並べ。」

生徒たちは静かに廊下に並ぶ。列を乱さずに体育館へ向かう。

体育館に全校生徒がそろつと、校長が壇上に上がり、自殺について説明を始める。

校長の話は、とても長かった。三十分・・いや、一時間経つただろうか・・

話の最中には、柚月と仲の良かつた思われる女子たちの泣く声が聞こえる。

校長の説明は、とても詳しく、あまりにも生々しい話だったので、中学生の前で言つような話か?と思つた。

自殺の詳しい状況については、今日の朝、出勤してきた教員が柚月の死体を発見した。

うつ伏せになるように倒れており、頭からは考えられないほど大量の血が流れしており、

すぐに警察と救急車を呼んだということだ。

その後、病院に運ばれたが死亡が確認された。というような感じだ。自殺した理由は調査中のこと。

集会が終わり全校生徒は教室に戻る。

「今日は、もう下校だ。」

担任が言う。すぐに帰る準備をし、帰りのホームルームが行われ、下校する。

聰一は、浩介といつも一緒に帰っている。

「なあ、俺、高梨つてやつの顔わからんないんだけど。」

少し柚月に悪いと思いながらも聰一は浩介に聞く

「俺も、わかんないんだけどさ、結構かわいかつたらしいぜ。」

「ふーん。でもさ、まさか同学年で自殺をするやつが出るとわな。」

「ああ、俺も驚いた。いじめとかでもあつたのか?」

「さあな。」

「そつか・・」

「でもさ、今日の肝試しは続行だからな。他の奴らもいって言ってたし。」

なんて不謹慎なやつなんだ・・でも、まあ仕方のないことなのかな。同じ学校の同学年とはいえ、顔も覚えてないし、一度も話したことのないやつだからな。

「どうした？」

「え？ ああ、わかった。」

思わず黙り込んでしまっていたらしい。なんとか誤魔化せたからいいけど。

時刻は午後七時三十分。

肝試しをするのに、指定された場所に行くには今から行かないと間に合わない。

あまり、行く気にはなれなかつたが、約束してしまったから仕方なく行くことにする。

自転車を出し、少し急いで墓場へ向かう。

墓場の入り口に着くと、もうすでに五、六人の人が集まっていた。

「よし、これで全員そろつたな。じゃあ行くか。」

浩介を先頭に全員でゅっくりと進む。

墓場は、とても暗く懐中電灯の明かりだけでは、前がよく見えない。どんどん奥へ進み、一番奥にある祠まで来る。

その祠は、とても小さく何が祀られているのかもわからない。

突然、強い風が吹き始め、木々がざわめく。

「ねえ、あれなに？」

一人の女子が祠の横に立っている大きな柳の木を指差す。

「うわっ、なんだよ！」

その方向を見た浩介は驚きのあまり声を出してしまう。

浩介の声を聞いた他のメンバーも、柳の木を見る。

柳の木の後ろには白い光が見える。そんなに遠くないはずなのに、とても遠くで光つてゐるよう感じた。

肝試しに来たメンバーは、「さすがにヤバい」と言って、その場を逃げるように立ち去る。

聰一は、祠の前に残り、光の正体を確かめることにした。

act 1 試験（後書き）

話の進行が遅いかもしれません。  
更新も毎日はできないと思いますが  
よろしくお願いします。

## act 2 不思議な女性

その光は、少しづつ近づいてくる。聰一は覚悟を決め、口の中に溜まった唾液をのみ込む。

「へー、君は逃げないんだ。」

光のほうから女性の声が聞こえる。

「え？」

声のする方に立っていたのは、一人の女性だった。

その女性は、高校生くらいで長い黒髪を後ろで一つに束ねている。暗いので顔は、よく見えない。

「だから、普通こんな時間に墓場に一人でいる人なんて見たら怖くなんない？」

「いや・・普通、靈的なものって、なんていうか・・

とにかく、俺から見たら、あなたは怖くありませんよ。」「

「そう？じゃあ、一応、自己紹介。私は幽崎美羽 君は？」

「森嶋聰一です・・」

「聰一君ね。じゃあ君に頼みがあるんだけど。」

「・・・」

待て待て、まだ会つてから五分も経つてないよな？

それなのに、いきなり頼み」とつて・・

「何、黙つてんの？まあ、いいや。一応、言つておくな。この世界を守るために私と戦つてくれない？」

「は？」

なんだよ、ただの電波さんかよ・・相手にするだけ無駄かもな。

「まあ、正確には、この世界ともう一つある世界なんだけど・・

「その話、聞く価値ありますか？」

「死にたくないんだつたら聞いた方がいいと思うよ？」

おいおい、同学年のやつが自殺した日の夜に「死にたくない」とか言われたらな・・

当然、俺は死にたくない。だから一応、聞いてみることにする。

「わかりました・・あくまでも死にたくないから聞くんですよ?」

「それでもいいよ。多分、全然、信じないと思つけど最後まで聞いてね。」

「続けてください。」

「うん。まず、この世界では科学がすごく発展してるでしょ?」

「はい。」

「で、もうひとつ世界・・私がいた世界なんだけど、そつちは魔法が発展してるんだよね。」

「じゃあ、魔法が使えるんですか?」

「うん。こんな感じ。」

暗くて良く見えないが女性の表情が変わったような気がした。その瞬間、聰一をありえない強さの風が襲う。あまりの強さに倒れてしまう。

「え?・・え?」

思わず、戸惑ってしまう。

「今のが私の魔法。風を操れるんだよね。」

そして、また女性の表情が変わったような気がする。今度は、笑顔に。

「今の・・あなたがやつたんですか?」

「そうだよ?これで信じてくれた?」

「い、一応ですけど・・」

本当にありえない。でも、目の前でやられてしまふと、信じるしかなくなってしまう訳だ。

「まだ、信じてくれないか・・まあ、いいや。どこまで話たつけ?」

「えーと、もう一つの世界には魔法があるってところまで・・」

「そうそう、もう生活には魔法が欠かせないくらいに重要なものになつてて、

この世界でいう、科学くらい重要なもののなのよね。」

「それが・・なんで世界を救うとかいう話になるんですか?」

「それは・・むこうの世界にも、いくつかの国があつて、私がいた国が他国と戦争中なの。

まあ、言つてみれば魔法戦争つてことね。で、現在その戦争の戦況は圧倒的不利。

負けが確定しているようなもので、このままでは国民にも甚大な被害が出る可能性がある。

そこで王の出した答えが、この世界の住人と自分の國の人を魔法によつて入れ替えるということ。これは王の魔力があれば不可能なことじやないわ。

でも、そんなことをしてしまえば、科学を維持することによつて生活が出来ている場所に魔法を維持することによつて生活できている人々が来るつてこと。

「それの、何が悪いんですか？」

「だから、科学の維持方法をわからない人たちが、この世界に来てしまえば、科学がすぐに崩壊して、生活ができなくなつてしまつてこと。

逆に魔法の維持方法がわからない、こひちの世界の人たちが魔法を維持している場所に

行つても、魔法が使えないから生活が困難になつてしまつてわけ。

「えーと、まだわからないんですけど・・」

「うーん・・じゃあ魚がいきなり水の無い場所で生活しろと言われても無理でしょ？」

まあ・・進化していけば不可能でもないんだけど、長い時間がかかるつてしまつでしょ。

で、陸で生きている生物が水中で生きろつて言われても無理。

「うーん・・なんとなく、わかつたような気がします。」

「じゃあ、協力してくれる?」

「考えておきます。」

「じゃあ、明日までね。」

そう言うと女性は、どこかへ歩いて行く。

なんだつたのだろう・・不思議な人だつたな。

言つていることは、なんとなく正しいような気がするけど・・でも、なんで、俺なんかに協力を求めたのかな・・不思議に思いながらも、先に行つたメンバーが待つてゐると思つたので

急ぎ足で墓の入り口まで戻る。

「ああ、やつときたか。何やつてたんだよ・・」

「ごめん、ごめん。ちょっと気になるものがあつてさ・・」

「それは、いいとして、まだ一人たりないんだよな。」

「え？俺は見てないけど。」

「そうか。もう帰つたのかな？いいや、もう帰つちゃおうぜ。」

どうやら浩介は、他のメンバーが帰つても、一人で俺を待つていてくれたようだ。

こんな薄暗くて、氣味の悪い場所で・・感謝しなくちやな。二人は自転車を猛スピードで走らせ、家に帰る。

## act3 自殺の理由

「そろそろ起きないと遅刻するよ?」

翌日の朝、聰一は聞きなれない声で田代が覚める。

「うーん・・・うわあつ！」

その声の主は昨日の肝試しのとき墓場で会った幽崎美羽だった。

「なんで、そんな大声出すの?」

「いやいやいや・・・まず、どうやって入った?そして、なんで来た?」

「えーと、昨日、君に使った魔法って「風」だつたでしょ?」

「そういえば、強い風が起きたような・・・」

「それを応用して、体を浮かせて窓から入つたってわけ。」

この部屋は一階にある。玄関も鍵がかかっている。

「それで、私に協力してくれるの?」

「うーん・・・」

「お願ひ。」

美羽は、手を合わせながら、こぢりを見ている。

美羽の顔は、このとき初めて見た。・・・意外とかわいい・・・

なんていうか不思議な気分になる。こんなかわいい女の子がこんな近くにいるのは初めてだ。ヤバい・・・このままじゃ惚れてしまいうだ・・・

「・・・わかったよ。」

なんとか、その場を回避するために「世界を救つ」ことを承諾してしまう。

「やつてしまつた・・・」やつ思つたときには、もう遅かった。

「ホントに? ありがとう!」

「いや、えーと・・・で、何をすればいいの?」

今更、「やっぱ、無理」などと言えるような状態ではない。美羽の嬉しそうな表情・・・ああ、どうしようか・・・

仕方ない。どうせなら世界の一つや二つ救ってやるうじやねえか！」

聰一が人生で一番の決断をした瞬間だった。

「じゃあ、今日の昼休み、君の通ってる学校の屋上に来てね。」

「え？ それだけでいいの？」

「うん。じゃあ、もう一回、自己紹介。私は幽崎美羽。魔法の世界の住人です。」

「森嶋聰一。絶対に世界を救ってみせます。」

「お？ 言つてくれたわね？ じゃあ、よろしくね。聰一君。」

「・・・・・」

女の子に下の名前で呼ばれたのなんて初めてだ・・・

「何、黙つてんの？ まあ、いいけど遅刻するよ？」

「ああ！ すっかり学校のこと、忘れてた・・・」

本当に何やってんだろうな・・俺。

翌日は通常どおり授業が行われた。

たとえ前日に自殺があつたとしても、授業は通常どおり行われるらしい。

四時間目の授業を受けている途中、美羽の言つた言葉を思い出す。

「昼休みに、屋上に来て。」

なんとなくだが屋上に行くことによつて、魔法の有無、世界崩壊の事実がわかるような気がした。

たとえ、わからなくても昼休みを無駄にするくらいだから、大したことはない。

昼休みのことを考えているうちに四時間目の授業が終わる。

それぞれ班にわかれて、給食を食べる準備をする。

給食関連の当番に当たつて無い人は、準備中は自由な時間を過ごせる。

聰一は自分の分の給食を貰いに行き、自分の席で他の人の給食が終

わるのを待つ。

全員、準備が終わると、日直が「いただきます」とあいさつをして、給食を食べ始める。

今日のメニューは、カレーだ。このカレーは、あまり辛くない味付けになつていて。

そのおかげで早く食べ終えることができる。

「「」ちそくさま」をする時間は決まっており、その時間になつたら食べている途中でも片づけなくてはいけない。この時間の五分くらい前に食べ終わつたが、班の人と会話することもなく、静かに「ごちそうさま」をするのを待つ。

「「」ちそくさままでした」

日直が言つと皆、一斉に食器を片づけ始める。

人混みの嫌いな人は少しタイミングをずらして片づけをする。

聰一も、その一人だ。

片付け終わつたあとは昼休みになり、自由に過ごすことができる。食器を片づけ終わつた聰一は、少し急ぎ足で屋上に向かう。

屋上は四階。三年生の教室は三階のため、すぐに屋上につく。

屋上の扉を開けると、美羽と見知らぬ女の子がいた。年は、聰一と同じくらい。

見た目は・・それなりにかわいい。黒いショートヘアをしている。

「お? 約束どおり来ててくれたね。」

「そりやあ、色々、気になる事がありましたからね。」

「美羽さん、この人、誰ですか?」

見知らぬ女の子は美羽にだけ聞こえるように小声で言つたが聰一にも丸聞こえだつた。

「そういう、君は誰だよ?」

この学校の制服を着てるし、年上ではないだろう。

そう思い、あまり丁寧な言葉は使わなかつた。

「え? 私・・ですか?」

「うん。」

見知らぬ女の子は美羽の方をチラつと見る。

「この人は味方だよ。」

と美羽が言つ。

「わ、私は高梨・・高梨柚月です・・」

「へー、たかな・・つて、自殺したんじゃねーのかよー!?」

「えーと・・それは、その・・」

「いいわ、私が説明するから。

この子は自殺したと思われてるけど実際は、そりでじゃないわ。」「じゃあ、なんなんですか?」

「魔法で一時的に仮死状態にしただけ。」

「・・なんで、そんなことを?」

「死んだことにしておけば、いつでも魔法の世界に来れるから。」

「それと、どういう関係があるんですか?」

「だから、生きてたら毎日、学校に行かなくちゃいけないでしょ?でも、死んでたら存在しないことになってるから、なんでも都合のいいときにできるってわけ。」

「じゃあ、俺も死んだことにされるんですか?」

「いや、別にいいけど?」

「じゃあ、なんで高梨は・・」

「柚月は何回か魔法の世界に来ていて、もう魔法も使えるのよ? だつたら自由に「こつち」と「魔法の世界」を行き来できるようになら? つて提案したら、死んだふりをしてくれたってわけ。」

なんか、滅茶苦茶なやつばかりだな。魔法が使える奴つて。

「そういえば、なんで屋上なんかに呼び出したんですか?」

「ああ、それは、もう魔法の世界に行かなくちゃいけないからよ。」「え? じゃあ・・」

「そう。今すぐ、魔法の世界に行くわよ。」

「ちょ・・午後の授業もあるんですよ?」

「いや、でも時間ないからや。」

なんなんだよ一体。世界を救うとかいう話を承諾してしまった、俺

がわるいけど・・

これは、いくらなんでも突然すぎだろ・・

そんな風に思つていい聰一の横では美羽が魔法の世界に行くための魔法を発動させる準備をしている。

「よし、もう行く準備できたから。」

美羽が使つた魔法は、ブラックホールのような姿をし、少しずつ吸い込まれていくような感じだ。美羽と柚月は、もうすでに吸い込まれてしまつていて、

聰一は抵抗するだけ無駄だと思い、「どうにでもなれ」と自らブラックホールの中へ飛び込む。

吸い込まれた瞬間、不思議な感覚になり氣を失つてしまつた。

## act 4 魔法の世界

目が覚めると、古い小屋の中にある小さなベッドの上だった。

「あ、起きた？ やつぱり、皆、最初は気絶するんだね。」

聰一は、全く状況がつかめずについた。

窓の外には見たこともない木や植物が生えていたし・・

「なに、驚いた表情してるの？ ここが魔法の世界だよ？

目の前には美羽の姿・・このとき、やつと気がつく。

「魔法の世界に来てしまった」とこりこりとい。

「本当に存在したんだ・・」

「え？ 信じてなかつたの？」

「あたりまえです・・それで、魔法の世界って、どになんですか？」

「おお、その質問してくれた人、初めてだよ。」

「答えてくださいよ・・」

「うーん・・正確には、ここは「もうひとつ的世界」なんかじゃな

くて、地球の科学技術で観測可能な範囲より、遙か遠くにある「惑

星リーフ」って言う惑星よ。」

「地球以外に生命のある惑星は無いんじや・・」

「だから、言つたでしょ。地球の観測範囲外だつて。」

「だからといって、存在するとは思えませんが・・」

「・・まあ簡単に説明すると、地球みたいに生命が誕生できる、気温・自然環境が整っている惑星があつたていうだけよ。」

「じゃあ、ここは・・」

「そう。宇宙のどこかにある惑星つて考えてくれればいいわ。

あと酸素の濃度が地球より少し濃いから、運動したりするの楽になるかもね。」

「そういえば、なんか体が軽いような気がする・・」

「じゃあ、さつそく聰一君の魔法がなんなのか確認しに行こうか。」

「そんなこと、できるんですか？」

「うん。この小屋の近くに洞窟があつて、その中の石碑が、どうい  
う魔法なのか教えてくれるの。」

「わかりました。そういえば高梨は・・・」

「ああ、柚月なら外にいるよ。」

小屋の外に出ると、あたり一面、とてもきれいな自然であふれてい  
た。

しかし、どの植物も見た事ないものだった。

「そういえば、戦争がどうとかって・・・」

「そう。この森を抜ければ、私の住んでいた国につくわ。この星で  
は、十年に一回、戦争が行われるの。」

「十年に一回も！？」

「それで、負けると国の領土を奪われていくつてわけ。今回の戦争  
に負けると、私の国は渡せる領土がないから、国自体が他の国のも  
のになつてしまふの。」

「でも、戦争が行われているにしては静かじやないですか？」

「そりやあね。この星には戦争にもルールがあつて、お互に魔法  
を使って戦える国民を十人用意して、その人たち・・・計二十人で戦  
つて一人でも生き残つたほうの勝ちになるの。」

「もしかして美羽さんの国つて戦える人が十人いないとか？」

「ううん。十人はいるんだけど・・弱いのよね・・それで新戦力が  
欲しくて、私は自分自身を地球に召喚して、聰一君をこっちに連れ  
て来たつてわけ。」

「本当に俺なんかで戦力になるんですか？」

「さあね。ほら、ついたわよ。ここが、さつき言つた石碑のある洞  
窟よ。」

洞窟は、どう見ても、そんな特別な石碑があるよつては見えない。  
ただ、崖に穴があいている。

そんな感じだ。

美羽は洞窟の中に入つて行く。そのあとを追い、聰一も洞窟の中に  
入る。



## act 5 合成魔法

洞窟の中は、結構狭い。

湧水が壁を伝つように流れ、足下に少し水が溜まつていて。そして、真ん中に大きな石碑がある。

「さあ、この石碑の前に立つて。」

言われた通り石碑の前に立つ。

「・・・」

しかし、何も起こらない。

「何も起きませ・・・」

そう言い振り返ろうとした瞬間、地面が揺れ、石碑が光り始めた。

「うわ・・・」

光は、とても明るく、思わず目を閉じてしまった。

光が消えるのを待つ。

眼を開くと石碑には、とても長い文章が書かれている。

「美羽さん・・これ、なんて読むんですか・・・」

「ああ、これが聰一君の魔法の説明よ。

なにに、「この魔法、合成魔法。二つの魔法を合わせ、新たな力を生み出す。すなわち、この魔法、無限の力を持つ。」だつて。私の魔法の説明なんて、「風を操る魔法」だけだつたんだよ・・・

「そうなんですか・・それで、このあとは何をすれば・・・」

「うーん・・そうだね、じゃあ実際に魔法を使ってみようか。この森なら誰にも迷惑かからないし。」

「わかりました。」

洞窟から出ると、柚月がいた。

「そういえば、高梨の魔法つて、なんですか?」

「え?じゃあ実際に受けてみれば?柚月、魔法使ってみて。」

「わかりました」

急に体が重くなる。どんどん体が重くなり、立っているのがやっと

だ。

「ちよ・・どうなつてるんですか・・・」

「柚月、もういいよ。」

「はい。」

体の重さが元に戻ったようだ。

「これ、どんな魔法なんですか・・・」

「はははは、これはね、重力の大きさと向きを操れる魔法だよ。」

美羽が笑いながら言う。

「じゃあ、君の魔法も見せてください。」

不意に柚月に話しかけられる。

「ああ、聰一君の魔法は、これから試すつもりだから、ちよつと待つてで。」

「はい。」

「聰一君、ここだつたら洞窟があるから、少し離れましょ。」

五分くらい歩くと、あたり一面、木しかない場所に来る。

「ここなら、いいかな。じゃあ、やってみて。」

「でも、一つの魔法が必要なんじゃ・・・」

「そうね。じゃあ、私と柚月の魔法で試そうか。」

「いいですよ。」

「柚月は?」

「わかりました。では・・・

また体が重くなる。

「じゃあ、いくわよ。」

さらに美羽の魔法で強風が吹く。

風が聰一に当たった瞬間、重力は元に戻り、風も収まる。

そして、「オオオオ」という音とともに、聰一を中心に巨大な竜巻が起ころる。

竜巻は五秒ほどでおさまつ、まわりの木々はボロボロになっている。

「・・すじ・・・」

「え? 今、俺なにもしてないですよ?」

「コントロール無しで、この威力つて・・よし、今から、その魔法をコントロールできるように特訓するわよ。」

「全然、自信ないんですけど・・」

「大丈夫。私が教えるから。」

「一体、何回、美羽と柚月の魔法を合成したのだ？・・段々、慣れてきたため、威力を弱めることはできるようになってしまったが、強くすることができない。」

「怖がってるからダメなのよ。どうやら、合成する魔法の強さは関係ないみたいだから、聰一君次第なのよ？」

「わかりました。もう一回、お願いします。」

何度もやっているように美羽は強風を起こし、柚月は重力を大きくする。

「オオオオオー！」

合成後の魔法の形は竜巻のままだが、明らかに発生する瞬間の音が違った。

確実に竜巻の大きさは違った。

バキバキバキと、まわりの木々が倒れる音も聞こえる。

今まで五秒程だった竜巻の持続時間は十秒近くまで伸びている。

スウウウ

静かに竜巻はおさまり、まわりの様子を見る。

さつきまでは綺麗な植物でいっぱいだったはずなのに、荒野のようだ。

そして、美羽と柚月の姿が無い。

「美羽さん？高梨？」

「『』めん、『』めん。その威力じゃ、私たちも非難しないと危なかつ

たからや。」

「すいません・・・

「いいのよ。あと、今のが本氣だつた?」

「わからないです・・・

「そう・・それにして、すげに魔法ね。今の竜巻、並みの魔法使

いが命かけても出せないと思つよ。」

「そうですか・・・

「じゃあ、次は形状の変化ができるのか、やってみてよ。」

「どうやってやるんですか?」

「多分、威力を上げた時と同じ感覚だと思つけど?」

「わかりました。『威力』じゃなくて『形状』ですね。」

「よし、じゃあ柚月!」

「はー!」

今日だけで、何度この二つの魔法を受けたのだらう・・・

形状を変える・・そう思ひながら、また魔法を受ける。

今回は竜巻の発生音は聞こえなかつた。

スッ

かわりに、こんな音が聞こえる。

その瞬間、竜巻で倒した木々が正面にあるものだけ、真っ二つに斬  
れた。

「今度は、かまいたち・・・」

「なんとか、できましたよ・・・

「聰一君、本当にすごいわね。私の言ったこと、すぐにできるよう  
になつてる・・・

「ありがとうござります。次は、何をすればいいですか?」

「ああ、今日は、もういいわ。」

そう言つて、柚月を指差す。

柚月は、ハアハアと息を荒げて、とてもつらそうだ。

「まだ・・大丈夫・・です・・・

「大丈夫じゃないわ。あんまり、魔法使いすぎる、倒れるわよ?」

「・・・」

「さあ、今日は、もう帰りましょ。」

この星の時間経過も、ほとんど地球と同じらしく、空は少し赤くなつていた。

「あれが、地球で言う太陽ですか。」

「そうよ。本当にこの星は地球と似ているわ。」

そして、小屋に向かひ。

## act 6 組み合わせ

三人は、小屋に戻る。

美羽は夕食を作り、テーブルに並べる。  
テーブルの上に並べられている料理は白いスープ・・シチューに似  
ているような気がする。

「これ、なんの料理ですか？」

「この森に生えている植物で作ったスープよ。栄養もあるし、魔力  
回復にも役立つの。」

「そうなんですか。」

一口、食べてみると不思議な味がする。

不味いわけではないのだが、今までに食べたことのない味で・・  
とにかく不思議な味だ。でも、結構、美味しい。

「このスープ、美味しいですね。」

「そう? ありがとう。」

柚月は無言でスープを食べている。

「そういえば、聰一君の魔法について色々、考えてみたんだけど・・

「なにか、わかりましたか?」

「えーと・・まず、二つの魔法が絶対に必要。そして、新しく発生  
する魔法の「形状」は変えるけど、「性質」は、あまり変えれな  
いみたいね。」

「そういえば、竜巻もかまいたちも「風」の魔法でしたもんね。」

「うん。でも柚月の魔法である「重力」の性質が出てないとこりを  
考えると・・

「両方の魔法が新しく生まれる魔法に影響するとは限らない、とい  
うことですか?」

「それは、まだわからないわ。まだ「風」と「重力」の組み合わせ  
しか試してないからね。」

明日は、別の組み合せを試してみましょ。」

「わかりました。」

「そういえば、柚月は全然、喋っていないな。・

美羽さんに聞いてみようかな。」

「起きますか？」

「なに？」

柚月が眠った後、美羽に話しかける。

「高梨つて、俺のこと嫌ってませんか？」

「そんなことないわ。」

「でも・・全然、喋らないし・・」

「あら、もしかして柚月のこと好きになっちゃった?」

「そんなことありません!でも・・」

「大丈夫。心配するような」とじやないわ。」

「本当ですか?」

「うん。もう寝ましょ。」

「わかりました。」

「さあ、今日も色々、試したことあるんだから、もう起きてよ。」

「うう・・」

眼を開けると、テーブルには、もう朝食が並んでおり、柚月は椅子に座っている。

「いただきます。」

朝食は、パンとスープだ。

五分ほどで食べ終え、外に出る。

「昨日の様子を見ると、小屋の近くでやつたら壊されそつだから、少し離れたところに行こうか。」

「すいません・・」

また、五分ほど歩いたところに来る。昨日とは違う場所だ。

「じゃあ、まずは私の魔法と治癒系の魔法を合成してみましょうか。

」  
全然、気がつかなかつたが美羽の肩に小さな白い鳥が乗つている。  
「その鳥は・・

「ああ、私のパートナーみたいなものよ。治癒系の魔法を使つてくれ  
るから、怪我しても大丈夫よ。」

「で、今回は、その治癒魔法と風の魔法を合成すると・・」

「うん。じゃあ、さっそくいこう。」

いつもどおり、強風が起きる。

白い鳥の羽根が緑色に輝き、聰一の体も緑色の光に包まれる。

その瞬間、辺り一面から緑色の光が溢れ出す。

「すうい・・森が喜んでるみたい・・

「キレイ・・」

柚月が初めて喋つたような気がする・・  
いや、初めて会つた時に少し喋つてたか・・

「すういわね。どうやら、治癒魔法の範囲を広げる感じのようにな  
」

「でも、敵も治癒させちゃうんじゃ・・

「だいじょうぶよ。たぶんだけど・・

「なんですか・・それ・・

「やっぱり、攻撃系の魔法を合成しないとダメみたいね・・

よし、ちよつとつこてきて。」

言われた通り、美羽についていくと小さな集落につく。

「ここわね、どの国にも在籍せずに生活をしている人々の集落よ。皆、優れた魔法使いだから、自分たちの身は自分たちで守つて生活しているのよ。」

「何で、ここに連れて来たんですか？」

「ここには、姉がいるのよ。」

「そうなんですか・・どんな魔法を使うんですか？」

「氷の魔法よ。氷璃<sup>ひょうり</sup>って言う名前なんだけど、すごい魔法使いでね。まだ、私と一緒に住んでいたころに国で強盗殺人が多発してたので、その犯人を見つけ出して、三十人くらいの盗賊団だつただけで、全員を氷像にしちゃつてさ。」

「氷像・・三十人つて・・」

「それも、一瞬で。氷璃が本気のなれば、国ひとつは氷づけになるわね。」

「そんなに怖い人なんですか？」

「怖くないわよ。『怒らせたら』やばいけど。」

「怒らせたら・・つて」

「大丈夫よ。そう簡単に起ころるような人じゃないから。ほら、ついたわよ。ここが氷璃の家。」

「ゴクッ・・」

「そんなに緊張しなくてもいいよ。」

建物 자체はテントのようなつくりになつていて、玄関のところにある布をめぐり、中に入る。

「氷璃ー、いるー？」

「はーい、ちょっと待つてー」

奥から声が聞こえてくる。

「ごめん、ごめん。ちょっと、洗濯してさ。お?そつちの男の子

と女の子は？

「ああ、聰一と柚月だよ。そういえば柚月も氷璃に会うのは初めてだつたね。」

「はい。よろしくお願ひします。」

「よろしくね、柚月ちゃん。で、聰一君かあ・・・」

「よろしくお願ひします。」

「はははは、なんか、かわいい子だな。」

「え？」

かわいいなどと、言われたのは初めてだ。どう見ても、かわいいといふよりは怖いとかだと思つんだけど・・・

「それで、なんの用？」

「そうね、聰一君の魔法の練習に付き合つてほしいの。」

「ふーん・・・」

氷璃は聰一をジッつと見つめる。

「どんな魔法を使うの？」

「合成魔法よ。」

「合成？ どんなの？」

「一つの魔法を合成して新しい魔法を作り出すっていう魔法。」

「へー、おもしろそうな魔法ね。その練習に私が必要な理由は？」

「まだ、柚月と私の魔法を合成させたことと、治癒魔法と私の魔法を合成させたことしかないのよ。それで、氷璃の魔法も合成させてほしつつのこと。」

「いいわよ。そのかわり、美羽は私と勝負ね。」

「・・・しあうがないわね。」

「じゃあ、さつそくいこつか。」

なんで、美羽さんと氷璃さんが戦うことになるんだよ・・・

「聰一君・・・」

「え？」

柚月に初めて話しかけられたため、思わず驚いてしまった。

「な、なに？」

「美羽さんと氷璃さん、どっちが勝つと思つ?」

「…氷璃さんじゃないの?」

「やっぱり、そうよね…」

「この後、聰一と柚月も氷璃の家から出る。」

集落の人々も集まり、美羽と氷璃を円形に囲むようになつてゐる。

「美羽と勝負するなんて、本当に久しぶりね。」

「そうね。負けないから。」

「どうかな。」

美羽の頭上に巨大な氷の塊が出現する。

「美羽さん!上!」

「わかつてゐるわよ。」

美羽は身軽な動きでバックステップをし、氷をかわす。

そして、風を起こし、氷を粉々に砕き、その破片を氷璃に向けて飛ばす。

「無駄、無駄!」

氷璃の前に氷の壁が発生し、氷の破片を弾き返す。

「氷璃、手加減はやめてよ。」

「美羽もね。」

ヒュー・・美羽の表情が変わり、風の動きは美羽を中心下に渦を巻くような形になる。

さらに、空氣中に光る粒がたくさん浮き、氣温が一気に下がる。光る粒は美羽の体に纏わりつく。

「ウゥツ・・」

風の動きは無くなり、美羽の苦しむ声が聞こえる。

「私の勝ちね。」

氣温も元に戻り、空氣中の光る粒も無くなる。

「それでも…ないわよ…」

氷璃の着ていいる服が斬られ、下着が丸見えになつている。

サツ・・

「へえー、結構、強くなつたんじやん。」

氷璃は胸を隠しながらこいつ。

「じゃあ・・聰一君の練習に・・付き合つてもうひつわよ・・

「いいけど、着替えさせてね。」

美羽は相当、無理をしていたようだ。

それに対し氷璃は、まったく疲れている様子がない。

「聰一君、君も来てくれる?」

「え?」

「だから、着替えてから、ついて来てつて言つてるの。」

何を言つてるんだ、この人は・・

「わかりました・・」

よく、わからないが、すごい魔法使いなのだから、なにか考えがあるのだろう。

「じゃあ、美羽と柚月ちゃんは、待つてね。」

こうして、もう一度、氷璃の家に向かうことになる。

「じゃあ、着替えてくるから。・・のぞかないでね。」

「そんなこと、しませんよ!」

「はははは、聰一君は、おもしろい人だね。」

なんだよ・・この人・・見た目は超美人なんだけど・・

「終わつたわよ。それで、君を呼んだ理由なんだけど・・

「あまり、からかわないでください・・」

「ごめん、ごめん。それでさ、君の魔法について聞きたいんだけど・・

・

「すいません・・俺も昨日、こいつの世界に来たばかりで、なに

もわからないんです。」

「じゃあ、このあと、練習のときに確認する」とありますわ。  
じゃあ、行きましょうか。」

「はい」

聰一と氷璃は、家から出て美羽と柚月の待っている場所に向かう。

act7 幽崎氷璃（後書き）

やつと、新キャラを出せました。  
登場人物、少なすぎますよね（笑）

## act 8 パートナー

「遅かったわね。早く練習、始めましょ！」  
「そうね。少し離れたところでやるわよ。この集落に被害が出たら  
大変だから。」

この集落に来る前に練習をしていた場所に来る。

「じゃあ、早速、氷璃と私の魔法を合成してみて。」

「わかりました。」

「じゃあ、いくわよ。」

強風が起る。

「私は、何をすればいいの？」

「聰一君に魔法を当てる。ちゃんと加減してよ。」

「わかつてゐるわよ。」

気温がどんどん下がっていく。

「オオオオ！」

一つの魔法が聰一の体に当たると、吹雪が起きる。  
美羽と氷璃が魔法を止めたため、すぐに吹雪はおさまったが、まわりの木々が凍りついている。

「・・全然、コントロールできませんでした・・・」

「なんで？ 私と柚月の魔法でやつたときは、できただじやん。」

「わかりません・・・」

「もしかして・・次は柚月と氷璃の魔法でやつてみひよ。」

「え？ 私ですか？」

「うん。もしかしたら柚月の魔法が聰一君がコントロールできるようにしてるかもしれないって思つてさ。」

「わかりました。」

「氷璃も、いい？」

「うん？ あ、はいはー。」

また、気温が下がり、体も重くなる。

パツ！

一瞬、強烈な光が発生し、眼を閉じてしまつ。

もう一度、眼を開けると、まわりには光る粒が大量に舞つてゐる。

「キレイ・・」

美羽が呟く。

段々、空気中の光る粒は消えていく。

「今度は、コントロールできましたよー！」

「じゃあ、やつぱり柚月の魔法が影響してゐるみたいね。」

「はい。」

「・・・」

「どうやら、聰一君と柚月ちゃんの魔法は相性がいいみたいだし、パートナーになれば？」

「パートナーって・・」

「うーん・・一番、相性のいい魔法使いがペアを組むつていづ」とよ。

「それは、わかります。でも・・」

「柚月ちゃんじゅ、いやなの？」

「そうじやなくて・・俺、高梨と話した事ないし・・」

「大丈夫。あくまでも「魔法」の相性がいい二入組だからさ。」

「・・聰一君がよければ、私は・・いいよ・・」

あれ？ 高梨が顔、赤くしてゐる・・かわいいし・・

「ほら、柚月ちゃんも、こう言つてることだし。」

「わかりました・・」

「まさか、こんなに速くパートナーが決まるとはね。」

「・・聰一君、よろしくね。」

高梨が手を出している・・握手、したほうがいいのかな・・

「よろしく・・」

静かに柚月の手を握り、握手をする。

柚月は、嬉しそうにしながらも顔を赤くしてゐる。

「パートナーになつたら、なにか、いいことがあるんですか？」

「正式なパートナーになるには、教会に行って、儀式みたいなものをしなくちゃいけないんだけど、正式なパートナーになると、お互いの魔力を共有して、さらに強力な魔法を使えるようになるわ。」

「それって、すごいじゃないですか。」

「うん。だから私もパートナー欲しいんだけど、なかなか、いい人がいなくて・・・」

「氷璃さんと組めばいいじゃありませんか。」

「氷璃には、もうパートナーがいるから、ダメなのよ。」

「氷璃さんのパートナーって、どんな魔法を使うんですか？」

「そうね・・・簡単に言うと自然を操る魔法かな。私より遥かに強いわ。」

「え？ 氷璃さんより、強いって・・・」

「彼も、君たちと同じで地球から来た人なのよね。今は地球に帰つてるから、会えないけど、戦争のときは、帰ってくると思うわ。」

「そうですか・・・」

「そういうえば、柚月ちゃんの魔法のこと全然、聞いてなかつたわね。」

「私は・・・重力を操る魔法です・・・」

「すごいじゃない。もつと自信、持つたほうがいいよ！」

「でも、私の魔法・・・地味ですし・・・」

「そんなこと、ないわよ。すごい実用的でいい魔法じゃない。」

「・・・」

「大丈夫よ。そのうち自分の魔法のすばらしさに気づけるわ。」

「そうですか？」

「うん。私も最初は自分の魔法が嫌だったから・・・」

「なんですか？あんなにキレイな魔法なのに・・・」

「子どものころから、私の魔力が大きくて自分でも制御できないほどだったの。」

それで、まわりの人たちに「寒いから近づかないで」とて言われちゃつてさ。

今じゃ、血櫻の魔法だけだね。」「

「なんか、すいません・・・」

「いいのよ。もう、お昼だし、つむぎに来て『ご飯、食べない?』

「いいんですか?」

「うん。」

「ありがとうございますー!」

今日だけで柚月と氷璃は、とても仲良くなつたようだ。

そして、食事を済むために、もう一度、氷璃の家に向かつて立てる。

「おお、めひゅくひゅ 美味い！」

「そう? ありがとう。」

「・・・」

珍しく美羽が黙つたままだ。

「うーん、こういう味付けが・・」

小声でなにかを言つてゐるようだが、本当に静かだ。  
昼食を食べ終えたあとも少し、話をしている。

「聰一君の魔法つてさあ、単体だつたら、なんの役にも立たないよね。」

「・・・言われてみれば、相手の魔法だけだつたら、なにもできませんね・・」

「そのために、柚月がいるんじゃない。」

美羽が口を開いた。

「・・私は・・なにもできませんよ・・」

「柚月ちゃん、もつと自信を持つたほうがいいよ?」

聰一君には、一つ目の魔法を使ってくれる人が必要なようだし、君には自身を持つことが大事よ。」

「そうだよ。高梨の魔法がないと、俺の魔法なんて制御が効かないんだから。」

「・・ありがとうございます。」

美羽が氷璃のもとへ聰一と柚月をつれてきた理由は、聰一の魔法の性質を確認するためではなく、柚月にも自身をつけてしまつたためでもあつた。

柚月の魔法は、とてもよいものなのだが、使い方を考えなくては、ただの宝の持ち腐れだ。

だからこそ、自信を持つてもらい、さらにもうばらしき魔法に進化させていってほしいと思つたのだ。

「そういえば、聰一君の魔法って単体だつたら無力同然だよね。」

「・・・気づかれましたか・・でも、信頼できるパートナーができたので大丈夫です。」

信頼できるパートナー・・・こんな言葉使える日が来るとは思わなかつた。

しかし、これは紛れもない事実だ。

柚月は顔を赤くして、下を向いている。

「よし、そろそろラグの国に行きますか。氷璃も久しぶりにビッグ・

「ラグの国つてなんですか?」

「私と氷璃が生まれ育った国よ。

そして、地球を守るためには、この国を戦争で勝たせなくてはいけない・・

だから、君たちの魔法は戦争のために使わないといけなくなるけど・・

「覚悟はできています。」この世界に来たのは、地球を救うためなんですから。」

「そう・・・」

初めは聰一のことを頼りなさそうだと思つていた美羽だが、今の聰一を見ていると、

地球だけではなく、この星も「救つて」くれるような気がしていた。「じゃあ、氷璃も来るよね?本当は氷璃にも戦争で戦つてほしいんだけど・・」

「いいわよ・・・和彦も、やるって言つたし・・」

「和彦・・つて誰ですか?」

「氷璃のパートナーよ。本当は和彦さん一人で戦争に勝てるんだけどね・・」

「そんなに強いんですか?」

「うん。じゃあ、和彦は後で、この世界に来るみたいだし、先にラグの国に行きますか。」

「わかりました。」

「はい。」

「じゃあ、ちょっと待つてね。」

氷璃は食器を台所に持っていく、しつかりと洗う。

「じめん、じめん。じゃあ、行きますか。」

聰一、柚月、美羽、氷璃の四人は、ラグの国へ向かつ。

森の中を進み続けると、急な下り坂になる。

この下り坂付近は森の中より、植物や木などが多い。  
そして、坂の下を見ると、とても巨大な都市が見える。

真ん中には、かなりの高さがあると思われる塔があり、その下には町が広がっている。

「すごく、大きな国ですね。」

「うーん・・・そうかもしだけど、この星では小さい方なんだよね・・・

そもそも星自体の大きさが地球の三倍近くあるしな。」

「三倍・・・

「そうよ。だから国の数も、いくつあるか、私もわからないのよね。」

「そんな数え切れないほどの国と戦争するんですか?」

「そうよ。」

美羽は平然と言つ。

ラグの国の入り口につき、そのまま中に入る。

「パスポートとかは必要ないんですね?」

「パスポート?」

「地球では国と国を行ったり来たりするのに必要なんです。」

パスポートの話をしているとき、聰一には、一つの疑問が生まれた。  
一つ目は、なぜ、いつの世界の人が日本語を話しているのかとい  
うこと。

もうひとつは、パスポート無しで国に入れるのに、なぜ戦争が起き  
るのかということだ。

「じゃあ、早速、教会に行つて正式なパートナーにならうか。」

「俺は、いいんですけど・・・」

「私もいこよ。」

少し、街中に入つてみると、すぐに教会がある。

「教会があるっていいことは、この世界にも神を信仰する習慣があるんですか？」

「ううん。この世界の人たちが信じるのは、「自分自身」よ。魔法は自分を信じることによつて、さらに強力なものになるつて言われてるの。

だから、教会に来る人は、自信を持つためとか、パートナーを決める時は、

「パートナーを信じる」「とを誓うのよ。」

「なんか、不思議ですね。」

「神」じゃなくて「自分」を信じる・・か。」

「そうよ。じゃあ、中に入るわよ。」

教会の作りは、地球のものと特に変わらない。

しかし、ひとつ大きな違いがひとつある。

「神を祀つていない」ことだ。さらに、「神父もいない。

「あの・・なにをすればいいんですか?」

パートナーになるための儀式みたいなもの・・

美羽からは、それしか聞いていなかっため、何をすればいいかわからぬ。

「もつと、奥に行けばわかるわ。」

美羽に言われたとおり、奥に行くと台の上に、とても厚い本が置いてある。

その本は真ん中あたりのページが開いてあり、何も書かれていない。

その横には一本の黒い万年筆が置かれている。

「その本に一人の名前を書いて。」

そして、パートナーとなり協力しあうことを誓うのよ。」

言われたとおり、二人の名前をノートに書く。

そうすると、本が光出し、どこからか声が聞こえてくる。

「二人はパートナーとなり、協力し合うことを誓うか。」

「はい。」

「はい。」

聰一と柚月の声が重なる。

光は少しづつおさまる。

もう一度、本を見ると、さつき書いたはずの名前が消えていた。

「これで、パートナーになるための儀式は終わり。」

「あの・・名前が消えたんですけど・・」

「それで、いいのよ。」

あの本は、この世界の魔法を司る塔・・マグメントに情報を送るための本なの。

だから、さつき書いた文字は情報としてマグメントに送られたのよ。

「そうなんですか・・」

あまり意味がわからなかつたが、そんなに必要な情報とは思わなかつたので、詳しいことを聞かなかつた。

「じゃあ、教会の用事も済んだことだし、そろそろ行こうか。」

四人は、教会から出る。

「このあとは、なにをするんですか?」

「そうね、王に会いに行きましょうか。」

「え?」

「別に大丈夫よ。『戦争に協力する』って言えば。」

「・・そういうえば戦争って、いつからですか?」

「五日後よ。聰一君は、人を殺したことある?」

「あるわけないじゃないですか・・」

「そう・・それでも戦争に参加するって言つて?」

「はい。地球を救うために来たんですから。」

「じゃあ、地球のために、人を殺せる?」

「・・・」

「まあ、いいわ。私も敵を殺すつもりは無いから。」

「

「・・・じゃあ、なんで聞いたんですか?」

「さあ、なんでだろうね。でも、私の思ったとおりの言葉が帰つて  
来たから、いいわ。」

「そうですか。」

「うん。じゃあ、王のところに向かいますか。」

四人は、歩き始め、王の住む塔へ向かう。

## act11 和彦と王

ザワザワ・・

「あれって、幽崎氷璃だよな？」

「帰つて来たのか・・」

「これで、この国は安心だね。」

四人が道を歩いていると氷璃を見て、まわりが騒がしくなる。

「氷璃さんつて、有名人なんですか？」

小声で美羽に聞く。

「そうよ。この国にとつては救世主みたいなものだからね。」

「そなんですか・・」

「おお、氷璃じゃねーか。」

美羽と小声で話していると、横から男の声が聞こえた。

「お? 和彦じやん。もう来てたんだ。」

「おう。そつちの三人は、誰だ?」

「妹と、あの、二人は、あなたと同じく地球から来た人たちよ。」

「そうか。よろしく。俺は、仙台和彦せんだい かずひこだ。」

和彦は、とてもいい体つきをしており、すぐ喧嘩けんかとかが強そうだ。

顔も少し怖いような気がする。

しかし、喋り方からは、なんとなく優しさを感じる。

「森嶋聰一です。」

「高梨柚月です。よろしくお願ひします。」

「氷璃の妹の美羽よ。」

「聰一、氷璃に手出したら許さねーから。」

「は、はい！」

この言葉には、とてつもない殺氣を感じた。

「それで、お前らは、なんで地球から、こっちの世界に来たんだ?」

「地球を救うためです。」

聰一は迷つことなく答える。

「ほう・・どうやら本気みたいだな。俺も同じ目的だ。」

「和彦さんも戦争に参加するんですか？」

「そうだ。目的も同じだし、一緒に行動してもいいか？」

「僕は構いませんが・・・」

「いいわよ。今から王に会いに行くから。」

「そうか。では行くとするか。」

和彦を加え、五人になつた聰一たちは、王のもとへ向かう。

「ここに王が住んでるんですか？」

王が住んでいる塔、それは国に入る前に森から見た一番大きな塔のことだった。

「そうよ。王でも塔の全体を使えるわけじゃないんだけどね。」

「なんで、ですか？」

「そのうち、わかると思つわ。」

「そうですか・・・」

「じゃあ、入りますか。」

塔の入り口を入れると、とても広い空間になつてている。

奥の方には、階段があり、さらに上に続いている。

「王は、どこにいるんですか？」

美羽は近くにいた兵士のような格好をした男に聞く。

「王に、なにか用か？」

「ああ、戦争のことで。」

「そうか・・ならば、その階段を上がり、王の間に入れ。王様は、そこにいる。」

「ありがと。」

言われたとおり階段を上り、王の間に入らざる。

「止まれ。」

王の間の扉の前に一人の兵士がいる。

彼らの腰には、魔法の世界のはずなのに剣が携えてある。

「王に用があるのだが。」

「・・しばし待たれよ。」

兵士の一人が王の間に入り、二分程度経つと戻つてくる。

「王様から許可が出た。」

そう言うと一人の兵士は王の間の扉を開け、五人を王の前まで連れていく。

「なんの用だ。」

「戦争に参加したい。」

「なに?」

「私たちは本気だ。」

美羽の話し方は、王に対する態度とは思えないほど強気だ。

「そうか・・ならば、お前ら五人の参加を認めよう。」

「ありがとうございます。」

「お礼を言うのは、こっちだ。他に用はあるか?」

「いや、もう無い。では。」

美羽は回れ右をして、四人に「ついて來い」という態度で王の間から出る。

そのまま王が住んでいる塔の出口まで行く。

「ふう、緊張したー」

どうやら美羽も緊張していたらしい。

「一つ気になつたんですが、なんで簡単に僕たちの参加を認めてくれたんですか?」

「前に、この国が戦争に負けてしまう理由、教えたよね?」

「はい。戦える人はいるけど、弱いつて・・」

「王の間に前にいた兵士って武器を持っていたよね？」

「そういえば、剣を持っていましたね。」

「あれは、魔法じや犯罪者の一人も捕まえられないからよ。もともと、この国は皆で暮らすためだけの国だったの。

だから國の人たちが使える魔法は生活のための魔法ばかりなのよ。それを戦争のときは、無理矢理、攻撃の形にして使うだけだから、勝てるわけがない。

さらに普段は戦うこともない。だから身を守る方法もわからない、つていうこと。」

「確かに、戦争に参加するのは十人ですよね？」

「じゃあ、俺たち以外の五人はどうなるんですか？」

「國民や兵士の中でも戦える人を使うんじゃない？」

「そうですか・・・」

「ねえ、こつまでも喋つてないで進もうよ。」

氷璃が言つ。

柚月と和彦も「早くしろ」というような顔で見ている気がする。「わかったわよ・・・」

五人は歩き始める。

「これから、どこ行くの？」

「美羽の家だよ。」

「なんで、うちなのよ・・・」

「この國に住んでるの、あんただけでしょ？」

「しようがないわね・・・」

「美羽さんつて森の中の小屋に住んでるんじゃないんですか？」

「あの小屋は、魔法の練習をするときに泊る小屋よ。」

「なあ、氷璃 こいつらの使う魔法ってなんなんだ？」

和彦が口を開く。

「美羽の家についたら説明するわ。あと、戦争のときの戦い方もね。」

「

「 そ  
う  
か  
・  
・  
」

五人は、話しながら美羽の家へ向かう。

## act12 戰争のルール

美羽の家は、日本のどこにでもあるよつた一軒家で、結構、綺麗な家だ。

「じゃあ、まずは戦争のルールについて説明するわ。」

戦うことに関しては、氷璃が一番詳しい。

過去に戦争に参加した経験もある。

「まず戦争についてのルールだけ、覚悟してね。もしかしたら、腹が立つかもしれないから。」

「大丈夫です。」

「私も・・覚悟はできてます。」

「速く、教えてくれよ。」

「まず、この星で戦争が行われている理由だけ、領土の奪い合いなの。」

十年に一度、戦争が行われるわ。私も十年前に参加したんだけどね。それで、この戦争は、この星のルールみたいなものだから、どんなに仲の良い国どうしでも戦争をしなくてはいけないの。

「ここまでいい?」

「はい」

「はい・・」

「おう」

「次は戦争のルールよ。」

お互に十人の魔法使い、もしくは戦える人を出すの。

その人たち、戦争の会場・・わかりやすく言つとスポーツのコートみたいなところにつれていかれるわ。

そのコート内で、集められた人は戦う。

勝つための条件は、相手を全員、殺すか戦闘不能にすること。

降参は認められていないわ。」

「なんですか、そのルール!ゲームみたいじゃないですか!」

「そうよ。私もルールを聞いただけで腹が立つたわ。  
でも、今回は本気で勝たないといけない。そうでしょ？」

「はい・・・」

「じゃあ、次は戦い方を考えるわ。最初に何か聞きたいことはある  
？」

「三人の魔法を教えてくれ。」

「あ、そつか和彦は私の魔法しか知らないんだもんね。  
うーん・・一人ずつ自分の魔法を説明してもらおうかな。」

「じゃあ、私から。」

私の魔法は風を操る魔法よ。遠距離攻撃が得意かな。」

「次は俺が・・合成魔法です。二つの魔法を合わせて新しい一つの  
魔法を作り出す魔法です。」

「なんだよ、それ・・すごいじゃねえか。」

「ありがとうございます。」

「えつ・・えと、私は重力を操れます。」

「なんで、お前らは、そんなすごい魔法を使えんだよ・・  
俺なんて、植物だぜ？」

「でも、あなたの魔法、応用の幅が広すぎて恐ろしいのよね・・  
これで、皆の魔法がわかつたことだし、戦い方を説明するわ。  
まず、和彦は私たち以外の五人を守ること。いい？」

「戦わなくていいのか？」

「うん。あんたが本気出したら国が崩壊するからね。  
いい? 守るだけよ。攻めちゃダメだから。」

「わかったよ・・・」

「柚月ちゃんは私たちの補助を頼んでいい?」

「ど・・どんなふうにですか?」

「相手にかかる重力を大きくしてくれればいいわ。」

「わ、わかりました。」

「私と美羽は攻めるから。」

「あのー、俺は何をすれば?」

「君は攻めの要だから。よく聞いてね。」

「はい。」

「柚月ちゃんの魔法が届く範囲の最前線で戦つてもいいわ。  
相手の使った魔法は、できる限り合成すること。  
いいわね？」

「わかりました。」

「まあ、余裕で勝てると思うけどね。」

もし危なくなつたら、和彦も攻めに力を入れてもらつかうから。」

戦争のための作戦は完成した。

戦争までは、あと五日ある。

十分に戦い方を練習する時間があるというわけだ。

そして、五人は戦争が終わるまで美羽の家に滞在することにした。

## act13 吸収と合成

「とりあえず、実戦で試してみますか。」

氷璃の提案で、もう一度、森の中で特訓をすることになった。  
王に戦争への参加を言った次の日だ。

戦争まで、あと四日。

五人は森の中で、なるべく木の少ないところに行く。

「じゃあ、始めますか。

とりあえず、聰一君と和彦が戦つてみて。

そうそう、聰一君は柚月ちゃんがないと戦えないから、柚月ちゃんは合成をさせるだけね。じゃあ、始めて。」

「聰一、俺に勝つ自信あるか？」

「ありませんよ・・・」

「そうか。俺は手加減するつもり無いからな。

お前も全力で来いよ。」

「わかつてます」

「サツ！」

和彦は聰一の懷に飛び込み、一発強烈な打撃を繰り出す。

「ゴホッ・・ゴホッ・・」

その打撃は聰一の腹部に直撃し、膝をついてせき込んでしまう。

「ストップ！」

「え？」

「和彦、喧嘩の練習じゃないんだから魔法、使ってよ。」

「すまん、すまん。地球にいるときは魔法を使わないよ」としてゐる  
せいでさ、普通に殴りかかっちゃったよ。」

「聰一君、大丈夫？」

「は・・はい。」

「じゃあ、もう一回。今度は魔法、使ってよ。」

「はいよ。」

サツ！

和彦は、さつきと同じように懐に潜り込んでくる。  
しかし、雰囲気がまったく違う。

「！」

和彦は、あと少しの所で腕を止め後ろに下げる。  
「なんだよ・・その魔法・・俺の魔力が吸い取られるような感じが  
したぞ。」

「え？でも、まだ合成はしてませんよ。」

「なるほどね。」

「なにか、わかつたんですか？」

「聰一君に、私が攻撃魔法を使った時のこと覚えてる？」

「前に、魔法の特訓をしていたときですか？」

「そうよ。あのとき使った魔法って当たれば結構、ダメージを『え  
られるんだけど、

聰一君は全然大丈夫そうだったよね？」

「はい。気づいたら合成が始まつていて・・」

「それでも、合成する前にダメージがあるはず。

それで私が思ったことなんだけど、魔法を合成する前に魔法を聰一  
君が「吸收」してるんじゃないのかなって。」

「吸收・・ですか・・」

「そうよ。もし、これが本当だとしたら聰一君は魔法が相手だった  
ら無敵つてことだよね？」

「そう・・なるんですか？」

「多分ね。じゃあ、試してみましょうか。」

「なにをすればいいですか？」

「柚月ちゃん、聰一君に魔法を使ってみて。」

「は・・はー」

柚月が魔法を使うと聰一は体が重くなるのを感じる。

「柚月ちゃん、もつと強く。」

「わかりました。」

重力が大きくなるのを感じる。

しかし、柚月は魔法を強め続けているはずなのに重力は段々、元に戻る。

「あ・・あれ？」

「どうしたの？」

「魔法が・・使えなくなりました・・」

「大丈夫よ。聰一君に全部、吸収されただけだから。

聰一君、なんか感じない？」

「なんていうか・・不思議な感じです。」

「今から私が魔法を使うから、吸収した魔法と合成してみて。」

「やつてみます。」

氷璃が魔法を使うとき、まわりの気温が少し下がる。

そして、氷の粒が浮き上がり、聰一に向かつて飛んでいく。

氷の粒は聰一まで、あと二三十センチほどのところで、渦を巻きながら消えていく。

氷の粒は消えたあと聰一のまわりに、もう一度出現する。

「今、出ている氷は操れます。」

「そう。じゃあ、一回ストップ。」

氷の粒は全て消える。

「次は、一つの魔法を吸収したままの状態を保てるか試してみて。今のは、私の魔法を吸収したあと、すぐに合成したでしょ？」

「はい。」

「柚月ちゃん、一つ目の魔法ようしぐね。」

「はい。」

さつきと穴時ようとに柚月は少しずつ魔法を強くしていく。

「もういいですか？」

「いいわよ。次は私の魔法よ。すぐに合成しないで一回、吸収したままの状態を保ってね。」

氷璃も、さつきと同じように冷気を発生せながら、氷の粒を作り出す。

聰一に向かって飛ぶ氷は、渦を巻くように消えていく。

そのあと、聰一のまわりに氷は発生しなかつた。

「どう?..」

「わかりません‥でも、これでいいんですね?」

「うん。次は吸収した二つの魔法を合成してみて。」

「やってみます。」

聰一が合成を始めようとすると、氷璃が魔法を使いつとあと回じようひかけられて氷の粒を作り出す。

そのあとに発生する氷の粒も氷璃のものと似ている。  
「なんか、目の前で自分と同じ魔法を使われると不思議な気分になるわね。」

「このあとは、どうすればいいですか?」

「そうね‥私に向けて氷を飛ばして。」

「‥わかりました。」

氷璃が言うのだから、なにか考えがあると思い、氷の粒を飛ばす。氷璃は身を守るための氷の盾を作り出す。

聰一が飛ばした氷の粒は、氷の盾に連続して当たる。  
最後の一粒が当たったとき、氷の盾が粉々に割れた。  
「すごいじゃない。私が使ったときの氷の粒だったら、この盾に傷すらつけられないのよ。」

「多分、高梨の魔法と合成したからだと思います。」

「そうね。二つの魔法の魔力が合成されて、さらに柚月ちゃんの魔法のおかげで

氷の硬さや形を変えることも可能だからね。」

「はい。やつにえれば美羽さんと和樹さんは？」

「おこひで戦っているわ。聰一君と柚月ちゃんに魔法の使いかたを

教えるのは私で

美羽と和彦は、実戦をして新しいことを見つけてるのよ。」

「そりなんですか・・」

「もしかして、気になる?」

「はい。」

「見に行こうか?」

「いいんですか?」

「うん。柚月ちゃんも、それでいい?」

「はい。」

「はい。」

## act14 柚月の魔法

美羽と和彦が戦っているといひに近づくにつれて、強風が吹き荒れ、地面が少し揺れている。

「な・・なんですか・・」この風と揺れは・・

「美羽も和彦も派手にやつてるわね。」

「なんで落ち着いていられるんですか・・」

「見てみ。」

氷璃が指さす方向を見ると美羽と和彦が派手に戦っている。

しかし、一人の表情は、とても楽しそうだ。

「多分、聰一君じゃ、あの一人の本気の魔法は吸収できないと思うわ。」

そのとき、戦いに動きがある。

和彦は聰一の懷に潜り込んだときと同じように、美羽の懷に潜り込む。

攻撃が当たるとかと思つた瞬間、美羽の体が消えている。

そして、背後に回り込んだ美羽は和彦の頭をめがけて蹴りを繰り出す。

和彦はそれも、わかつていたかのように左腕を上げ、蹴りから身を守る。

「なんで一人とも魔法を使わないんですか？」

「使つてるわよ。美羽は移動のために、和彦は防御のためにね。」

「・・攻撃には使わないのは、なんですか？」

「移動と防御のためにしか使つてないのに、これだけの強風と搖れが起きてるのよ？

「人が本気で戦つたら森はぐちゃぐちゃになるし、お互いに命の危険もあるからよ。」

「・・・」

思わず言葉を失う。柚月も驚いているような表情をしている。

急に、さつきまでの強風と揺れがおさまる。

「皆、来てたんだ。」

戦いを中止して、美羽が聰一たちの方を見る。

「うん。一人とも、なにか新しいこと見つけた?」

「和彦さんは、魔法、使わない方が強いっていうことかな。そつち  
は?」

「聰一君の魔法に大きな進展があつたわ。それより、和彦が魔法、  
使わない方が強いっていうのは、どういうこと?」

「さあね。とにかく魔法を使うと隙だらけになるのよ。だから、魔  
法を使うのは防御のときだけが一番いいと思うの。」

「そう・・・和彦は自分で、どう思う?..」

「・・美羽の言うとおりだよ。」

「じゃあ、色々な防御の形を考えてみたら?相手によつて使う魔法  
は違う訳だし。」

「わかつた。美羽、もう一回、付き合つてくれよ。」

「はいはい。」

「あの二人、ずいぶん仲良くなつたみたいね。」

「そうですね。」

「次は柚月ちゃんの魔法を鍛えましょーか。いい?」

「は、はい。」

「俺は、なにをすればいいですか?」

「これから考えるわ。」

さつきまで合成魔術の特訓をしていたところに聰一、柚月、氷璃の  
三人で向かう。

「柚月ちゃんにやつてもらいたいことは、重力を地面に向かつて強  
くするんじやなくて別の方方向にも使えるよつになつてほしいの。」

「あの・・もう、できます・・・」

「え？本当に？」

「じゃあ、どのくらいの強さの重力なら発生させれるかやってみて。  
「何に重力をかければいいですか？」

「そこにある岩でいいわよ。

手加減しないで本気でやってね。」

柚月は指定された岩に近づく。

岩の大きさは、柚月の膝くらいまであり、丸い形をしている。

柚月が魔法を使い始めるとき、岩は

ズズズズツ！と音をたてながら、地面にめり込んでいく。

「す・す・すごいわね・・・

「そ・そ・そんなことありません・・・」

「本当にすごいわよ！見方に、こんなすごい魔法使いがいるなんて、  
すごく心強いわ。」

「でも、重力ですよ・・・」

「重力だからいいのよ。相手の動きを制限できるし、  
味方につかむる重力を小さくすれば、味方は動きやすくなるし。  
すばらしい魔法だと思わない？」

「そうですか？ありがとうございます！」

柚月は、すごく明るい表情になる。

それぞれ新しいものを見つけて特訓を続ける。  
そして、日が暮れると美羽の家に行き、休息をとる。  
こうしている間に戦争に刻一刻と近づいていく。

戦争の前夜、聰一は眠れずにいた。

氷璃や美羽、和彦がすごい魔法使いだとこいつとは身をもつて体験しているわけだし

心配は、なにもないはずなのだが、柚月のことが心配だった。ずっと無口で、どんな人なのかも、あまりわかつていない。

「今から、柚月のところに行こうか・・・」

そもそも思つたが、もう遅いので、やめることにした。

そのとき、聰一の寝ている部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「はい。」

「こんな時間にすいません・・でも、どうしても聰一君と話したくて・・」

「・・どうぞ」

この声は柚月の声だ。つまり部屋に来たのは柚月といふことだ。  
ちゅうじゅう柚月のところに行こうと思つていたときに柚月が来る。  
こんなに良いタイミングなのは偶然なのだろうか。

「夜、遅くに」「めんなさい」。でも聰一君と話しておきたくて・・

「いいよ。俺も高梨のところに行こうと思つてたし。」

「そうなんですか。あと・・柚月って呼んでくれませんか?」

「うん。じゃあ柚月も敬語、使うのやめて。」

柚月は「クツツと小さく頷く。

部屋は暗いため、顔は、よく見えないが少し照れていることはわかる。

「あの・・聰一君は戦争のこと、どう思う?」

「・・くだらないと思う。多分、この戦争を始めた人たちが遊びだと思ってるんだろうね。」

「そうですよね。ルールも、なんかゲームみたい・・」

「そんな、ふざけたゲームだとしても真剣に参加しなくちゃいけない。

地球を守るためだからな。」

自分では、気づいていないが聰一は思わず熱くなっていた。

「聰一君は、すごくいい人ですね・・私なんて・・」

「そんなふうに言つちゃダメだと思つよ。」

「え？」

「氷璃さんにも言われたとおり、もつと自信を持たなくちゃ。

俺は柚月が、魔法使いとしても人としてもいい人と思つてるから。」

「そ・・そんなん・・」

聰一は、やつと自分がとても恥ずかしい台詞を平然と言つていたことに気づく。

顔が焼けるほど恥ずかしい。

「『めん・・俺、なんか変なこと言つちやつたな・・』

「そんなことないですよ。ありがとうございます。」

柚月は、他になにもものない純粹な笑顔を聰一にむける。「よし、じゃあ明日の戦争、がんばろうか。」

「はい。がんばりましょう！」

「もう寝なくちゃな。柚月も部屋に戻つたら？」

「はい。明日、パートナーとして、よろしくお願ひしますー。」

柚月は手を出している。

聰一は、その綺麗な手を握り、握手をする。

三秒くらい、その状態のままだ。

そのあと、柚月は笑顔のまま部屋に戻つていく。

まつたく眠れないまま朝が来る。  
外は、もう明るい。

部屋から出て、リビングに向かう。

「おはよう、聰一君。早いわね。」  
リビングには、もう氷璃がいた。

「おはようございます・・・」

「ちゃんと眠れた?」

「全然、寝れませんでしたよ・・・」

「大丈夫?じゃあ、朝ごはん作るから、ちょっと待ってて。」

「なにか手伝いますか?」

「いいわよ。ゆっくりしてて。」

どうせ手伝ったところでなにもできないのは、わかっている。  
だから、素直に言葉に甘えることにした。

氷璃が朝食を作り終わるのを待つていると柚月が起きてくる。

「おはよう。」

「おはよう。」

「おはよう。」

昨日のおかげで柚月と話しやすくなっている。  
柚月は氷璃のいるキッチンに行く。

何を話しているのかはわからないが楽しそうだ。

会話が終わると柚月がリビングに戻ってきて、聰一の正面に座る。  
そして、すぐに美羽が起きてくる。

「おはようございます。」

「おはようございます。」

「おはよう。二人とも早いわね。」

「お待たせ。」

ちょうど朝食も完成したようだ。

氷璃は、次々と料理を並べる。

「そういえば、和彦がまだおきてないわね。」

「俺、行つてきますか？」

「私が行くわ。」

氷璃は階段を上がつていき和彦が寝ている部屋に行く。

「そうそう、今田の日程だけど九時開戦だから。」

「九時つて・・・」

時計を見ると七時を指している。

「あと一時間しかないですか！」

「大丈夫よ。会場、結構近いから。」

「そうじやなくてですね・・・」

そのとき階段を下りてくる音が聞こえる。

氷璃と和彦が二階から下りてくる。

そして、テーブルの前に置いてある椅子に座る。

「皆そろつたし、食べましょうか。」

「いただきます。」

聰一は少し急ぎながら朝食を食べる。

「そんなに慌てなくても大丈夫よ。ちゃんと間に会つかう。」

「そうですか？」

食べる速度を落とし、ゆっくり料理を口に運ぶ。

氷璃の作る料理は、いつ食べてもおいしい。

「そういえば、敵国の名前ってなんですか？」

「そういえば言つてなかつたわね。」

「アカルよ。アカルの国。」

「アカル・・ですか・・・」

「当然、聞いた事などない。」

「アカル」これがこれから戦争をしなくてはいけない国の名前・・

「皆、食べ終わつたみたいだし、片づけるわよ。」

「「いやそうさあ。」

「「いやそうさまでした。」

手を合わせながら言つ。

時計の針は七時四十五分を指している。

「八時になつたら出発するから準備しておいてね。」

食器を片づけながら氷璃が言う。

「あと十五分しかないですか・・・  
もつと早く行つてくださいよ・・・

「「めん、「こめん。」

聰一は準備を始める。

準備とはいっても、ほとんどすることはなかつた。

結局、五分程度だけ昨日の夜寝た部屋を見るだけだつた。  
まず、こっちの世界に何も持つてきていないのでから準備なんて  
もともと必要なかつた、ということだ。

「準備できた?」「

玄関に美羽と氷璃が立つてゐる。

和彦も玄関に行く。

聰一が部屋から出ると、ちょうど柚月も玄関に向かつところだつた。  
二人は一緒に玄関に向かつ。

「じゃあ、出発するけどいい?」

美羽が確認をして家に鍵をかける。

そして、氷璃が案内する形で五人は戦争が行われる会場に向かつ。

「ここから、戦争の会場に向かうわよ。」

「ここって・・・」

着いた場所は王の住んでいる巨大な塔だ。

戦争に参加することを言つとき、来たことがあつたので覚えている。

そのまま建物の中に入り、王の間へ向かう。

「戦争に参加するために来た。王に会わせてくれないか。」

こういうときに話すのは、やはり美羽だ。

そして、前と同じように、かなり強気な話し方だ。

「おお、来てくれたか。では、案内するぞ。」

王の間には、もうすでに聰一たち以外の戦争に参加すると思われる五人がいた。

「俺たち以外に戦争に参加する五人って、の人たちですか？」

小声で氷璃に聞く。

「多分そうね。」

王が戦争の会場に案内するために歩きだす。

そのあとを聰一たちがついていく。

先にいた五人は聰一たちの後ろを歩いている。

ひとつずつ建物の中だといふのに、ありえないほどの距離を歩かされる。

もう、十分くらいは歩いているだらうか。

「ここから戦場に向かってもらひ。」

大きな扉の前で王が言つ。

その扉を開けると、目の前には森が広がっている。

しかし、聰一の知つてゐる森とは少し違う。

道は石造りになつてゐるし、横には石の柱が等間隔で立つてゐる。

王は道に従つて進み始める。

道は、ずっと一直線に続いている。

五分くらい歩くと、正面に大きなドーム状の建物が見えてくる。

「あの建物が今回の戦場だ。」

王は歩きながら、冷静に言つ。

しかし、その奥には不安があるといつゝことが丸わかりだ。

ドーム状の建物の前につく。

この建物の入り口も、巨大な扉だ。

王が扉を開け中に入ると、目の前に高さ三メートルはあると思われる壁がある。

今度は、その壁にそつて歩き始める。

そうすると、すぐに壁に扉がある。

扉の大きさは普通のものだ。

「」の中で戦争が行われる。

覚悟はいいか？」

王は扉に手をかける。

聰一は口に溜まつた唾液をのみ込む。

王が一気に扉を開けると、中の様子がすぐにわかつた。

どうやら中の作りは、闘技場のようになつてゐる。

障害物や隠れられるような場所は、いつさい無く直接、戦うことになりそうだ。

敵国の魔法使いは、まだ到着していなかつたため、中に人の姿は無かつた。

聰一たちは戦場で敵国の魔法使いの到着を待つ。

しばらく待つていると聰一たちが入つて来た扉の正面にある

同じつくりの扉が開き、人が入ってくる。

敵国の魔法使いらしい。人数も、ちょうど十人だ。

戦場の空気が一気に重くなつたような気がする。

両国の魔法使い、計二十人が戦場の中心に集まる。そして一人の王が戦争の開始を宣言する。

その後、二人の王は戦場から出ていき、

少し高い位置にあるガラス張りになつてある部屋に行く。

その部屋からは戦場全体の様子が、すべてわかる。

そして戦場いっぱいに大きな鐘の音が響く。  
これが開戦の合図のようだ。

戦争について、あまり詳しく知らない

聰一、柚月、美羽、和彦は少し戸惑う。

一度、戦争に参加した経験のある氷璃は落ち着いた表情をしている。相手も様子を窺っているのかなかなか動き出さない。そのまま五分くらいの時間が経ったとき

敵の一人がものすごい速度で柚月に襲いかかった。

「キヤツ！」

柚月が悲鳴をあげるが、ギリギリのところで氷璃が攻撃を止めている。

柚月に襲いかかつた敵は剣を持っている。

前に氷璃が言つていたように魔法使いが剣を使うのは珍しいことだ。柚月に皆が注目している間に敵が散開してしまつた。

「なにしてんのよ！集中して！」

氷璃の一言で皆、まわりを見る。

見事に敵に囲まれている。

囲まれていることに気づいたのはいいのだが  
どのように対応していいのかわからない。  
少しづつ敵が迫つてくる。

ある程度近づいたところで聰一の目の前にいた敵が魔法を使う。

その敵の魔法は炎を発生させるだけの単純な魔法だった。

聰一は、その魔法を全て吸収する。

「な、なんだよ・・・」

敵は驚きを隠せず、少し怯む。

その隙を逃さず、さつきの炎をあらかじめ吸収しておいた柚月の魔法と合成する。

巨大な火の玉が聰一の目の中に発生し、敵に向かつて進んで行く。そのまま敵に当たり、敵の体は炎に包まれる。

「あ・・熱い・・助けてくれ・・」

その敵は近くにいた、もう一人の敵に近づく。

近づかれた敵は無言のまま水の魔法を使い火を消す。

「くそ・・あいつの魔法は、なんなんだよ・・」

どうやら火傷は、そこまで重度のものではないようだ。

ドゴンツー！！

聰一は背後から聞こえた、ものすごい音に驚き振り向く。

そこには、敵の一人が倒れており、その横で和彦と別の敵が殴り合っている。

美羽は柚月の援護を受けながら、攻撃を繰り返している。

氷璃は、もうすでに一人の敵を氷づけにして戦闘不能にしている。

皆の強さに驚く。

柚月も戦っているのだからやるしかない。

もう一度、前をむくと五人の敵が聰一の前に来ている。

五人は同時に魔法を発動させる。

五つの魔法が混ざり、どんな種類の魔法なのかすらわからない。

しかし、その魔法は聰一の合成魔法とは違い一つの魔法になつているわけではなかった。

その魔法が聰一に当たりそうになるが、聰一は全て吸収する。

こんなに、たくさんの魔法を一度に吸収したのは初めてだ。  
そのせいか、無意識のうちに合戦が始まってしまう。

聰一の前に巨大な白い光の玉ができる。

その白い光の玉は前にいる五人の敵に向かって飛んでいく。  
敵に当たった瞬間、光の玉は爆発するかのように、さらに強力な光  
を放ち消えてしまう。

聰一が目を開けると五人の敵が倒れている。

「すごいじゃない。」

後ろから氷璃の声が聞こえてくる。

自分でやつたにも関わらず驚きのあまり言葉が出ない。

「俺と美羽が一人、氷璃が一人、聰一が五人か。

残る敵は一人だけだな。」

和彦が言う。

そして、全員で最後の一人を探すが見つからない。

障害物や隠れる場所など一切ない。

この戦場で見つからないなんてことは、ありえないはずだ。

「くそ・・・どこにいるんだよ！」

和彦が大声を出した瞬間、和彦の左肩から血が噴き出す。

「ここだよ」

低く暗い声の刀を持つた男が和彦の横に立っている。

「なん・・・でだ・・・全然、見えなかつたぞ・・・」

和彦が左肩をおさえながら言う。

「どうやら、一番やつかいな敵みたいね。

皆、油断するんじゃないわよ。」

氷璃の一言で皆、一人の敵に集中する。  
しかし、また敵の姿は無かつた。

## act 18 終戦

見えない敵と戦う、これは聰一たちの全員が初めてだ。そんななか、美羽だけが冷静に考え、まわりの空気の流れを変えている。

「なに、やつてるんですか？」

「静かに！集中させて。」

美羽は目を閉じ、なにかに集中しているようだ。

そして、少し時間が経ったとき目を開け、魔法を発動させる。鋭いかまいたちのような風を正面に放つ。

カンッ！

金属と金属がぶつかり合つのような音がする。

「へー、風の動きの音で見えない俺の場所を把握したってわけね。敵がもう一度、姿をあらわす。

刀で美羽のかまいたちを弾き返したようだ。

「どうやら、あいつの魔法は透明になる魔法らしいわね。」

氷璃が言うが聰一は、それがわかつた時点で対処法がないので意味がないと思った。

「こいつの相手は私がするわ。」

美羽の表情は、とても怖い。

さつき、空気の動きで相手の位置がわかつた。だから美羽がこの敵の相手に最も適している。

美羽が一步前に出る。

「美羽！無理すんじゃないわよー。」

氷璃が声を大きくして言つ。

美羽は、それに対しても大きく頷く。

目を閉じ、もう一度集中する。  
敵の動く向き、攻撃をしてくる位置、すべてを空気の動き方から感じじる。

右から左方向に向かつての刀の動き・・

その動きに合わせて風の壁を作る。

キイイイイイ・・と金属同士が擦れるような音がある。

腰の刀をもう一本抜く・・

さらば一本の刀を持ち近づいてくる・・

早さは・・並み程度・・

攻撃に備え一応、風の壁を作る。

カンツ！カンツ！カンツ！

何度も斬りつけてくるが全て風の動きを変え、弾き返す。

何発か弾き返した後、美羽は右手を横に振る。

その瞬間、刀が回転しながら飛んで行くのが見える。

「残り一本ね。」

敵が後ろに下がった・・

今度は何を狙っているんだ・・

なんで・・動きが無い・・

「美羽、目を開けて。」

敵は、また姿を現している。

美羽も集中をやめ、風の動きも元に戻る。

「ハア、ハア・・・」

美羽の呼吸から相当、疲れているといふことがわかる。

「柚月ちゃん、魔法！」

「え？」

「あいつにかかる重力を大きくするのよ！』

「はい！」

氷璃の指示どおり柚月が重力を大きくする。

「これで、動きが遅くなつたわ。透明になつても無駄よ。』

「くそ・・・」

それでも敵は透明になる。

「無駄って言つてるでしょ！」

氷璃は氷の粒を敵のいた場所に放つ。

しかし、氷の軌道は変わらず、まつすぐに飛び続ける。

「当たつてない！？』

驚くことに敵は柚月の重力から抜け出したらしい。

「君が一番、やつかりらしいね。』

柚月の背後から声が聞こえる。

皆、柚月のほうを向くと刀を振り下ろそうとする敵の姿。

その瞬間、敵と柚月の間に茶色い壁ができる。

敵が刀を振り下ろすと、すぐに真つ二つに切れてしまつたが柚月を守つた。

「こんなふうに魔法、使つたの初めてだな。』

和彦が言つ。

そして、和彦は敵の懷に潜り込み強烈な打撃を一発。

「ゴホ、ゴホ・・・」

敵は咳をしながら、その場に膝を地面につけるような体勢になつている。

聰一は、その隙を逃さず、あらかじめ吸収していた

氷璃の魔法と柚月の魔法を合成し、氷の粒を放つ。

敵は氷の粒を刀で弾こうとするが全て弾くことはできなかつた。

氷の粒は左肩にあたり、その部分が凍りつく。

「聰一君、いい判断だね。」

氷璃が笑顔で言う。

「さあ、もう終わりにしましょーか。」

氷璃が魔法を発動させる。

敵の体は、ゆっくりと凍りついていき全身が氷に包まれる。

「終わった・・んですね」

柚月が悲しそうな表情をしながら言う。

「そうよ。終わったの。私たちの勝ちよ。」

一人の王が戦場の中に入つてくる。

「これで終戦だ。国に戻るぞ。」

ラグの国の王が言い、聰一たちを国につれて帰ろうとする。

「待つてください。」

氷璃は氷づけにした三人のところむかい、氷を溶かす。

しかし、中にいた敵は気絶したままだ。

「いいわ。行きましょう。」

ラグの国のメンバーは国に戻る。

アカルの国の王は戦闘不能になつた十人の魔法使いを一か所に集め、治療魔法を使える魔法使いをつれきて、治療を始める。

戦争は、とても少ない時間で終戦を迎えた・・

act18 終戦（後書き）

アカルの国のやつら弱くしそぎましたね（笑）  
出てくる敵が最初から強いというのがあまり好きではないので  
こういう結果になってしまいました。

次回もよろしくお願ひします。

## act19 祝祭り

「アグの国につくと、すぐに王の間へつれていかれる。

「みなさん、本当にありがとうございます。」

「これで、我が国は救われた。今夜は祭りがおこなわれる。勝利を国民全員で祝おうじゃないか。」

王の言葉を貰い、聰一たちは王の住む塔から出る。

國の中の様子は、とても賑やかだ。

戦争前は少し暗い雰囲気だったのに、皆、明るい表情をしてくる。

「皆さん、本当にありがとうございました！」

「英雄の帰還だ！」

など國の人々は聰一たちを褒めたたえている。

そんな中を歩きながら、五人は美羽の家へと向かう。

「皆、お疲れ様。」

氷璃が笑顔で言つ。

「あのー、意外と楽々勝てたような気がするんですけど···」

「そりやあね。アカルの国なんかに負けるようだつたら話しこにならないわ。」

「え···もしかして···」

「そうよ。一週間後に、また戦争があるわ。」

「···どうことですか？」

「まあ、この星にある國のほとんどが戦争に参加してゐるから仕方がないことよ。」

負けたら、もう戦争に参加しなくていいんだけどね。

次は、もっと強い國と戦争することになると思つから。」

「またですか···」

「うん。戦いの形式は変わるけどね。」

「もう、戦争の話はやめて、お祭りに行きましょう。」

美羽が提案し、皆でお祭りに行くこととする。

家から一歩出ただけで、とても賑やかだ。

王の住んでいる塔の前にある広場には、なにやら不思議な石碑が置かれている。

「あれ、前からありましたか？」

「うん？ああ、あれは今回の戦争の詳細が書かれている石碑よ。」「へえー、す」「ですね。」

「そうね。そういうえば聰一君と柚月ちゃんはいつも？」

「どうするつて、なにをですか？」

「戦争も終わつたし地球に帰るんでしょう？」

「俺は、そうするつもりです。」

「柚月ちゃんは？」

「私も、帰りたいんですけど···」

地球で私は死んだつていうことになつてゐる···」

「聰一君の家にかくまつてもらつたら？」

「な、なんでもうちなんですか！」

「パートナーだからいいんじゃない？」

「よくないですよ！」

「聰一君は嫌なの？」

柚月が顔を真っ赤にしながら聞いてくる。

「い、いやでは···ないけど···」

「じゃ、じゃあ···」

「わ、わかつたよ···」

「はい、決定。」

柚月ちゃんは地球にいるとき聰一君の家に住むつてこいつだ。

「···」  
「···」  
「···」

聰一と柚月は顔を赤くしたまま黙つている。

「さあ、お祭りを楽しみましょう。」

気がついたら美羽と和彦がいなかつた。

よく見ると少し離れたところで、

なにやら飲み物を飲みながら國の人たちと楽しそうに話している。

「ほら、聰一君も柚月ちゃんも戦争で活躍したんだから。」

氷璃に背中を押され、美羽と和彦のいふところにつれていかれる。

たくさんの人、たくさんの食べ物や飲み物を飲み食いし、お祭りを楽しむ。

これほど大きなお祭りをするといふことは、戦争に勝つたということが相当、重要なことだつたのだろう。

聰一たちは、日が暮れるまでお祭りを楽しむ。そして、お祭りが終わつた後は、もう一度、美羽の家に集まる。

「あー、疲れたー」

「本当にお疲れ様。ありがとうございます・」

「いえいえ、俺はなにもしてませんよ。

活躍してくれたのは柚月です。」

「そうね。柚月ちゃん、あなたに魔法、もっと強くなるわよ。」

「そうですか?」

「うん。今度、じつに来た時にもっと特訓してあげるね。」

「ありがとうござります!」

「そういえば、次の戦争どうするんですか?」

「多分、大丈夫よ。」

今回みたいな大人数の団体戦になるのは珍しいことだし。」

「そうなんですか?」

「やうよ。少ない時は一対一っていうときもあるし。  
もし、また困ったことがあつたら協力してくれる?」

「はー。喜んで!」

「いつ地球に帰るの?」

「明日・・でいいですか?」

「いいわよ。もう一回、美羽の魔法で地球に戻る事になるわね。」

「はー。」

そういうえば、和彦さんも地球の人なんですね?」

「そうよ。和彦も私たちと一緒に地球に帰ると想つわ。」

「わかりました。」

「そうだ、柚月ちゃんと一緒に暮らすことになつたけど、覚悟はで

きてるわよね?」

「わかつてますよ・・」

聰一の家には親がないため、柚月を家に住ませると血体は問題  
がなかつた。

「柚月ちゃんもいい?」

「・・はー」

「もう今日は疲れたでしょ? そろそろ寝たら?」

「・・まだ大丈夫です。」

「やう?」

それからは、魔法の話し、戦争についての話して、これからのことについてなど色々な話をした。

そして、気がついたころには既、寝てしまっていた。

## act20 「魔法」の「力」

「皆、起きて。」「

氷璃の声で目を覚ます。

どうやら全員、話をしているうちに眠ってしまったようだ。

「うう・・

少し頭が痛いような気がする。

それでも無理矢理、体を起こしあげる。

「さ、もう地球に帰る準備をしないと。」

美羽の地球に行くための魔法は使える時間が決まってるのよー。」

氷璃は慌てて皆を叩き起こす。

全員、まだ寝むそうな顔をしているが、氷璃が無理矢理、四人をつれて森の中へと向かう。

この世界に来て初めて泊った小屋に来る。  
さらに森の奥に進んで行くと、

石の地面にある丸い形の中に複雑な模様が書かれた場所に来る。「ここが地球とこっちの世界を行ったり来たりする場所よ。」「五人とも、この模様の中に入る。

「美羽、あとは頼んだよ。」

氷璃が模様の中から出ると、美羽が魔法を発動させようとすると、「じゃあね、聰一君、柚月ちゃん、和彦。

また会いましょう。」

「はい！また会いましょう。」

「氷璃さん、さよなら」

「またな。」

こっちの世界に来た時と同じようにブラックホールのようなものが発生する。

その中に吸い込まれると、すぐに気を失ってしまった。

「うう・・・

聰一が田を覚ますと、自分の家のリビングにいた。

「あの魔法つて好きな場所に出られるのかな？」

そのとき、なにか左手に柔らかいものがあたつてゐるのを感じる。そつと見てみると、そこには柚円が寝ている。

「うう・・・

思わず驚いてしまう。

「そうだった・・・今日から柚円と一緒に暮らすんだった・・・

柚円、起きろよ。」

背中に手をあて、軽く揺する。

「ううん・・・

ひ・う・・なんだ聰一君か・・・

「なんだって・・・

「そつか、私たち地球に戻つて来たのかー  
ここが聰一君の家?」

「そうだよ。」

「結構、広いんだね。

今日から、よろしく。」

「う、うん・・・

「あ、聰一君、学校行かなくていいの?」

「ああ、もう行かないよ。」

「え?」

「地球より、あっちの世界のまつが住み心地よさうだからや。将来は、あっちの世界に住もうと思つ。」

「だからって学校、行かないのは・・・

「いいんだよ。」

そうしどけば、こいつ呼ばても、むこうの世界にいけるからな。」

「

「そう・・ずっと一緒にだからといって、私に変なことしたら許さないからね。」

「しねーよ、バカ」

「それ、私じゃ嫌だつてこと?」

「いや、そうじゃなくて・・」

「えへへ、やつぱり聰一君はおもしろい人だったね。」

柚月は満面の笑みを浮かべる。

それを見ていると聰一も自然と笑顔になつていく。

初めて会ったころの柚月は笑顔を見せることもなくただの暗くて無口で地味な女の子だつたはずだ。でも、今は違う。

雰囲気も明るくなつて、たくさん喋るよつになつた。笑顔になる回数も増えていた。

なんのおかげで、そうなつたのかはわからないが確実に魔法の世界に行つたことが関係しているだろう。聰一は「魔法」には、すばらしい「力」があるということを確信した。

## act20 「魔法」の「力」（後書き）

これで第一章は終わりです。

まだ続きますので、これからもよろしくお願いします。

次は登場人物紹介を書きたいと思います。

## 登場人物紹介・魔法説明（前書き）

第一章、終了時点での登場人物について書きたいと思います。  
読んでいただければ本編がよりわかりやすくなると思います。  
本編に直接、関係しないので飛ばしても大丈夫です。

## 登場人物紹介・魔法説明

### 登場人物紹介

森嶋聰一  
もりしま そういち

この作品の主人公です。

魔法の世界につれて行かれ、「合成魔法」を習得し、さらに柚月と氷璃とともに特訓をしたおかげで「魔法を吸収」することもできるようになる。

年齢は十五歳で普通の中学生三年生。

誰からも好かれる性格をしている。

高梨柚月  
たかなし ゆうき

重力を操る魔法を使う中学三年生の女の子。

暗い性格をしていたが氷璃や魔法に出会ったおかげで、明るい性格に変わっていく。

頭が柔らかく、魔法の応用能力がとても高い。

聰一にだけ時折、女の子らしい一面を見せることがある。料理が結構、得意だつたりする。

幽崎美羽  
ゆうざき みはね

風を操る魔法を使う。

聰一と柚月を魔法の世界につれてきた張本人でもあり、聰一と柚月がどんな魔法を使えるのかも教えている。

とても明るく、思ったことは、はつきり言う。

とても器用で空気の動きから相手の動きを読み取るなどといつもする。

氷璃  
ひょうり

氷を操る魔法を使う。

美羽の姉で聰一と柚月に魔法の使い方を教えた。とても、すごい魔法使いで、ほとんど敵無しの強さを持つているらしい。

普段は優しいお姉さんの存在だが起こると、とても怖い。

仙台和彦

せんたい かずひこ

聰一や柚月と同じように地球から来た魔法使い。植物を操る魔法を使うのだが、派手な使い方をしないため本当に魔法を使つたかどうかの確認ができない。喧嘩がとても強いらしく、主な攻撃方法は殴るなどといったものだ。

単語について

ここから、この作品でよく出てくる単語について説明を書いていきます。

合成魔法

ごうせいまほう

一つの魔法を会わせて新しいひとつの中を作りだす魔法。

聰一は、もうすでに五つの魔法を合成することに成功している。

吸収

きゅうしゅう

相手の魔法を体内に取り込み、消し去ること。

大抵の魔法は一瞬で吸収できるが例外もある。

魔力

まりょく

魔法を使うためのエネルギーのこと。

一人の人が持っている魔力は無限だが、一度にたくさんの魔力を使ふほど

魔法のコントロールが難しくなる。

## 登場人物紹介・魔法説明（後書き）

これを書いてて気づいたのですが  
登場人物、五人しかいないんですね（笑）  
では、第二章もよろしくお願いします。

「もしもし、氷璃さん？」

そつちの世界の生活もいいですが、地球のまつがなんか安心するつていうか・・

「やつぱり、慣れてるからでしょつかね？」

「私も地球に住んでみたいわね。」

「柚月・・朝から誰と話してるんだよ・・」

魔法の世界から地球に戻つて来た口の翼口、まだ朝早いのに柚月の声で起きてしまつた。

「あ、聰一君も起きてきたみたい。」

「出しますか？」

「お願ひ。」

柚月の手には透明で細長い水晶が握られている。

「なんだよ、それ。」

「電話だよ。相手は氷璃さん。」

「ほら、出で。」

柚月から、その水晶がわたされる。

耳に当てるみると本当に電話みたいだ。

「もしもし、聰一君？・

柚月ちゃんととの共同生活は楽しい？・

「なに言つてるんですか！・

そういう言つ方に方はやめてください！・

「それで、どうなの？・

柚月ちゃんみたいな、かわいい子と一緒に屋根の下にいる気分は。」

「それは・・嬉しいですけど・・」

「やつぱり、そうよねーそのまま結婚しちゃえば？・

「・・切れますよ。」

「あー『めん、』『めん 真面目な話しあるんだって！』

「なんですか？」

「それがね、地球にも結構、魔法使いがいるのよ」

「それが、どうかしたんですか？」

「・・危険な人もいるみたいだから『氣』をつけてね。

魔法使いだっていうことは、なるべく隠してね。」

「わかつてますよ。」

「じゃあ、それだけだから。

じゃあね。」

電話が切れる。

電話の切れ方まで地球の電話にそつくりで少し驚いた。

「氷璃さん、なんて？」

「地球にも魔法使いがいるって。

その中には危険な人もいるみたいだから『氣』をつけてって。」

「へー、どんな人がいるのかな？」

「さあ、あと魔法使いだっていうこと、なるべく隠すようだって。

「わかつてるよー」

「そういえば、この電話、いつ貰ったの？」

「美羽さんの家から出るときだよ。

聰一君は、ちょうどトイレに行つてたかな。」

「ああ、あのときか。」

「うん。今日は、なにか予定あるの？」

「うーん・・特にないな・・」

「じゃあ、家でゆっくりしてよつか。」

「そうだな」

聰一と柚月は、なにかするわけでもなく  
適当にテレビでも見ながら時間をつぶす。

「学校ないと暇だねー」

「そうだな、こんなに暇になるとはなー  
またボーッとしている。」

テレビではニュース番組をやっている。

コンビニで強盗があつた、殺人が起きたなど、いつもとなんら変わらないニュースをやっている。

「次のニュースです。

また新たな被害者が出ました。」

なにやら深刻な事件のようだ。

その事件の内容は連続殺傷事件だ。

被害者の人数はすでに九人にものぼっているという。

犯行の方法は人気の無い道を歩いていた被害者が刃物で切りつけられるという感じだ。

凶器は見つかっておらず、被害者は全員、刺された時の記憶がないという。

「なんか、変な事件だな。

結構、近いところで起きてるみたいだし。」

「ええ！ 聰一君、この事件のこと知らなかつたの？」

学校でも注意するようになって言つてたじやん。」

「そうだっけ？」

どうやら、むこうの世界と地球の時間経過は同じらし  
むむこうの世界にいた日付のぶんだけ時間が経つて  
いる。つまり、この事件は一週間以上前から起きていたとい  
うわけだ。

第一章、始まりました。  
タイトルが仮のものため  
変わるかもしれません

## act 2 黒い球体の魔法

「ねえ、なんかしようよー  
すごい暇なんだけどー」

「そう言つても、なにもすることないじゃん。」

「確かにそりだけどーー」

「・・・」

「そりだー！魔法の特訓しない？」

氷璃さんがまだ戦争あるって言つてたし、

それまでに新しい魔法の使い方、見つけたいの。」

「別にいいけど・・ずいぶん熱心だな。」

「だつて、私がこんなに人と・・

それも男の人と話せるほど自身がついたの、氷璃さんのおかげなん  
だもん。

だから、今度は私が氷璃さんの力になれないかなーって。」

これが柚月の本心。

今までの暗い自分が本当に嫌だったんだ・・

だから、魔法に関しては真剣に考え、新しいものを見つけようとしているんだ・・

「聰一君、どうしたの？」

「え？ ちよつとね・・」

「じゃあ、特訓始めよう。」

「ちよつと待つて、その前に魔法を吸収しないと・・

「そりだつたね。準備、いい？」

「うん」

柚月が魔法を発動させ、聰一にかかる重力が大きくなる。  
その魔力を全て吸収しつづくす。

「もういい？」

「うん。ありがとう。」

「じゃあ、私の考えた新しい形やつてみてもいい?」「いいけど・・家を壊さないよう」に加減してよ。」

「わかつてるよー」

柚月の目つきが変わる。

完全に集中している証拠だ。

そして、空中に黒い小さな球体が出来始める。その球体はグオオオンと不気味な音を出しながら、中心に向かつて回りの黒いものが吸い込まれていくような感じだ。球体は大きさを変えずに、ずっと回転しながら、空中の一点で止まつたままだ。

「聰一君・・それ・・吸収して・・」

柚月は、つらそうな声で言つ。

「え? わ・・わかつたよ。」

あまり、意味がわからないまま黒い球体を吸収するために手を伸ばす。

ズズズズズズ・

黒い球体に触れた瞬間、体中に激痛が走る。

「うつ・・な、なんだよ・・」

まったく吸収することができない。

だが、少しずつだけど黒い球体が小さくなつていつてゐるような気がする。

「くそ・・」

聰一は激痛に耐えながら黒い球体の吸収を試みる。

一体、どれだけの時間、激痛に耐え続けたのだらう。

この黒い球体を作り出した柚月は、気絶してしまつていてる。

前に氷璃から聞いた話によると魔法を発動させた

魔法使いが気絶・死亡した場合は魔法が消えるはずだ。

それなのに、この黒い球体は、まだ存在しつづけている。黒い球体の大きさは最初の半分くらいになつた。

「もうひと踏ん張りだ！」

右手に全神経を集中させ、一気に黒い球体を吸收しようとする。黒い球体と右手の間から激しい光が発生し、目を閉じてしまう。もう一度、目を開けると黒い球体は無くなり、体中の激痛も、もうない。

「や、やつたのか・・・」

どうやら、黒い球体の吸収に成功したらしい。

「ハ、ハハハ・・やつと・・終わった・・」

一体、なぜこの球体は柚月が気絶したのに消えなかつたのだらう。

「そうだ！ 柚月！」

床に倒れている柚月に近づく。

「大丈夫か、柚月」

右肩を軽く叩きながら声を大きめにして話しかける。

「ううう・・・」

どうやら死んではないらしい。

「よかつた・・・」

聰一は柚月を抱きかかえ、柚月がいつも寝ている部屋に行き、柚月を布団に寝かせる。

一人でリビングに戻り、もう一度黒い球体のことについて考えてみる。

- ・柚月が発動させた魔法
- ・発動させた柚月が気絶しても黒い球体は消えなかつた
- ・吸収するのに、かなり時間がかかつた

「わかっているのは、このくらいか・・・  
やつぱり、柚月に聞ないとダメかな・・・」

時計に目を向けると、午後三時・・・

黒い球体の吸収を始めてから一時間ほど経過している。

「はー、一人で、なにしてればいいんだよ・・・」

柚月が起きてくるまで、どれだけかかるかわからない。

さらに、なにもやりたいことがない・・・

つまり、柚月が起きてくるまで暇な時間を過ごさなくてはいけない  
ということだ。

そうだ、寝よう

自分でも、驚くほどいい考えだ。

むこうの世界ではお祭りがあつたから全然、眠れなかつた。

よく考えてみれば寝不足だ。

さつき、黒い球体を吸収したせいで、さらに疲れた。

聰一は自分の部屋に向かい、ベッドに潜り込む。

ベッドに入つて三秒・・いや一秒で眠りについただろう。  
こんなにも心地のよい睡眠は初めてだった。

## act3 黒い球体の正体（前書き）

この話から少し書き方が変わります。  
内容は、そのままなので続けて読んでも大丈夫です。

### act3 黒い球体の正体

聰一が目を覚ましたのは午後七時だ。  
つまり四時間、寝ていたことになる。

体が恐ろしいほど軽く、頭もスッキリしている。

「そうだ柚月……」

四時間も経っているのだから柚月も起きているはずだ。  
そう思いリビングに向かう。

リビングには誰もいない。

テーブルの上には小さな紙が一枚、置いてある。  
柚月の起き手紙のようだ。

「買い物に行つてきます」

とだけ書いてある。

「また待たなきゃいけないのか……」

溜め息をつこうとしたとき、玄関のドアが開く音がする。  
玄関に行ってみると、ちょうど柚月が帰つて来たところだった。

「おかえり」

「ただいまー

今から夜ごはん作るから待つてね。」

柚月の両手には大きな買い物袋が持たれている。

白い袋だつたため中の様子はよくわからない。

柚月はすぐにキッチンへ行き、夕食を作り始める。

「さつき使つた魔法、どういうのなの?」「

野菜を切つてある柚月に後ろから話しかける。

「一點にかかる重力を少し変えてみたの」

「……そういうえば、なんで急に「吸収して」なんて言ったの?」

「あれは……私の力じゃ、あの黒い球体を制御しきれないって思つたから……」

「じゃあ柚月が制御できなくなつて、黒い球体自体が自分の意思で動いていたから

「柚月が気絶したのに消えなかつたつてこと?」

「わかんない……だから後で氷璃さんに電話してみよつと思つんだけど……」

「その方法があつたか……全然思いつかなかつたよ。

魔法といえば氷璃さんだもんな。」

「うん!」

柚月は笑顔になり料理を続けている。

「それで黒い球体ができたときは、どんなふうに重力をかけたの?」「球体の中心に対しても、全部の方向から重力がかかるようにしえみたの。

だから中心にはものすごい量の重力がかかつて、あんなふうになつちやつたの。」

「じゃあ、あの黒い球体は重力の塊つてことー?」「多分そう。

でも、制御できなくなるなんて思わなかつたの……

小さじうちは制御できてたんだけど……」

「そう……じゃあ、次は制御できるように特訓しなくちゃね」

「うん!聰一君も手伝ってくれる?」

「当然だろ」

「ありがとう。もつすぐ完成するから、ちょっと待つてね。」

柚月は鍋で、さつきまで切つていた野菜を煮込んでいる。

「はい。」

柚月がテーブルに並べた料理は、むこうの世界で食べた植物が色々入つてゐるスープによく似ている。そして、その横にはパン。

むじの世界とほとんど変わらない食事だ。

「ねえ、早く食べてみてよー。」

「うん。 いただきます。」

スープを一口、飲んでみる。

普通に美味しかった。

そして、久しぶりの地球の食べ物の味に少し感動する。

「どう?」

「おいしいよ」

本当においしい。

甘くて、ショッパーような……

なにか不思議な感じだ。

「これ、氷璃さんに教えてもらったのを野菜に変えて作ってみたんだー」

「へー、すまじいじゃん。本当においしいよ」

「ありがと!」

柚月はまた笑顔になる。

この笑顔にはすこく癒される。

もしかしたら柚月に不思議な感情を抱いているからなのかもしれない。

い。

夕食を食べ終え、柚月の持っている水晶で氷璃に電話をする。

「もしもし、氷璃さん?」

「ああ、柚月ちゃんね。」

「ちょっと魔法のことで聞きたいことがあるんですけど……」

「いいわよ。なんでも聞いてちょうどいい。」

「今日、私が発動させた魔法が私が気絶しても消えなかつたんですね……」

「へー、珍しいじゃない」

「え? ありえないことじゃないんですか?」

「まあ、ほとんどありえないけど、なるとわかはなるわよ。」

「どういうときに、なるんですか？」

「魔法が暴走したときかな。

そうなつたら魔法 자체を消し去らないといけないから大変なんだけどそつちには聰一君もいるから、大丈夫でしょう？」

「なんでわかるんですか……」

「だって魔法が暴走したら、ただじゃ済まないもの。

今、電話できてるってことはそれを消し去つたとしか考えられないから

聰一君が吸收したのかなーって。」

「本当に氷璃さんは、すごいですね！」

私も氷璃さんくらい、すごい魔法使いになりたいです！」「

「柚月ちゃんなら、なれるわ。

すごい魔法使いつて皆、一度は魔法を暴走させるから。」「

「じゃあ……氷璃さんも……」

「うん。一度、暴走させたわ。

でも、何回もその魔法を使い続けて

今は、その魔法も制御できるようになつたけどね。

柚月ちゃんも、制御できるようにがんばつてみたら？」「そのつもりです。

聰一君もいるから安全ですしね。」

柚月と氷璃の笑い声は聰一にも聞こえるほどだ。

「ありがとうございました。

「じゃあ、りますね。」

「うん。じゃあね。」

柚月は電話を切り、水晶をポケットの中に入れる。

「氷璃さん、なんて言つてた？」

「制御できるように、がんばつてみたら、だつて。

そういうわけで明日から協力よろしくー！」「

「おー！」

正直、もう一度あの球体を吸收できるか心配だった。

しかし柚円は、『なんにがんばりつとしてるんだ……

そのためなら少しきらい危険でも協力しようと思つ。

「ねえ、お風呂入りたいんだけど……」

「え?」

『のー言は聴ーを深く悩ませる』ことになる。

act 4 お風呂

むいづの世界から直接、ここに来たのだから柚月の着替えがない。

さうに女子が同じ家の中でお風呂に……  
なるべく考えないようにしてよ。

「ダメ？」

「いや……いいんだけど……

着替えが……」

「聰一君の貸してよ。

それで明日、買いに行こうよ。」

待て待て待て、今回ばかりはその笑顔に惑わされるわけにいかない。  
このままでは本当にヤバい。

漫画やアニメの世界なら、ありえても……  
女子に服を貸す？ それも、こんなかわいい子に？  
絶対に無理な話だ。

いや……貸すのはいいんだけど、そのあとが……

「ねー、なに顔赤くしてんのー

そんなに私に服を貸すのが嫌なのー」

柚月が少しずつ近づいてくる。

それがあわせて聰一は後退していく。

「逃げてもダメだよー

汗かいたまま、寝るのなんて嫌だからねー」「  
ガタン……

聰一は柚月から離れるのに後ろへ下がっていくと  
父と母の服が入っているタンスに背中をぶつけた。

聰一の父と母は、すでに死んでおり、もうこの世にいない。  
そのとき、ふと思いつく。

「母さんの服でもいい？」

「母さんの服でもいい！

これなら柚月も俺の服を着なくて済むし、  
なにより、俺が普通の状態を保てる。

「え？ いいの？」

「そういえば……お父さんとお母さんは？」

「死んだよ……」

「ゴメン……でも、いいの？」

「うん。 柚月も俺の着るよりはマシだろ？」

「うん……」

「じゃあ、適当に取つてって。

サイズは……会わないと思つけど

聰一がタンスを開け、柚月に服を見せる。

柚月は適当に服を取ると広げて体に会わせる。

「やっぱり大きいよな……

母さん、身長高くてやー

聰一の母の身長は百七十センチほどだった。

それに対して柚月は百五十センチほど。かなり大きい。

「なんか、じめん……

このサイズしかないんだよ……」

「ううん、ありがと。じゃあ、入つてくるから。

……のぞかないでね」

のぞかないでねつて……

そんなつもりは無い。

でも……

深く考へないことにしてよ。

このままでは本当に大変なことになつてしまいそうだ。

「俺は、そんなことしねーよ」

そう言つて誤魔化すものの……

説得力が全然無い。

この言葉を聞いた柚月は笑顔のまま風呂場へ向かう。

サアアアアア

……一人しかいないため、柚月が風呂に入っている音が丸聞こえだ。自分でも顔が赤くなっていることがわかる。  
こんなことが毎日続くのかと思うと嬉しいようなつらいような……  
なんだか、よくわからないが、とにかくのぞく」とは絶対にしない。  
神に誓う。

そんなことをして柚月に嫌われでもしたら……「冗談じゃない！  
そんなことは絶対に嫌だ。

そして一緒に暮らすのが気まずくなってしまひへ。

聰一の頭の中を色々なことがグルグル回る。

ガチャ……

風呂場のドアが開く音がする。

思つたより入浴時間が短かったので時計を見てみる。  
柚月が風呂に入つてから四十五分が経つていて。  
どうやら色々、考えているうちに時間が過ぎていたようだ。

「あー、気持ちよかつたー

聰一君も入らないの？」

顔をほんのり赤くさせ、バスタオルで髪の毛を拭きながら、柚月がリビングに来る。

顔を直接見ることができない。

なぜか鼓動がありえないほど早くなっている。

「聰一君？どうしたの？」

「な、なんでもないよ

じゃあ、俺も入つてこよつけかな……」

声が少し震えている。

さらに立ち上がり歩き始めるが動きが少し変だ。  
自分でも、わかるほどに。

「本当に大丈夫？」

顔、真っ赤だし……」

お前のせいだよ！

大声で叫べたら、どんなにスッキリするだろ？  
でも、そんなことする勇気などないに決まっている。  
無言のまま風呂場に向かい服を脱ぐ。

「ああ、本当にヤバかつた……」

浴槽につかりながら一安心。

「聰一君ー、背中流そうかー」

ドアの外には人影が……

この声は間違いない柚月の声だ。

「な、なに、言つてんだよ……」

思わず立ち上がりてしまい、お湯が流れる音が聞こえる。

本当は、ぜひともお願いしたかった。

でも……な。

わかってくれる人はいるのだろうか……

今まで、こういう状況になることをどれほど願つたか……

「えへへ、『冗談だよー』

そうだよな。そうじゃないとおかしいもんな。

このあとは何もなく、いつもどおり入浴を済ませる。

act5 和彦の訪問

「やつと来ましたかー

一人で暇だつたんだよねー」

「どうせ二人になつても、することがないじゃん」

「それが、あるんですよー」

「なにすんの?」

「私の質問に答えてもらいまーす!」

柚月のテンションがいつもより高い気がする。

「別にいいけど……簡単なのでお願いね。」

「わかつてゐよー

じゃあ、一つ目。ズバリ、彼女は?」

なんだよ、その質問……

「いなideど……」

「おお!じゃあ、好きな女性のタイプは?」

母親の服を着てる人と恋愛に関する話をするとか……普通ありえるのかな、こんな状況……

「明るくて優しい人。」

「うーん……難しいな……」

「なんのこと?」

「え?こっちの話。」

「他は?」

「もう、ないよー

次は聰一君から質問して。」

「……じゃあ彼氏は?」

「いないよー

「好きな男性のタイプは?」

「優しくて強い人。」

つて私と同じ質問じゃん!」

「別にいいじゃん……」

「……まあ、いいや

もう遅いし、寝ようか。」

「そうだな

「明日、服買いに行くの付き合つてね。」

「うん。」

今、来ている服は半袖のはずなのだが・・せつぱり袖が長い。  
でも、なんかかわいい……

「じゃあ、おやすみー」

大きい服を着たまま柚月は部屋に向かう。

聰一も自分の部屋にむかい、ベッドに寝転がる。

特に疲れているわけではなかつたが、すぐに眠る事ができた。

「聰一君、早く起きてー。」

柚月に起じられ、目を覚ます。

目の前には昨日と同じ服装の柚月が立つていて。

「おはよー！」

「おはよー……」

朝から、なぜこんなに元気なんだらう……

「朝ごはん、できるから食べよ。」

「あ、ありがとう……」

まだ眠い。でも一度寝するわけにもいかないので無理矢理、体を持ち上げる。

リビングのテーブルに置かれたご飯からは湯気がたつている。

「ほら、早く早く

椅子に座る。

「いただきまーす」

「いただきまーす……」

柚月は笑顔のまま、『ご飯を口に運ぶ。

聰一も少しずつ『ご飯を口に運ぶ。

「うわあやつやめ」

「うわあやつやめ」

朝食を食べ終える『ごはん』は聰一も、すっかり目が覚めていた。

柚月は食器を片づけ始める。

「今日、一緒に買い物へんだから準備しておいてね」

「おひ……」

そういえば今日は柚月の服を買いに行くんだった……

びうじよつ、楽しみすぎるぞ……

聰一は自分の部屋に向かい、自分が持てる全てのファッショソセンスを使い、服を選ぶ。

服を選ぶだけで、『こんなにも悩んだのは初めてだ。悩んだ末に選んだ、服に着替えリビングに向かう。

柚月がいない。

部屋のドアが閉まっていたため、柚月も着替えをしてくるのだと思う。

柚月の部屋のドアを開き、昨日と同じ服を着ている。

「あれ？ その服……」

「ああ、昨日の夜、洗濯したんだー

ちゅうど乾いたから、よかつたんだ。」

「じゃあ、もう行こうか？』

「うそ」

ピンポーン

ちゅうど家から出ようとしたりしたところ、家のチャイムが鳴る。  
玄関に行き、誰が来たのかを確認する。  
そこに立っているのは和彦だった。

「俺の家、なんで知つてるんですか？」

「あ？ 美羽から聞いたんだよ」

美羽は聰一と柚月をこの家まで送り届けたのだから家の場所を知つてもおかしくない。

「美羽さんですか？」

もしかして和彦さんも電話を貰つたんですか？」

「ああ、これのことか？」

和彦はポケットから水晶を取り出す。

柚月の持つているものと同じものだ。

「そういえば、和彦さんが来たのって、なにか用があつたからじやないんですか？」

「お？ 柚月……本当に柚月かよ！？」

「そうですよ」

柚月は笑顔で答える。

「へー、お前笑つたすげー、かわいいんだな。

まあ、俺は口リコンじやねーから、関係ないんだけど。

それで、俺がここに来た理由だが……

連續殺傷事件のことは知つてるか？」

「知つてます。」

「あの事件、どうやら魔法使いが狙われてるらしいんだ。」

「え？」

「被害者も自分が魔法使いだって知られたくないから記憶が無いと言つてるそつだ。」

「それ、本当ですか？」

「多分、な。」

だからお前らも気をつけろよ。

俺はもう仕事あるから帰るけどよ、つまべやつていけよ。」

「はい。ありがとうございます。」

和彦は立ち上がり、家から出していく。



## act 6 テート? (出発)

「魔法使いが狙われてるって、どうこうことなんだろう……」「わかんないけど……」

「私たちは狙われる心配ないよね? なにもしてないもん。」「

「そうだよな。じゃあ、行くか。」

玄関に鍵をかけ、柚月の服を買いに行こうとする。

「あ、そうだ!」

「どうした?」「

柚月の声が少し大きかつたため驚く。

「私……死んだことになってるんだ……」

「そういえばそうだ。」

魔法の世界に行くときに行方不明などと騒がれたら面倒なためどうせなら死んだ方がいいということ、「自殺をした」ように見せたんだった……

「そういえば俺のこと全然、騒がれてないな。」「

「確かにね。」

「まあ、いいか。」

その方が楽だしな。それで、どうするの?」「

「何が?」

「柚月は死んだことになってるんだろう?」「

じゃあ、見つかったら……」

「そうだね。」

「……変装するとか?」「

「……本当にそれで大丈夫?」「

「たぶんね。ほら鍵、開けて」

「お、おう!」「

言われたとおり鍵を開け、もう一度家の中に入る。

「なんか使えそうなものない?」「

「うーん……サングラスとか？」

「そういうのでもいいよ。」

母さんと父さんのものが入っているタンスを開け、使えそうなものを探す。

思つたより使えそなものがたくさんある。

サングラスや伊達メガネ、大きめの帽子など色々なものがある。

「これ、かけて」

柚月から伊達メガネをわたされる。

言われたとおり、かけてみる。

柚月は聰一の顔をジッと見つめ、なにかを確認している。

「よし、大丈夫そう。

次は私のを探さなくちゃ……」

少しタンスの中を見た後、サングラスと大きめの丸い帽子を取り出す。

「本当はこういう格好したくないんだけど……」

サングラスをかけ、帽子をかぶる。

「どう?」

「似合つてるよ……」

いつもの柚月とは、なにか違う。

いつもの柚月は「かわいい」感じだ。

しかしサングラスと帽子の装飾があるだけで、かなり大人っぽく見える。

「そうじゃなくて……

私だつてわかる?」

「いや、わからないと思つよ……」

「じゃあ、これでオッケー

今度こそ出発しようつか

「うん」

さつきと同じように玄関の鍵をかけ外に出る。

「思つたより時間かかっちゃつたねー」

「やつだな。和彦さんも来たし変装もしなくちゃいけなくなつたし……」

「だよね」

やつぱり死んだことにしない方がよかつたのかな……」

「……」

なにも言ひことができなかつた。

どんな声をかければいいのか……それさえも。

柚月は悲しそうな表情だ。

サングラス越しに見える目も少し潤んでいるような気がする。

「はー

後悔しても無駄だよね……

あのときはせが、もう死んでもいいと思つてたから簡単に自殺したけど……

やつぱり生きていればいいことがあるんだねー」

初めて会つたころの柚月はそこまで思つていたのか……なんだか辛くなつてくる。

「あ、ごめんね……」

もうこんな話はやめて、もうと明るい話しあつか。

せつかくのデートだもんねー」

「デート……

この言葉は、彼女いない歴イコール年齢の人にとってものす、いき気になる言葉だ。

「デートなどしたことない」だからこそ感動的に聞こえてしまつ。たとえ柚月が冗談で言つてたとしてもかまわない。

少しでも、そう思つてくれているのなら。

「なんか聴一君、元気ないねー」

「え？ そんなことないよ

せつかく柚月とのデートなんだか……」

またやつてしまつた。

本当に言葉は選ぶべきだ。

言つた後に後悔しても遅い。恥ずかしくてたまらなくなる。

「え？ 聰一君もそう思つてくれてるの？」

なんか嬉しいな。」

今の柚月は変装しているため、いつも見た目がまったく違つ。つまり変装していな状態の性格が今の柚月が言つと、なんか不自然だ。

見た目と正確が全然、一致しない。

「なんで聰一君、黙つちゃうの？」

「いや……緊張してるみたいというか……」

「なんで？」

でも、なんか嬉しいな。」

そつ言つと柚月は笑顔になり歩く速さが変わる。

「おこ……ちょっと早いつて……」

「聰一君が遅いんだよー」

そんな調子のまま駅に着く。

ここからは電車に乗つて移動するらしい。

聰一は、まだ行き先を知らない。

柚月が切符を買い、その電車に乘る。

## act7 テート? (柚月のハウシショーン)

「そういえば柚月、金持つてきとんの?」

「あ……そういえば持つてない……」

「わかつた。じゃあ俺の使つていじよ」

「……そんなどきないよ」

「いいじゃん、一緒に住んでるんだから

「……でも」

「いいって。もうここまで来ちゃったんだし」

「……うん

小さくうなずく柚月。

聰一が柚月に服を買つてあげるほどお金があるのこな理由がある。

聰一の母は、ただ聰一の父のことを愛していたから結婚した。

お互に愛していた……理由は、それだけだった。

だから聰一の母は一切、贅沢をしないで聰一の父が働いている時間だけ自分も働いていた。

そして聰一の父が帰つてくるには、飯を準備して待つていて。これがいつもの日常だった。

聰一の両親にとって、この生活はとても幸せなものだつたようだ。聰一の母は働いているのに贅沢をしない……

つまり貯金がいつの間にか、とんでもない金額になつていた。

父と母が死んだ時、息子は聰一のみだつたため全ての遺産を相続した。

電車の中は、あまり混んでいない。

平日の昼間なのだからあたりまえだ。

時間どおりに目的の駅につき、電車から降りて柚月の行きたがつて いる店に向かつ。

「うるさいよ」

柚月が立ち止つたところあつた店は、とても大きい店だ。店の外装から男が入るような店ではないことがよくわかる。

「俺も入らないとダメなんだよな……」

「うん。あたりまえでしょ、『テートなんだし』

「わかつたよ……」

柚月についてこき、店の中に入る。

外装からもわかるように、とても広く綺麗な店だ。

しかし、本当にこんなところに男が足を踏み入れていいのだろうか？ 『アーティスト』とはいえ、本当に付き合つてるわけではないのだから

……

「なにやつてんの？」

早く行こうよ！」

柚月は聰一の手を握り、エレベーターの前まで歩いていく。迷わず歩いているため、初来店といつわけではないようだ。

「何階に行くの？」

「三階だよー まずは服を買わないとねー」

この元気な柚月が一番好きだ。

電車の中で、お金の話をしていたときのような表情はしてほしくない。

三階につき、エレベーターの扉が開く。

エレベーターから降りると、まわりは女の子むけの服でいっぱいだ。

「なに顔赤くしてんの？」

服選ぶの聰一君にも手伝つてもううんだからね？

「え？」

「え？ じゃないよ。

ほら、行こう！」

柚月はまた聰一の手を握り歩き始める。

「ねえ、これどう？」「

柚月は服を体に会わせるような感じで持つている。  
なんというか……すぐ柚月にピッタリ会う服だ。  
サイズもちょうどいい。

「試着してみたら?」

「そうだね」

近くにあつた試着室に入り着替え始める。

「どう?」「う?

やつぱり似合つている。

身長は低いもののスタイルは、とてもよいためどんな服でも似合つ  
気がする。

「似合つてるよ」

「本当に? ジャあ、これ買つてもいい?」

「いいよ」

「ありがと?」

柚月はもう一度試着室のカーテンを閉め、元の服に着替える。

「これだけでいいの?」

「え……まだ買つてもいいの?」

「いいよ」

買い物かごの中には今、試着した服とスカートが一枚入っているだけだった。

「でも……なんかわるこよ……」

「いじつて。柚月は、もつ俺の家にずっとこなきやいけないだろ?」

「そうだけど……」

「ほら、行くぞ」

今度は聰一が柚月の手を握り歩き始める。

「柚月、なんか気にいったの無いか?」

「……本当にいいの?」

「う?」「う?

「じゃあ……あれ……」

「あれって……本当にあれでいいのか?」「.

「うん……」

聰一は驚きを隠せない。

柚月が指差した先にあつた服は、いわゆる「コスロリ」だつたからだ。その服に近づく。

そして、買い物かごに入れる。

「……」

「これ、一回でいいから着たかったんだよねー」

レジで会計を済ませ、次に買いたいものがある階へと向かう。結局、「コスロリ」を着しているのを見るのはできなかつた。

「あとでお楽しみ」だそうだ。

もつ一度、エレベーターに乗り一階に向かう。

## act 8 テート? (次の目的地)

一階は下着売り場。

今度は本気で気まずい。

「この階も一緒に回らないとダメ?」

「当たり前でしょ」

柚月はかわいい……いや恐ろしい笑顔を浮かべ聰一の腕をひっぱり歩きだす。

まわりは女性用の下着で囲まれている。

嬉しいやら恥ずかしいやら……色々な思いが頭の中でもわり続ける。柚月は聰一のことを考えて少し急ぎ田に下着を選ぶ。

しかし、その買ったものの会計をするのは聰一なのであまり意味がない。

横に柚月がいるのが救いだつた。

もし一人だったら……

考えたくもない。

会計を済ませたあと、すぐに店から出る。

「ああ、緊張したー」

「なんで? 私がいるんだから大丈夫でしょ?」

「でも……こんな店に入ったの、初めてだから……」

「なんか、ごめんね……」

「いいよ。腹減ったし、なんか食べるか」

店の入り口にある時計を見ると午後二時となっている。知らない間に、昼を過ぎてしまっていたようだ。

「あそこでいいんじゃない?」

柚月が言つた場所は、すぐ近くにあるファミリーレストランだ。

「そうだな」

二人は、そのファミリーレストランに向かう。

昼を過ぎて店にいるからか、店内には客があまりいなかった。

二人は適当な料理を注文する。

「いのあと、なにする？」

「せっかくのデートなんだから、もう少し楽しみたいよねー」

「柚月はなにかやりたいことがある？」

「うーん……ゲームセンターは？」

「ゲーセンでいいの？」

「うん。私、行つたことないから……」

「うそ？ 友達と行つたりしなかつたの？」

「私は……友達いなかつたし、学校から帰つてきたらずつと部屋にいたから……」

「…………ごめん」

明るい柚月を見ていると昔は暗かつたところを忘れててしまう。

「いいよ。今は聰一君がいるから昔のことなんてどうでもいいの。」

「なんか照れるな……」

「本当にありがとうね、聰一君」

やつぱり笑顔の柚月が一番いい。

何度も同じことを思つたのだろう……

こう思つた回数だけ柚月は笑顔ではなくなつているところだ。これからは一度と思わなくていいようにがんばつてこいつ……

「あ、料理できたみたいだよ」

二人とも同じものを注文していたため、同時にできあがる。

「いただきます」

こんなところでも食事をする前に「いただきます」というほど柚月は礼儀が正しい。

正直、尊敬してしまつ。

「いただきます」

それを見習い聰一も言い、料理を食べ始める。

いつも思うのだがファミリーレストランの料理は、なぜこんなに美

味しいのだわ。

注文してから出でてくるまでの時間も、とても短い。

さらに値段も安めだ。

忙しい時でも気軽に立ち寄れるし、とても便利だと感づ。

料理を食べ終えた二人は会計を済ませ、店から出る。

「そういえばゲーセン行きたいんだっけ？」

「うん！」

コーカサスキャラがやつてみたいんだよねー」

どうやら柚月は本当にゲームセンターに行つたことがないらしい。女子だからかはわからないが、普通一回くらいは行つたことがあるもんだよな……

「それで、このあたりにゲーセンあんの？」

「……わかんない」

「……じゃあ俺の家の近くにあるところでもいいか？」

「うん」

「よし、じゃあ駅まで戻るぞ」

ゲームセンターに行くため駅まで戻りもう一度、電車に乗る。

降りる駅は家の二つ手前の駅だ。

この駅の前は商店街のようになっている。

その中に一軒だけゲームセンターがあり、聰一もときどき友達などと来ることがある。

## act9 テート?（ゲームセンター）

「結構、大きいんだねー」

「うん。それに人気もあるんだよね。

この町で遊べるところって少ないでしょ？」

「確かにね」

聰一たちの住む町は田舎というわけではないが都会というわけでもない。

街中まで行けば結構大きなデパートなどもあるが少し街中から離れば、住宅街がある。そこには聰一の家もあり、学校も歩いて行ける距離の場所にある。

「中も広いんだねー」

「そりゃあ、いろんな種類のゲームがあるからな」

柚月の服を買った店に入った時と立場が真逆になっている。

「それでユーフォーキャッチャーがやりたいんだっけ？」

「うん。でも、あれ難しいんでしょ？」

「いや、そんなんでもないよ」

聰一はユーフォーキャッチャーが得意なので、いいところを見せるチャンスだと思った。

「なにこれー、全然取れないじゃん！」

案の定、柚月はユーフォーキャッチャーでは何も取れないようだ。

「俺が取つてやるつか？」

「……もう一回やらせて」

どうやら柚月は負けず嫌いでもあるようだ。

「やつぱりダメだ……」

「俺にやらせて」

少し強引にユーフォーキャッチャーの操作パネルの前に行く。

狙いはもちろん柚月が狙っていた小さな猫のぬいぐるみだ。

失敗しないように慎重に操作をする。

見事に猫の足の部分に引っ掛けたり、小さな猫のぬいぐるみを取ることに成功する。

「わー！聰一君すごいねー！」

「ほら」

聰一は猫のぬいぐるみを柚月に差し出す。

「え？」

「やるよ」

「いいの？」

「うん」

「ありがとう」

聰一から猫のぬいぐるみを受け取ると嬉しそうに抱きしめる。

「次は何する？」

「他におもしろいゲームないの？」

「たくさんあるよ。

時間もあるし、色々まわってみる？」

「いいの？」

「うん。どうせ帰つてもする」とないし

「やつたー ありがとー」

「じゃあ、あつち行つてみるか？」

「うん」

聰一が指差した方にあるゲームは対戦格闘ゲームやレースゲームなどの

一人でも遊べるゲームがあるコーナーだ。

「これ、やってみない？」

「私こうこうのできないと思つよ……」

「いいから、やろう」

ゲーム機の中に百円玉を入れ、ゲームを開始する。

画面はキャラクターを選択するための画面になつている。

「どうあるの？」

「うう」

指をさしながら操作説明をする。

「うう？」

「そうそう。ほい、始まるぞ」

戦闘画面になる。

「え？ これ、どうあるの？」

「こうだよ」

柚月の手を動かしながら操作方法を説明する。

「え？ わかんないって……」

「あとは柚月がやってみ」

「うわ……なにこれ？ ユールーズって……負けちゃったよ……」

「まあ、初めてだから仕方ないよな」

「じゃあ次は私のやりたい」といい？

「いいよ」

「あれだよ。いい？」

柚月が指差した方向にあるのはプリクラがたくさん置かれている「一ナード」。

「もしかして、あれもやつたことないのか？」

「……うん」

柚月は恥ずかしそうに顔を赤らめている。

「わかった。行こうか」

聰一が歩きだし、その横を柚月が歩く。

「どれがいい？」

「うーん……これ！」

プリクラを撮るために色々な設定を決めていく。

「始まるよ」

「え？ どうすんの？」

「なんでもいいよ」

「じゃあ、いづー。」

そつ言うと柚月は聰一の腕に静かに抱きつく。

「柚月？」

「私じゃ、嫌？」

「……」

なんだよ、それ。

そんなふうに言われたら断るわけにいかなくなる  
というか、こっちが嬉しいくらいなのだが。

柚月はこんなに笑顔なのに、なんで俺は緊張してるんだ?  
まさか……柚月のことを……

……それだけはダメだ！

そんなことになってしまえば、これから一緒に暮らすのがな  
あまり考えないようにするが、自然と意識してしまつ。  
色々考てる間に撮影が終わってしまったようだ。

「聰一君、顔赤いよ？」

大丈夫？」

「え？ 大丈夫……大丈夫……」

大丈夫なわけないよな……

まだ柚月は腕に抱きついたままだ。

腕になにか柔らかいものがあたつていて……

「完成したの取りに行こうか」

このプリクラは撮影が終わったあとに出てくる写真は  
撮影する場所の外にある取りだし口から出てくる。  
もう柚月は腕から離れている。

聰一は顔が真っ赤なまま取りだし口の前に行く。

「はい、聰一君」

出てきた写真をわけ、柚月が半分をわたしてくれる。

聰一の腕に笑顔で抱きついている柚月と

少し顔の赤い聰一が写っている。

「また一緒に撮ろうね」

「うん……」

「そういえば、今何時？」

「え? って、もう七時半じゃん!」

「意外と長く遊んじゃったみたいだね」

「もう帰るか。ここからなら歩いて帰れるしな」

「そうだね。」

一人はゲームセンターから出て、歩いて家に向かう。

家までは歩いて十分ほどだ。

「今日は楽しかったねー」

「そうだな」

「ありがとね、聰一君」

「お、おひ……」

「もしよかつたら、また一緒に遊びに行こうね」

「そうだな」

カンー カンー

会話をしながら歩いていると、道路の横にある家と家の間から大きな音が聞こえてくる。

金属のようなものが擦れてくるような音だ。

「ねえ……なんの音?」

「……わかんない。見てみるか」

そう言って音の聞こえる所に向かう聰一。

そこには……

## act9 テート？（帰り道の魔法使い）

金属音が聞こえた場所、そこにいたのは一人の人だ。  
少し暗く、家と家の間なので街灯の明かりも届かないのに顔がよく  
見えない。

そこには二人は、どちらも刀のようなものを持っていて。  
片方は普通の日本刀のような形のもの。  
もう片方は、フェンシングで使われる剣のような形をしている。  
その二人は持っている武器で攻撃しあっている。  
どちらかの攻撃が当たるわけでもなく、勝負は互角といったところ  
だ。

二人の動きはとても速く、聰一が見切れる速度ではない。

「ねえ、あの人たち何やってるの？」

柚月の声は、驚いているような動揺しているような感じだ。

「わかんない。でも絶対、魔法使いだよな？」

「多分。動きが普通じゃありえないほど速いもんね」

そのとき戦っている二人に動きがある。

細い剣を持っている方が日本刀を持っている方の隙をついて逃  
げ出す。

しかし「逃げる」というのが正しいのかはわからない。

正しくは「消えた」というような感じだ。

暗闇にスゥー……と消えていったように見えた。

「また逃げられましたか……」

残りの一人は日本刀を近くに落ちていた鞘に入れる。

そして、聰一と柚月のいる方向へ歩いてくる。

「君たち、今の見てた？」

話しかけてきたのは女性だった。

眼鏡をかけていて頭のよそうな感じのお姉さん的な印象を受ける。

「はい」

聰一は、なぜか堂々としている。

「そのわりには驚いてないみたいね」

「あなたも魔法使いなんですか？」

「「も」っていうことは君も、そななのかな？」

「はい」

「へー　じゃあ気をつけた方がいいよ。  
じゃあ、またどこかで会いましょうね」

女性は歩きだそうとする。

「待つてください！」

俺が「魔法使い」だから気をつけなくちゃいけないんですか？」「さあね。詳しいことは私も知らないから。

でも最近、起きている殺傷事件の被害者は全員魔法使いよ。

「じゃあ犯人は、あなたと戦つてた人なんですか？」

「それもわからないわ。

でも、味方でないことは確かよ」

「そうですか……」

「じゃあ私は、まだやることがあるから」

「その女性は、どこかへ行ってしまう。

「聰一君、今の人誰？」

「わかんない。でも魔法使いなのは確かみたい

「そう……じゃあ、私たちも帰りましょうか」

「うん」

その場から離れ、聰一の家へ向かう。

「さつきの人たち、なんだつたんだろうね……」

「さあね。でも悪い人じやなさそうだし、大丈夫じゃないかな？」

「でも、の人たちが戦つてた場所、見た？

「堀とかに傷がたくさんついたりしてたんだよ？」

「そりゃあ、魔法使い同士の戦いだしな」「武器を持つてたのに、魔法使いなの？」

「なんじやないの？」

本人も「魔法使いだ」みたいなこと言つてたし聰一は、この話をするのが少し面倒くさかつた。

正直、あの二人が誰でも関係ない。

自分たちに影響があるわけじゃないし、面倒な」とこには巻き込まれたくないからだ。

「もう風呂、入っちゃえよ」

「今日も私が先でいいの？」

「うん」

「わかったー ジャあお先にー」

柚月は風呂場に向かう。

一緒に家で女の子が風呂に入るのも、これで一度目。だいぶ慣れてきた。

そのおかげで、なんとなく楽な気がする。

「ふー 聰一君も、もう入っちゃえば?」「そうだな」

次は聰一が風呂場に向かう。

いつもどおり浴槽に浸かっていると、ガラスの割れるような音がする。

一瞬、驚いたが気にせず入浴を済ませる。

風呂場から出るとビングには柚月の姿がなかつた。

「また部屋の中にはいるのかな?」

そう思い、しばらく待つてみるとする。

十分経つても二十分経つても柚月は戻つてこない。

「寝てるのかな?」

さすがに心配になつた聰一は柚月の部屋に行ってみることにした。

「柚月ー 入るぞー」

返事がない。仕方がないので、そのまま入る事にした。

部屋の中にも柚月の姿がなく、部屋の奥にあるカーテンが風で靡<sup>なび</sup>いていた。

そこに近づいてみると窓ガラスの破片は部屋の中に散らばっている。つまり外から割られたということだ。

「まさか……柚月……」

窓の外を見てみるが柚月の姿はない。

「誘拐……つてことか？」

くそ……風呂に入ってるときにはづけば……」

急いで玄関に向かい、外から割られた窓の様子を見に行く。窓ガラスの割られ方は、「割られている」というよりは「切られている」というような感じだ。

「でも、柚月は魔法を使えるからな……」

その点を考えると柚月が簡単に連れ去られるとは思えない。

しかし、窓ガラスは「切られて」いるのだから

今日会った魔法使いのように武器を持った魔法使いの仕業だとすれば納得もいく。

ふと、さつき会った女の言つた言葉を思い出す。

「気をつけた方がいいよ」

もしかしたら、これはあのとき戦っていたもう片方の人やったことなのかもしれない。

あのとき聴一たちが戦いを見ていたといつに氣づいていたとして、

柚月だけが相手に都合の悪いものを見ていたとしたら狙われてもおかしくない。

「とにかく、柚月を探さないと……」

そうは思つてみるものの、

辺りは暗くどこに行つたのかもわからぬいため、どうにもならない。

「なんで、いうときに限つて俺は何もできないんだよ……」

聴一は悔しくて泣きたくなるほどだ。

そのとき何か小さなものを感じたような感触が足から伝わってくる。

足下を見てみると柚月が美羽や氷璃と電話をするために使っていた水晶が落ちている。

「氷璃さんに電話しても、わかるわけないよな……」

ここに水晶が落ちているということは

柚月が電話をしているときになにか起きたのかもしれない。

そう考えてみると氷璃に電話をするのも無駄でもないような気がする。

「もしもし氷璃さんですか？」

「そうよ。聰一君？」

「はい」

「柚月ちゃんは大丈夫なの？」

「柚月のこと、なにか知ってるんですか？」

「それが、さつき電話してたら急に電話が切れちゃってさ……なんかあつたのかと思って、もう一回電話しても出ないし……」

「そうですか……」

柚月は、どんなことを話していましたか？」

「え？ 武器を使う魔法使いについて聞いてきたけど……」

「わかりました」

「それで柚月ちゃんはどうしたの？」

「今はなんとも言えません……」

「もしかして、誘拐とか……？」

「そうかもしだせん。

では失礼します」

電話を切り、もう一度まわりの様子を見てみる。

後ろを振り向くと一人の男が立っている。

全然、気づけなかつた。

いつからいたのか、それすらもわからない。

「お前は、あの女の子の仲間か？」

なんか危なそうな雰囲気だ。

「あなたはどうなんですか？」

聰一は強気で乗り切ろうとする。

「俺はどちらでもない。

しかし女の子を連れて行ったやつらの敵だがな

「柚月の行方を知っているんですか？」

「さあな。俺はやつらの後を追っているだけだ。

今日はここで見失つてしまつたのだ。

そしてここにじばらく様子を窺つていたら君が来たというわけだ。

「柚月を……誘拐された女の子を助けるのに協力してくれませんか

？」

「駄目だな。

なぜ名前も知らない、今会つたばかりのやつに協力しなくてはいけない？」

「すいません……

でも……どうしても柚月を救いたいんです！」

「……お前が俺に協力するといつなら考えてやるが？」

「本当ですか？

「ありがとうございます！」

「ああ。その子を探す前に君と話しておきたいことがあるんだがいいか？」

「……わかりました。

では、ここで話しても落ち着かないで家の中に入つてもうつてもいいですか？」

「いいのか？」

「はい」

会つたばかりの人を家に入れるのは気が引けるが柚月のためなら仕方がない。

そして聰一は男とともに家の中に入る。

act11 柚月の居場所

「そういえばお前も魔法使いなのか?」

「はい」

「なら話は早いな。

多分その子を誘拐したのは魔法使いだろ?」

「俺もそう思います」

「そうだ、この人見たことないか?」

「うううと男はズボンのポケットから一枚の写真を取り出す。

その写真に写っている人物は柚月と一緒にゲームセンターの帰り会つた女性だった。

「知つてます」

「どこで見た?」

「この家のすぐ近くです」

「そうか……」

「その人がどうかしたんですか?」

「いや、そのことはまた今度だ」

「そうですか……」

それで柚月を見つけるにはどうすればいいんですか?」

「そうだな……ひとつだけ心当たりがある。

そこに行つてみるか?」

「はい!」

「かなり危険だぞ?」

「かまいません」

「本当に死んでも知らんからな」

「わかつてます」

聰一は柚月のためなら命をかけてもかまわないと思っていた。

「それだけの覚悟ができるいるのなら大丈夫だな。

よし、行くぞ」

もう一度、外に出て男についていく。

「そういうえばお前の名前、まだ聞いてなかつたな」

「聰一です。森嶋聰一」

「聰一……か」

「あなたは？」

「さあな

「どういうことですか？」

「記憶が無いんだよ。

それで、さつき見せた写真に写つてた女に助けてもらつた。  
戦い方も魔法の使い方もある女の女に教えてもらつたんだよ」

「……」

聰一はこの男の言つていることに納得できなかつた。  
根拠は無いのだが、なんとなく嘘をついているような気がして仕方がない。

でも今は柚月を助けるのが最優先。

多少、信じられなくてもついていくことにした。

「ここ二だ」

聰一が連れてこられた場所は結構大きめの倉庫で、その倉庫の雰囲気は

ドラマなどで、不良が溜まり場としているような感じの倉庫だ。

「この中に柚月がいるんですか？」

「さあな。入るぞ」

男は倉庫の中へ入つていく。

その後を聰一が歩き、倉庫の中に入る。

倉庫の中には鉄パイプや工具などが綺麗に置かれている。

その様子から今も使用されている倉庫のようだ。

「誰もいりませんね」

「そうだな」

「やっぱり、『レジビ』ないんでしょうか?」

「かもしだれないな……」

聰一は辺りをよく見てみる。

暗くてよく見えないが、白い布がかぶせられているテーブルを見つける。

その布の膨らみ方からテーブルの上には、なにか置かれているようだ。

テーブルに近づき、布をめくつてみる。

「柚月!」

布にくるまれていたものは柚月だつた。

柚月は田を閉じている。

「おい! 柚月、大丈夫か!」

軽く方を揺すりながら声をかける。

「う……うーん……」

田は覚まさないが、どうやら死んではいないようだ。

「つむせーなー 誰だよ?」

倉庫の奥の方から女性の声が聞こえ、倉庫の明かりがつく。

「まづい!」

男は慌てて聰一の方に来て、聰一の腕を引っ張りテーブルの下に隠れる。

「つたく……誰だよ、こんな時間に! さつさと出でこいや!」

その女の声から、かなり怒つていることが分かる。

「どうするんですか……」

「あなた……とりあえず様子を窺うぞ」

男の表情はかなり冷静だ。

「そこか!」

女は右手に持つていの細身の剣を聰一と男の隠れている方向に一振り。

その瞬間キィイイ……といづよづな金属がこすれ合つよづな音が發生し

聰一と男が隠れているテーブルの横にある古びたロッカーが真つ二つに切れる。

「……風の魔法！？」

そう思つたが美羽が使つていたものと発生時の音も発生のさせ方も、全くの別物だ。

「……隠れてたほうが危なそうだな」

そういうと男はテーブルの下から出る。

「やつと出てきやがつたか！でも、もう一人いんだろ？」

聰一も男の言つとおり隠れている方が危ないということがわかつたので、

テーブルの下から出てくる。

「なんだよ！ただのガキじやねーか！」

女の言葉づかいは、とても荒々しい。

そして、とても威圧的だ。

「どうすんですか……」

「戦うしかねーだろ」

「そつちもその気みてーじゃねーか！  
なら話は早い！一人とも殺してやるよー」

## act12 女との戦闘

女は剣を振る。

さつきと同じように金属がこすれ合うような音がある。  
これに当たれば危ないのはわかっている。

しかし、どのような軌道なのか見えないので全くわからない。

「同じ攻撃が当たると思うか？」

男の手には巨大な剣が持たれている。

いつから持っていたのか……あんな巨大な剣を持つていれば最初から気づいているはずだ。

男はその巨大な剣を盾のように使っている。

「やっぱり、あんたらも魔法使いか……」

女の声はさつきと比べて落ち着いている。

「いくぞ！」

男は攻めの体勢になる。

一気に女に近づき巨大な剣を振り上げる。

その攻撃が隙だらけなのは聰一が見てもわかる。

「そんな隙だらけの攻撃でいいのか？」

女は横に一步動くと剣を横に振る。

それに合わせて男も剣を振り下ろし、お互いの剣がぶつかり合いつ。剣の大きさや体型の違いから男の方が有利に感じられるが、互角のようだ。

女は素早く男がいる方向と逆に動き男の背中を切りつける。

その攻撃は男の背中に浅く当たってしまう。

「さあ、次はテメーの番だ！」

かかってこいよ！」

女は聰一の方を見ながら挑発的な態度をとる。

ここで攻めたら負け

相手の動きは、とても速い。

自分から攻めれば攻撃を避けられ逆に攻撃を受けてしまう。  
女の攻撃は魔法のようだ。

ならば、それを吸収してその直後の隙に魔法を当て一撃で終わらせる！

「なんだよ！ 攻めてこねーのか！」

なら、こいつからいくぞ！

女の攻撃はさつきと違う。

剣を振るのではなく、猛スピードで聰一に近づいてくる。  
これでは「剣」の一撃を受けてしまう。

「剣」は「魔法」ではないはずなので、吸収することができない。  
つまり、この一撃を受けてしまった瞬間聰一は終わってしまうというわけだ。

この攻撃をどう防ぐか……

聰一はふと氷璃が氷の壁を盾のように使っていたことをおもいだす。

「これだ！」

聰一の目の前に氷の壁が発生し、女はそれに気付き氷の壁を切りつける。

氷の壁は真っ二つに切られる。

慌てて発生させたものなので強度は、あまりなかつたようだ。

「氷の魔法かよ！」

その程度の魔法で勝てると思つてんのか？

女はさつきと同じ距離まで下がる。

その様子から、この距離が一番戦いやしい間合いなのだろう。  
ならば、この間合いを崩せば少しは有利になるはずだ。  
聰一は走りだし、間合いを崩そつとする。

「逃げんのか？」

予想どおり女は、聰一の方向へ向かって走り出す。

一番魔法の使いやすい距離まで近づいてくる。

そのとき柚月の魔法を合成し、重力を大きくする。

「なんだ……体が重くなつた……

「ダメー、何しやがつた！」

「魔法を使つただけだよ」

「このままにしておけば相手も身動きを取れないはずだ。

この女をどうしていいのかもわからないので、そのまま少し考えてみる。

待てよ……重力で身動きが取れなくなるつていうことは、

柚月が気絶させられるわけがない……

もう一度、女のいた方向を見てみる。

女の動きを封じていた場所……そこに女はいなかつた。

「くそ……」

「そんな魔法で私を止められると思つた？」

背中に鈍い痛みが走る。

なにか硬いもの殴られたような……そんな感じの痛みだ。

「どうやって逃げた……」

「さあな」

女は剣を振り上げる。

終わつた……

聰一は死を覚悟し、目を閉じる。

「うわーっ！」

その瞬間、女の叫び声が聞こえる。

さらに剣が地面に落ちる音……

「聰一君、その魔法は一つの方向だけに使つてもあまり効果ないんだよ……」

聞きなれたかわいい声。

少し元気がないように感じるが、これは間違いなく柚月の声だ。

「柚月……」

「『めんね、心配かけて……』

「うん。それより……」

聰一は女の方を見る。

右手首がありえない曲がり方をしている。

「これは柚月がやつたようだ。

「なにしてくれてんだよ……」

「女は左手で剣を持ちなおす。

「まだやる気か？」

「そうだよ……死ね！」

女は柚月のいる方向に剣を振ろうとする。

「聰一君、『じめんね』

柚月は前に発生させたものと同じ黒い球体を作り出す。

大きさは前より小さいままで保っている。

直径一センチほどだ。

女の魔法は黒い球体に当たったようだが全く効果がないようだ。

黒い球体はゆっくりと女に近づいていく。

「ハハ……もう終わりかよ……」

これが女の最後の言葉だった……

黒い球体は女に当たると協力な白い光を発する。五秒間くらい光が出続ける。

聰一が目を開けると目の前に女が倒れている。

「ハアハア……」

柚月は肩が動くほど息が荒くなっている。

「柚月！」

慌てて柚月に近づくと、ちょうど聰一の方向に柚月が倒れてくる。息はしているので気絶しているだけのようだ。

「無理させて、ごめんな……

もつと俺に度胸があれば……」

ズズズズズズ……

魔法の世界から地球に来るときに入ったブラックホールのようなものが

発生するときと同じような音が背後から聞こえてくる。

「まさか地球の魔法使いがここまで強いとはね……」

黒い影のような煙の中から若い男が出てくる。

「まだいるのか……」

聰一は思わず身構える。

「ああ、戦う気はないから」

男の様子は本当に戦う気はなさそうだ。

「あなたは誰ですか？」

「今度、会ったときに教えるよ。

僕の本当の目的は、そこに倒れてる女の回収だからさ」

男は倒れている女を抱え、もう一度黒い影を発生させる。

「じゃあ、僕はこれで失礼するよ」

男は黒い影とともに消える。

何者だつたのか……

使う魔法もよくわからないが雰囲気はとても強そうだつた。

それに「今度、会つたとき」つてもう一回会つことが決まつてゐるみたいだつた。

とにかく今は柚月の無事を確認できたのでよかつた。

「柚月、大丈夫か？」

「うう……ん」

起きそうにない。

仕方がないので柚月を抱き、倉庫から出ようとする。

そのとき、ここまで案内してくれた男がいないことに気がつく。

「いつの間にいなくなつたんだ……」

少し気になつたがもう夜も遅い。

柚月を抱きかかえたまま家に向かつ。

柚月はとても軽くて柔らかい。

しかし、ここで余計なことを考えてはいけない。

今、柚月は聰一の背中に背負われている。

一歩歩くたびに柚月の体は揺れ、なにか柔らかいものが聰一の背中に当たる。

その感触に耐えながら家に向かつて歩き続ける。家までの距離は結構ある。

約十五分間、これに耐え続けなくてはいけないと氣が遠くなりそうだ。

「くそ……余計なこと考えるな！」

自分に言い聞かせ、歩く速度を少し上げる。

十五分後、やつと家につく。

「ハアハア……やつとついた……」

家中に入り柚月を静かに布団に寝かせる。

時刻はもうすでに深夜二時を過ぎている。

聰一も自分の部屋に戻り眠ることにして、

今日起きたことについては明日かんがえることである。

「ハアー疲れたー」

ベッドに倒れ込む。

そして、すぐに眠りについてしまう。

次の日、目が覚めたのは十一時過ぎだった。  
リビングに行くが柚月の姿はなく、テーブルの上に一枚の紙が置かれている。

「買い物に行つてきます」

そう書かれている。

「昨日さらわれたばかりなこと、よく家から出でられるな……」

関心と呆れを同時に感じる。

「そうだ昨日のこと……」

もう一度、昨日のことを思い出してみる。

窓から入り、あの剣を持っていた女が氷璃と電話していた柚月を誘拐した……

ここまでではいい。

しかし「なぜ誘拐したのか」といふことと「なぜ柚月なのか」ということがわからない。

もしもゲームセンターの帰り道に柚月が相手にとつて都合の悪いものを見たのだとすれば、

あとから現れた若い男が柚月を殺していたはずだ。

それともう一つ。

一緒に柚月を探してくれた男の行方だ。

気絶させられた男はその場にずっといたはず。

しかし女を若い男が連れて行った後にはいなかつた……

とても不思議な話だ。

疑問は、まだある。

若い男が言った言葉「今度、会った時に教えるよ」  
これは、もう一度会うことになるということなのか?  
考えれば考えるほど疑問が増えてくる。

「ただいまー」

柚月が帰ってきたようだ。

これで柚月がさらわれたときの様子も聞くことができる。

「おかえり。昨日のことについて話したいんだけど……？」

「いいよ。ちょっと待つて」

柚月は買い物袋の中身を冷蔵庫の中に入れ、リビングにある椅子に座る。

「それで昨日のことだけ？」

「うん。柚月がさらわれたとき、どんな感じだった？」

「ガラスの割れる音がした後、すぐに背中を殴られて気絶しちゃったから、あまり覚えてないんだよね……」

不意打ちをされたのなら簡単に柚月がさらわれたことにも納得がいく。

「なんで、さらわれたのか心当たりはない？」

「なにもないよ」

「そう……」

そのときテーブルの上に置いてあつた水晶が光る。どうやら氷璃から電話が来たようだ。

「もしもし」

「あ、柚月ちゃん？」

「は」

「氷璃だけじゃ、氣をつけてほしいことがあるの」

「なんですか？」

「昨日、柚月ちゃんとの電話が切れたあと聰一君から電話が来てそのとき柚月ちゃんが誘拐されたことを知つて、色々、調べてみたんだよ。

それでわかつたことなんだけど……

こっちで指名手配中の犯罪者が何人も地球に逃亡してゐるらしいんだよね。

そいつらの目的が地球に魔力の塊を送り込むことなの

「それがどうかしたんですか？」

「魔力の塊を送り込むには、その付近の魔力がゼロの状態にしなくちゃいけなくて、

その目的のために柚月ちゃんたちが住んでいる町の魔法使いを襲っているってわけ」

「じゃあ私がさらわれたのは……」

「そう。魔力を持っている柚月ちゃんを殺すため」

「それなら私の不意をついたときに殺せばよかつたんじゃないですか？」

「私もそいつらの考へてることが全部わかるわけじゃないからなんとも言えないけど、とにかく気をつけてね。」

「わかりました……」

柚月は電話を切る。

「聰一君、昨日私たちが戦つたやつ犯罪者だつて……」

「それも結構、大人数のグループみたい……」

「そうか……じゃあこれからも戦わなくちゃなー！」

「守ってくれる？」

「え？」

「昨日みたいに私のこと守ってくれる？」

「ああ、当然だ！」

「ありがとう。それだけで心強いよ」

「そうか。それでなにをすればいいんだ？」

「その犯罪者たちの目的は魔力の塊を地球に送りこむことなんだって。

そうするには付近の魔力をゼロにしなくちゃいけないらしいって……

「それで連續で魔法使いが襲われてたつてこと？」

「多分そうだと思う……」

「それで魔力の塊が地球に送りこまれたらどうなるの？」

「……」

「もしかして聞いてなかつた？」

「今、聞いてみる」

柚月は水晶を使いもう一度氷璃に電話をする。  
「氷璃さん、もし魔力の塊が地球に送り込まれたらどうなるんですか？」

「え？ 多分、地球の常識が全部狂うだろ？ ね」

「そうなつたら……」

「そうよ。地球上に住んでいる人たちは何もできなくなつて魔法に詳しい人に頼り始める。

そいつらが魔力の塊を送り込んだ張本人だとも知らずにね」「もしかして、それが目的なんですか？」

「多分ね」

「わかりました……では」

柚月は電話を切る。

「聰一君、今すぐ戦いに行こ！ 」

「え？」

「だつて、あいつらのやううとしてる」と最低だよ？

「待て、その前に説明……」

「ごめん……」

「それで、どうしたの？」

「氷璃さんから聞いたんだけど、

魔力の塊を地球に送り込んで常識を全て狂わせて、どうにもできなくなつた人たちに魔力の塊を送り込んだ人たちが頼られ始める……魔法に詳しいからね。

そうすれば地球上の人たちより上の立場になつてしまつてしまつていうことでしょ？」

「なるほど……」

でもさ俺たちが居る限り、この付近の魔力はゼロにならないわけでしょう？

だったら俺たちが殺されなければ大丈夫なんじゃないの？」

「そうだよね……襲われたとしても聰一君が守ってくれるもんね……」

「ああ。だから安心しろ」

「うん」

「俺たちから動く必要なんてないんだよ。

襲いかかってきたら、それを返り討ちにしてやればいいんだから」

「そうだね……」

「じゃあ、これからはなるべく一緒に行動するようにするか

「うん！」

これで地球に魔力の塊を送り込もうとしているやつらの対処法はできた。

あとはその魔法使いの強さが問題となる。

柚月を誘拐した女程度の強さならばなんとかなるがあまりにも強い敵が現れたとしたら……それでもなんとかするしかない。

「柚月、また魔法の特訓しないか？」

「そうだね……強い敵が現れたら困るもんね」

「俺の魔法は強化しようにも、どうすればいいかわからないから

柚月の黒い球体の魔法をもつと強化しようか

「……また聰一君に吸収させることになっちゃうよ？」

「俺のことは気にしなくていいよ。

それにたくさん吸収した方が俺も強くなれるし

「わかったよ……

じゃあ、さっそく始めるよ？」

「よし、ここ！」

ガシャン！

また昨日と同じようにガラスの割れる音がする。

## act15 大男の襲来

「もしかして、また？」  
「わかんないけど……」

聰一は少し身構えながら音のした方へ向かう。  
今度は聰一の部屋の窓が割られていた。

そして部屋の中には身長が一メートル近くある大男が立っている。  
「本当にお前らがあいつを倒したのか？」

「あいつって誰のことですか？」

この男が言っているやつのことなんてわかっている。

昨日、戦った女のことだ。

「細い剣を持った女だよ。うるさいやつ。覚えてないか？」

「それなら昨日、戦いましたよ」

「やっぱりお前らか。あいつも情けねーなーこんな子供もに負ける  
んだからよ！」

「なににきたんですか？」

「あ？ 敵討だよ！ あんな雑魚でも仲間だからな。

そういうわけでちょっと相手してもらつ！」

大男はいきなり魔法を使い始める。

よくわからない魔法だ。

確かに魔法を使っているのだが、なにも起きない。

だからこそ聰一は自分から攻めることができなかつた。

相手の魔法を知る……それが聰一の勝つために必要なことだからだ。

「え？ なによこいつら！」

後ろから柚月の声が聞こえてくる。

「どうした！」

柚月のまわりには体が透けている人がたくさんいる。

「魔法が……効かない？」

柚月は必死に魔法を使おうとしている。

「どうなつてんだよ……魔法が使えないって……」

そのとき聰一に一つの考えが浮かぶ。

もしも柚月のまわりに見えている人たちが魔法で作られたものだとしたら……

それを吸収することができる。

しかしそうでなければ自分も魔法が使えなくなつて大男に殺されてしまうかもしない。

でも柚月を救うためには、これに賭けてみるしかない！

聰一は柚月のいる方向へ行こうとする。

「君の相手は俺だよ」

さつきまで逆方向にいたはずの大男が聰一の目の前にいる。

腹部に激痛が走つた。

どうやらこの大男は和彦と同じように魔法はあまり使わないようだ。

「くそ……」

吸収しておいた魔法を合成し始める。

ガツ！

もう一発、腹部を殴られる。

「君のやりたことはわかつてんだよ！」

聰一のやりたいことは全て知られている……

つまり大男はもう魔法を使わないつもりなのだろう。

そうなれば喧嘩や殴り合いとは無縁の生活を送つていた聰一は圧倒的不利になる。

柚月もまだ魔法を使えないようだ。

「ハアハア……」

このままでは簡単に殺されてしまう。

ならば何もないよりはマシだ。

そう考へ、聰一は大きく振りかぶつて大男に殴りかかる。

「そんな振りかぶつた攻撃が当たると思うか？」

大男は聰一の手首を掴み床に投げ飛ばす。

「ウツ……」

ものすごい勢いのまま床に背中から叩きつけられる。

意識も朦朧としてきた……

「どうすればいいんだよ……」

柚月も魔法を使えないまま透明な人たちに苦しめられているようだ。

「どうせここで死ぬんだから、なんで負けたのか教えてやるよ。あらかじめ吸収しておいた魔法を合成するのに隙が大きすぎだ。そしてもう一つ、あの女の子がいないと何もできないんだな」

「長々と語つてくれたじゃねーか……ハアハア……」

意識が朦朧としている間も勝つための方法を考えていた聰一は、大男が話し始めたときに魔法の合成を始めていた。

どんなに朦朧とする意識の中でもあれだけの時間があれば余裕で合成を済ませられる。

「まだ、やろうってのか？」

「俺たちの……勝ちだよ……」

聰一の右手には柚月が発生させた黒い球体ができている。しかし大きさは柚月のものの半分にも満たない。

「この魔法なら……この大きさで十分だよな？」

黒い球体は一直線に進み大男の脇腹を貫通する。

大男はそのまわりの服が血で滲んで行くのがわかるほど出血をしている。

「ゴホッ……ゴホッ……」

大男は咳をしながら血を吐き出す。

「終わり……だよな……」

「くそ……」

最後の力で聰一に殴りかかるとする。

その攻撃はさつきまでのものとは全く違い、聰一でも簡単に避けることができた。

大男はそのまま床に倒れる。

そして柚月のまわりにいた透明な人も消えていく。

どうやら、あれは大男の魔法だったようだ。

「聰一君！大丈夫？」

「大丈夫だよ……」

聰一は柚月の肩を借りながら起き上がる。

「やっぱり聰一君は私を守ってくれるんだね」

ズズズズズズ……

昨日、女を倒した時と同じ音が聞こえてくる。

「君たちは本当に強いね」

黒い影の中から昨日と同じ若い男が出ててくる。

「なにがしたいんだ……」

「結構ボロボロだね。」

そういうえば名前を教えるんだっけ……

僕の名前はルード。ついでに目的も教えてあげるよ。

僕たちの目的は地球に魔力の塊を送り込むこと……

そして新しい魔法の世界を作り出すことだよ

「そんなことして、なにならんんだよ……」

「僕が作り出すんだ。新しい魔法の世界の王は僕つてこと

「もつとまともなやつだと思ってたけどな……」

「僕をバカにするのかい？」

どうかにしろ僕の目的のために死んでもらわなきゃいけないわけ  
だし……

今すぐ殺してもいいんだよ?」

「勝手にしろ!」

聰一は魔法の合成を始める。

作り出すものはさつきと同じ黒い球体。

これを当てれば一撃で仕留められるはずだからだ。

黒い球体はルードに向かって一直線に飛んでいく。

当たった……

「そんな攻撃は効かないよ」

確かに当たったはずだ。

しかしルードは無傷。

「やつぱり今、殺すのはやめる。

簡単に新しい魔法の世界の王になつてもつまらないからね。じゃあこれからもたくさん敵を送り込んであげるから、がんばって強くなつてね」

ルードはまた黒い影の中に消えていく。

「本当にあいつなんなの？」

「とにかく、これから現れる敵を全員倒せつて」とだら。「そりだよな……そうしないと魔力の塊を送り込まれしまつもんね」

「うん。大変になりそうだけど……がんばるか！」

「そりだね」

「そりだ、こんなところに敵を送り込まれたら家も壊れるし、近所迷惑にもなるからひと氣の無い場所に行かないか？」

「いいよ。それなら山奥のキャンプ場とかはどう?」

「うーん……今はキャンプをする家族も少しだからな……」「じゃあ普通に山奥に行こいつよ。

それなら、あまり人に迷惑はかからないでしょ？」

「そりだな。今日はもう攻めてこないとは思つけど……一応、今日のうちに移動しちゃつか」

「そりだね。じゃあ私は荷物をまとめてくるね」

柚月は聰一のそばから離れていく。

「痛いな……」

聰一は服をめくり大男に殴られた場所を見てみる。見ただけで殴られたのがわかるほど変色している。

「こりや、柚月には見せられないな……」

「聰一君ーあとなに持てばいい?」

「え? 食べ物を出来る限りと着替えだけでいいんじゃない?」

「わかったー」

柚月は準備を進める。

「終わったよ」

リビングには大きな鞄が一つ置かれている。

この中にテントや食糧、着替えなど必要なものがほとんど入っている。

そう思つと柚月の荷物をまとめむ能力が恐ろしく感じられる。

「どうする？」

「え？」

「こつ出発するの？」

「そうだな……もう行くか」

「うん」

柚月は鞄を持とうとする。

それを横から「俺が持つ」と言つて聰一が持ち、家から出る。ルードとの戦いが終わるまで、この家に帰つてくる」とはないだろう。

家に対しても「行つてきます」と呟き、駅に向かつ。

聰一の家からひと氣の無い山奥まで行くとなると電車に乗り、その後はバスで移動しなくてはいけない。

移動距離はあまりないのだがバスを待つ時間などの計算をしていかつたため

相当時間がかかつてしまつた。

山奥とは言つても下を見れば聰一の住んでいる町や海が見渡せる。

「ああ、やつとついたー」

柚月は遊び感覚のようだ。

「テント張るの手伝つてくれないか？」

「いいよー」

一人で協力してテントを張る。

家には一つしかテントがなかつた。

聰一はこのテントには思い出がある。

まだ幼稚園児だったころ、両親とともに一度だけキャンプに行つた。

そのときは海に行き、食べ物は海で獲ったものだけで済ますといつ

予定だったのだが

結局、近くのコンビニで食べ物を買つて食べる」となつた。

今、思い出せばとても懐かしい。

もう父も母もいないのだけれど……

「聰一君、なにボーッとしてるの？」

「『めん、ごめん少し昔のこと思い出しても……』

「そう……次は何をすればいいの？」

「そうだな……火をおこしておくか」

近くにあつた大きな石を円形に集め、その中に木を置く。そして持つてきておいたライターと着火剤で火をおこす。

「なんか戦うために来たつていうのが嘘みたいだね」

笑顔の柚月を見ていると本当にそうであつてほしかった。

できれば戦うことなどしたくなかった……

「戦いが終わつたらセ……また来ようか」

「そうだね。今度は普通のキャンプ場でね」

「うん。そろそろ晩飯作るか」

西の空は、もうすでに燃えるような橙色になつていた。

act17 新しい敵と美羽

「夕日、キレイだな」

「そうだね。こんなにちやんと夕日を見たの初めてかも」

「俺もだな」

夕日に照らされながら、一人は夕食の準備をする。

「やっぱり、いつこうときはカレーだよな」

「だよねー」 いつこうとこりで食べるカレーは格別だよね

「うん」

二人はカレーを食べるのに夢中になつている。

「（）ちそつさま」

「（）ちそつさまー まさか聰一君が料理できるとは思わなかつたよ

「 家に誰もいながら、いつも自分で作つてるからな」

「 そつなんだー」

夕日も沈み空は暗くなつていてる。

そんな暗い空の中に輝くいくつもの星……

そして下を見るといつも暮らしている町の夜景が見える。

「キレイだねー 私たちの町ってあんなにキレイだったなんて知らなかつたー」

「 そうだな。空も見てみろよ。星なんて滅多に見ないだろ?」

「 うん」

星と夜景を眺めたあと、一人はテントの中に入る。  
寝袋はちょうど二つあつた。

大きさも大人用のものなので問題ない。

「 そういえば、この中で寝るんだよな?」

「 そつだよ」

「 俺、外に行こうか?」

「別にこことよ。聰一君なら」

「……」

それはどういう意味だ？

俺を信じていいことか？

それとも……

いや、そんなはずはないよな……

「なに顔、赤くしてんの？早く寝よ！」

「わ、わかったよ……」

柚月は平然と寝袋に入り、すぐに眠りにつく。  
一方、聰一は無理矢理寝袋の中に潜り込むものの  
どうしても柚月のほうを意識してしまつ。

「ああ、もう！」

もつと深くまで潜り込み眠りつゝある……

まわりが明るく感じる。

そして鳥の鳴く声……

どうやら一睡もできないまま朝になってしまったようだ。  
寝袋から出て柚月を起こさないようテントの外に出る。  
そして少しだけ山の中を歩いてみると元に戻った。

迷わないように慎重に奥へ進んで行く。

少し進んだところで風の流れが変わったことに気がつく。

「これって……魔法だよな？」

もしかすると新しい敵なのかもしれない。

柚月がテントで寝ているので近づかせるわけにはいかない。  
テントのまわりはほとんど無風状態だったのに今は葉が揺れて音を  
たてているほどだ。

「どこだよ……」

色々な方向を見てみると木が多くてなかなか見つけ出しが出来

ない。

そのとき風が吹いてきている方向がずっと変わらないことに気がつく。

ならば風上に行けばこの風の発生源に辿り着けるとこうわけだ。

風上に向かつて歩き出す。

段々、風も強くなつてくる。

そしてついに風の発生源を発見することに成功する。

「美羽さん？」

そこにいたのは美羽と三人の黒い服を着て顔を黒い布で隠している人がいる。

その様子から戦っていることは間違いない。

どうやらこの風の正体は美羽が魔法を使うときに、無意識のまま発生させてしまう風のようだ。

三対一なので美羽は苦戦を強いられているようだ。

「美羽さん！」

「聰一君？」「こいつら敵だよね？」

「多分、そうだと思います」

「いきなり襲われたんだけど……」

「俺も戦います！」

今は美羽の風がある。

柚月の魔法は大量に吸収してあるので合成に苦労はしない。

一人の敵に狙いを定めてかまいたちのような風をおこす。

その攻撃は胸にあたり敵が倒れる。

「聰一君、強くなつたわね」

「ありがとうございます」

「でも、それじゃダメ。私もさつきから何回も攻撃を当てるのに何度も起きあがつてくるの。傷は残つたままなのに……」

「どうしてですか？」

「わからないわ。とにかく何か見つけられるまで戦い続けなくてはいけないわね」

「わかりました」

黒服の人たちは動きが変だつた。

フラフラしているような……そして何より動きが遅い。だから攻撃を避けることは簡単なのだが無駄に魔法を使うわけにはいかない。

「聰一君、ちょっと刺激強いかもしれないから目、閉じてて

「え？」

美羽の一言に戸惑い目を閉じることできず、そのあとに起きる「ヒヒヒ」とを見てしまう。

美羽が発生させた魔法は黒服の人の首を切り落とす。そこからは、ありえない量の血が出ている。

聰一はそれを見て気持ち悪くなるが耐え続ける。

「これでも動くの？」

首を切り落とされた黒服は胴体だけで、一いち方に向かってぐる。「どんな魔法使つたらこいついうふうになるのよ！」

美羽は怒りと驚きを隠せないようだ。

「美羽さん、身動きができないようにすればいいんじゃないですか？」

「どうやって？」

「俺もあまりやりたくないんですけど……体を切り刻みます」

「確かにそれなら、勝てるかもしないわね」

「じゃあ、やりますよ……」

聰一は魔法の合成を始める。

物体を簡単に切れるだけ鋭い風を作り出し、それを黒服にむかって発生させる。

何発も発生させ、当てる位置も変えながら攻撃を繰り返す。

「ハアハア……」

一度にこんなに魔法を使つたのは初めてだった。

そして人を傷つけたのも……

黒服の体はいくつにもわかれ、身動きがとれたとしても

腕、足、胴体がバラバラなので攻撃することはできないだろう。

「それでももとの体に戻られたら俺、泣きますよ……」

「私もよ……」

美羽も他の一人を同じように切り刻んでいた。

黒服たちの体はバラバラにも関わらずそれぞれの部分で動いているのがわかる。

「なんで脳が繋がっていないのに動くんだけよ……」

「もしかしたら、そういう類たぐいの魔法を使われているのかもね」

「そんな魔法があるんですか？」

「魔法の種類は無限だから、ありえるんじゃない？」

ズズズズズ……

この音を何度聞いたのだろう……  
音を聞いた瞬間にルードが現れたといふことがわかるようになつてしまつた。

「こいつらは、なんだつたんだよ！」

「まあまあ、そんな怒らないで。怒りたいのは僕の方なんだからさ

「なんでだよ！」

「敵が増えたから。それも強そうだし」

「聰一君、もしかしてこいつが？」

「多分、敵のリーダーだと思います」

「それじゃあ今日はまだ戦つてもううからね。

次の相手はもしかしたら君たちが一番戦いづらいかもね

「どうこいつことだよ？」

ズズズズズ……

またさつきと同じ音がして黒い影の中から黒い服を着た女の子が出てくる。

普通の中学生くらいの女の子なのだが、全く普通ではない。  
右手に持つて居る、見るからに強力そうな銃器……  
さらに背中には、もつと巨大な兵器のようなもの。

見える限りではこれだけだが服の形状などから、まだ武器を隠し持つて居ると思われる。

「戦争でもする気かよ……」

「聰一君、あの子が持っている黒いもの何？」

「地球で戦争をするときに使う道具です。危険なので氣をつけください」

「気をつけろって言つても、どんな道具なのよ。……」

「あの先端から、ものすごい速さで弾丸が飛んできます。それに当たつたら……」

「わかつたわ。とにかく先端から出でてくるものに気をつければいいんでしょ？」

「はい」

聰一は近くにある木の陰に隠れる。

美羽も同じように聰一が隠れている木とは違う木に隠れる。  
運よく女の子は聰一たちが隠れていることに気づいていないらしい。

「なんで魔法使いの戦いに地球の武器が使われるんだよ。……」

女の子は銃を構えると、それを乱射し始める。

銃声が森の中に轟き、まわりの木々はどんどんボロボロになっていく。

「これが地球の道具、……」

美羽は驚き、その場に立ちつくしている。

美羽の前に立っている木も、もうボロボロだ。

そして女の子は美羽が隠れていることに気がつき、その方向に銃を構えている。

「危ない！」

聰一は美羽のいる方向へ飛び込み、美羽とともに地面に倒れ込む。

「大丈夫ですか？」

「え？ うん……」

「どうすればいいんだよ……そつだ！ 重力だ！」

弾丸の進行方向と逆に重力を使えば、こちらには弾丸が飛んでこない。

地球で作られた兵器なのだから、「通常」の状態の地球では強くてあたりまえ。

しかし、その「通常」の状態を狂わせてしまえば勝ち目がある。  
次の発砲……それに合わせて魔法を発生させれるように魔法の合成を始める。

もう一度、銃を構えた女の子は聰一と美羽がいる方向に発砲し始める。

女の子の指の動き……それで発砲するタイミングを把握し、重力を発生させる。

銃口から放たれた弾丸は、女の子の方向へ飛んでいく。

女の子の頬に軽く当たり銃弾はそのまま飛んでいく。

女の子は驚いた表情のまま聰一から少し離れる。

そして女の子は服の中に隠していた手榴弾を投げつける。

これを女の子の方向へ飛ばしてしまえばこの戦いは終わるだろ？……

しかしそれをするのは気がひけた。

聰一は誰もいない方向へ飛んで行くように重力を発生させる。

その方向で爆発する音が聞こえた。

「聰一君、あますぎるよ。たとえ女の子でも敵なんだから……」「わかつてますよーそんな」と……」

思わず声を荒げてしまう。

「もういいわ。あとは私がやるから

「……」

なにも言い返すことができなかつた。  
美羽は女の子の方へ近づいていく。

女の子は背負つていた大きな銃を取り出す。  
それに構わず美羽は女の子に近づいていく。  
女の子の目は鋭く美羽を睨みつけている。  
そして美羽に向かはれている銃の引き金を引く……  
聰一はその瞬間、目を閉じてしまつ。

人が倒れる音……

美羽さんが撃たれた……

「美羽さん！」

目を開け、大声で叫ぶ。

「なに……」

腕から血を流し、その部分を押さえながら立つてゐる。

そして、その前には女の子が倒れている。

「美羽さん！大丈夫だったんですか？」

「私が簡単に殺されると思う……？」

「そう……ですよね」

「へー 地球の武器が相手でも大丈夫なんだ

「お前はなにがしたいんだ！」

美羽の表情や言葉の強さなどから怒つてゐることがわかる。

その様子を見て聰一も少し恐怖を感じる。

「君に言つてもわからないと思うけど？」

「いいから答えろ！」

美羽がここまで攻撃のために魔法を使ったのは初めて見た。ものすごい強さの風……その風は渦を巻くように吹き荒れルードを切り裂こうとする。

しかしルードの田の前には黒い影が発生している。ルードが現れた時と同じものようだ。

美羽が発生させた風は黒い影に当たると段々、消えていく弱まつてくる。

「なにをした！」

「君たちじゃ、僕には勝てないみたいだね。

素直にあの女の子を僕と戦わせれば？」

ルードが言つ「あの女の子」というのは柚月のことだと思われる。

「なんで柚月なんだよ…」

「わかんないの？あの子は最高の魔法使いだよ。けつして強いわけではないけどね」

「どういう意味だよ！」

「さあね。じゃあまた会おうか

また黒い影の中へと消えていく。

「くそ……美羽さん、大丈夫ですか？」

「まあ……なんとか……」

美羽は自分の服を破り、それを利用して出血を止めている。

「俺たちが泊まっているテントまで来てくれませんか？」

「……わかつたわ」

美羽に肩を貸しながらテントに向かう。

テントにつくと柚月が朝食の準備をしていた。

「あ、おかえり。銃声みたいな音が聞こえてたけど大丈夫？ つて美羽さん、どうしたんですか？」

「また、あいつに会つたんだよ。それで今度は銃を持っている女の子と戦わされた。

その前は体をバラバラにしても動き続ける三人組

「え？ もしかして今、戦つてたの？」

「そうだよ。美羽さんも一緒に」

聰一の肩を借りながら歩いてきたはずの美羽は気絶している。

「美羽さんは大丈夫なの？」

「多分……すぐに止血したから……」

「わかった。あとは私に任せて」

美羽をテントの中に運び、柚月が手当てを開始する。  
どこでこんな知識を得たのか……

銃で撃たれた傷口でも迷うことなく手当てをしていく。

柚月の表情はとても真剣だつた。

その表情を見ていると話しかけることすらできない。

本当はなにか手伝いたいのだが、できそうなことも無せそうだ……

柚月が手当てをしているのを見ながら自分の無力さを感じる。

美羽を守る事ができなければ、そのあと手当てもできない。  
本当に役に立たない……

「よし、これで大丈夫」

柚月の持つてきていた包帯で腕からの出血を抑えている。  
どうやら銃弾は体内に残つていなかつたようだ。

美羽は、まだ眠つたままだ。

「聰一君、美羽さんが起きた時のために『パン』はん作つておひづよ」

「え？ うん……」

「どうしたの？ 元気ないよ？」

「大丈夫……じゃあ作るか……」

聰一はテントの中から出でていく。

そのあと柚月もテントから出てきて昼食の準備を始める。

## act20 買い物

「どうやら持つてきていった食糧は意外と少なかつたらしく、昼食を作る分をひくとほとんど残つていない。

「買い物に行かなくちゃダメみたいだね」

「そうだな。米くらいは買っておかないと……」

そんな話をしながら昼食を作つてゐるとテントの中から美羽が出てくる。

「もう大丈夫なんですか?」

「うん。なんとか……」

「もうすぐ、お昼飯できるので待つてください」

「ありがと!」

昼食を作り終えて柚月がテントの外に置いてある折り畳み式のテーブルの上に運ぶ。

「そういうえば美羽さんは、どうして地球に来たんですか?」

「ああ、氷璃に言われて来たんだけど何をしていいかわからないんだよね……」

「どういふことですか?」

「地球上に魔力の塊を送り込むとしている奴らと戦えつて言つてたけど……」

「それ、さつき戦つた奴らですよ!」

「え? そうなの?」

「そうですよ」

柚月は片腕が使えないため食べづらそうに料理を食べている。

「それで、なんで君たちが狙われてるの?」

「それが魔力の塊を送り込むにはその周辺の魔力を無くさなくてはいけないらしくて……」

「へー あと魔力の塊を送り込んでなにがしたいの?」

「多分そなことしたら地球の常識が狂うわよ?」

「それが目的だつて言つてましたけど……」

「こういう奴らの考え方全然、理解できませんよね」

「じゃあ、そいつらのリーダー……多分わざわざいた奴だと思つけど

そいつ倒すまで私も地球にいるから」

「本当ですか？ ありがとうございます」

「うん」

「じゃあ美羽さんも、ここに泊りますか？」

柚月のこの一言で聰一は昨日の夜のことを思い出す。  
隣に柚月がいる……それだけで一睡もできなかつた。

柚月だけにも慣れていないのに美羽さんまで増えるとなると……

「そうさせてもらつわ」

美羽さんも簡単に了承してしまつし……

これで今日の夜も眠れなさそう……

「聰一君、どうしたの？」

「え？ なんでもないよ……」

その後、なぜか料理をすごい勢いで口に運ぶ。

まわりから見れば慌てていることがわかるのだと思つ。

美羽も柚月も不思議そうな表情をして聰一を見ている。

「ごちそうさま」

聰一は一人だけ早く食べ終える。

そして、このあと買い物に行つたときに必要なものを確認する。

「聰一君、ごめんね。一人でやらせちゃつて」

「いいよ。必要なものは……米と水……ラップも必要かな」

「ラップ？ なんで？」

「皿の上にラップをかぶせて使えば洗う必要が無くなるでしょ？」

「そつかー ここだつたら水が大事だからね」

「うん。あとはなにが必要だ？」

「そうだなー……」「飯だけだつたら栄養が偏るから

他のものを適当に買つくらいでいいんじゃない？」

「一人とも、買うもの決まつた？」

「はい。ちょっと待つてください」

聰一は鞄の中から財布を取り出し、美羽の待っている森の外の道路に出る。

「やっぱり美羽さんってコンビニ行ったことあるんですか？」

「あるよ。地球には、あんな便利な店があつていいな」

「はい」

久しぶりに美羽に会つたため会話が多くなる。  
三人はコンビニまでの三十分ほどの道のりを歩いていた間、ずっと話していた。

「やつと着いたね」

「うん。下り坂だったから楽だったけど

帰りは荷物もあるし上り坂だから、もつと辛くなるな

「もう……そういう話しあないでよー」

必要なものをどんどんカゴに入れていく。

このコンビニの場所が山奥なだけあって、客はあまりいない。  
買つものは、もう決まっていたのですぐに買い物を済ませることができた。

会計を済ませて、コンビニの外に出る。

そしてだれがどの荷物を持つのか決める。

「やっぱり聰一君が一番、重いやつだよね？」

「待て、柚月が魔法使えば全部の荷物が軽くなるんじゃないかな？」

「たしかにそうだね」

「柚月ちゃん、魔法を無駄遣いしちゃダメだよ?」

「……わかりました。ごめんね、聰一君」

美羽は聰一の方を向いて笑顔になつている。

「どうかよ……」

などと言えるわけもなく一番重い荷物を持つ。  
上りになつて実感するが結構、急な坂道だ。

「ハア……ハア……」

まだ半分も来ていらないといったのに息がもう荒くなっている。

「柚月ちゃん、可愛いそうだしもう魔法使ってもいいよ？」

「わかりました」

柚月が魔法を使うと、さっきまで鉄のよつに重かつた荷物が羽根のよつに軽くなる。

「おお、すげー わすが柚月の魔法だな」

「ありがとう。早く行こうよ」

「そうだな」

聰一は荷物が軽くなつたのをいいことに走り始める。

「ハア……ハア……上り坂つて……辛いな……」

「聰一君つて、おもしろいですよね」

「そうね。こつちまで楽しくなつてきちゃう」

帰り道も同じよつに三人で話しながら歩いていく。

上り坂になつたので歩く速度が遅くなり「コンビニからテントまで四十分くらいかかった。

## act21 勝つための方法

「やあ、待つてたよ」

「お前！」

テントに戻ると、またルードがいた。

「今度は何しに来た？」

「もちろん戦うためだよ。

今回は本気で決着つけるつもりだから、覚悟しておいてね」  
今までのふざけた感じのルードとは少し違う。  
目が真剣で殺意というのか何か恐ろしい感情で満ち溢れているよう  
に見える。

「じゃあ、いくよ」

どうやら今回は初めからルードが戦うらしい。  
体には黒い影……そんな優しいものではない……その黒いものは、「闇」だ。

見ているだけでわかる。

絶対に触れてはいけない、恐ろしいものだと。

「どうしたの？朝みみたいに攻撃してきなよ」

ザアアアアア……

風の流れが変わる音がする。

美羽が魔法を発生させようとしているところだ。

そして竜巻をルードのいる位置に発生させる。

この攻撃はルードの挑発にのってしまったから行つたものではない。

風の流れが美羽は、いたつて冷静であるということを伝えていく。

竜巻は少しずつ大きくなりルードの姿が見えなくなっている。

竜巻は最大の大きさになると今度は少しずつ小さくなっていく。

そしてルードのまわりは「闇」に囲まれていて、ルード自身は無傷

だ。

「そんなんで大丈夫なの？」

ルードの手のひらに「闇」が集まる。

それは、なんの形になるわけでもなくただ影のよう……

しかしその「闇」の範囲は確実に広がっている。

音を立てることもなく静かに移動を始めると棒のよつた形になつた。その形は不規則でどのよつた攻撃が来るのか、まったく予測できない。

「なんで攻撃してこないの？僕から攻めるけど……」

そう言いながら近づいてくる。

「闇」も一緒に……

それには絶対に触れたくない。

とても恐ろしいものを感じる。

「…………！」

美羽は慌てて強風を発生させ、ルードを近づけないようにする。それを見た柚月はルードの進行方向とは逆向きに重力を発生させる。その魔法を受けていても関わらずルードの動きは一切変わらない。「なんで！？」

「だから無理だよ。ちゃんと「殺氣」を持たないと……」

ルードの目つきが変わっている。

殺氣に満ち溢れた目……

柚月は黒い球体を発生させ始める。

これが「当たれば」勝てるのだが……

その球体はものすごい勢いで飛んでいく。

しかし、それは「闇」の中に消えていく……

「だから「殺氣」を持たないと攻撃は当たらなって。

僕を殺さなきや君たちが死ぬんだよ？」

「闇」の範囲が一気に広がり周囲を包みこむ。

まわりは薄暗くなり、体には痛み……身体的なものもあるのだが他の痛みもある。

魔法を使うこともできなくされてしまつようだ。  
しかし聰一には、それを吸収することができた。

迷わずそれの吸収を始める。

自分のまわりのものだけではなく、柚月や美羽のまわりのものも吸収する。

吸収するのは簡単だつた。

しかし、その後は体内に「闇」がある状態。  
見ているだけで危険だとわかるものを体内に入れてしまつたということだ。

「うつ！ ハア…… ハア……」

たつたこれだけの弱い魔法を吸収しただけで

柚月の黒い球体を吸収したときと同じほどに疲れる。

「聰一君！ 大丈夫！ そんな魔法吸収したら……」

「大丈夫です……」

「そう…… 気をつけてね。あの魔法、とても恐ろしいものだから」「わかつてます……」

「へー 君も結構戦えるみたいだね」「つるせー！」

聰一は吸収したばかりの「闇」を柚月の魔法と合成させ始める。  
新しく生まれた魔法も黒い影と変わらない。  
そして感じられる恐怖も変わらない。

しかしその攻撃の対象はルードになつてゐる。

つまりルードの魔法のコントロールを得たといつことになる。

「僕の魔法を使えるようにするなんて……」

それに対抗してルードも「闇」を発生させる。

二つの「闇」はお互いにぶつかり合い、ほとんど同時に消えていく。  
「なんで君の魔法に殺氣があるの？」

この言葉を聞いた時、聰一はあることに気がつく。

ルードの「闇」に対抗するためには「殺氣」が必要だということ……

そして今の聰一が発生させた「闇」には「殺氣」込めていなかつた。

つまり合成後の魔法にもルードが込めた「殺氣」がそのまま存在するようだ。

「これなら…… いける！」

「なにかわかったの？」

「はい」

聰一の表情は少し明るくなっていた。

## act22 増える敵

「どうやら何かわかつたみたいだね。でも僕には勝てないよ  
またルードは「闇」を発生させる。

今度のものの形状は柚月の作り出す黒い球体に似ている。  
その球体はこちらに向かって直線を描きながら聰一の方へ飛んでくる。

それに対抗するように柚月も黒い球体を発生させる。  
そして二つの黒い球体がぶつかり合つ。

黒い球体はどちらも消えていく……

たとえ相殺することはできてもそれ以上ができる。

これしかできないのなら負けないが勝つこともできない。

「どうすればいいんだよ……」

そのときルードの背後に黒い影が発生する。

この影からは「闇」から出ていた嫌な雰囲気は無い。

その中からは柚月が誘拐されたときに探すのを手伝った大男が出てくる。

「「」」ちは終わつたぞ」

「「」苦労さま。もう少しそこで待つてて」

「どうこうことだよ……」

「聰一君、一人増えたから気をつけてね」

「わかつてます」

「さあ続きを始めようか」

ルードの手のまわりにまた「闇」ができている。

今度はルード自信がこちらへ近づいてくる。

そして直接、攻撃を始める。

動きは普通の人と変わらないのだが手には「闇」がある。  
それを吸収しようとするルードの攻撃が当たるだろ。

「柚月ちゃん！魔法！」

美羽が柚月に指示を出す。

「はい」

柚月はその指示通り魔法を使う。

ルードの動きを封じるために重力を強くする。少しだけルードの動きが遅くなる。

しかし聰一にとつてはそれだけで十分だった。

聰一は一步後ろに下がりルードの腕を掴む。

「この距離なら大丈夫だ」

ルード「闇」を吸収する。

そしてすぐにその魔法を柚月の魔法と合成させる。

発生した「闇」はルードの体を貫き飛んでいく。

「痛いな……」

ルードは落ち着いている。

貫通した場所は肩だつたため命に別状はないようだ。

その傷口のところに「闇」が集まり始める。

そして「闇」が消えると傷は無くなっていた。

「なんで？」

「治癒も可能なのかよ……」

「即死させないとダメみたいね」

美羽の一言でルードを倒すための条件が一つ増えた。

そしてルードの後ろには敵が二人増えている。

これでルードを含めると敵の数は四人。

しかし後ろにいるやつらが戦おうとしないことが唯一の救いだった。

「さあ、あと一人だ！二人が戻ってくるまでに僕を倒せるか？」

まだ一人、敵がいるということなのか……

もしもルードの言っていることが本当ならできるだけ早く倒さなければいけない。

「美羽さん、どうしますか？」

「どうするも……攻撃が当たらないからね」

「そうですね……」

「まつて、一つ試したいことがあるわ」

「なんですか？」

「次にあいつが魔法を発動させたら、それを吸収してすぐに攻撃してくれない？」

「その攻撃を防いでいる間に私と柚月ちゃんで攻撃するから」「わかりました」

しかし、これを実行するにはルードが攻撃してこなくてはいけない。こういうときに限ってルードは攻撃を仕掛けてこない。作戦がバレているというわけではないのだが……

「柚月ちゃん攻撃して」

「いいんですか？」

「うん。柚月ちゃんの魔法から身を守る時に発動した魔法を聰一君に吸収してもらひてあとはせつとき言った通りにするかい」

「わかりました」

柚月は黒い球体を作る。

いつもどおり落ち着いている。

その球体をルードのいる方向へ放つ。

「……」

ルードは無言のまま「闇」を発生させて身を守る。

「予定どおり！」

聰一はすぐにルードの近くに行き、「闇」を吸収する。

そして、その後の隙に柚月と美羽が攻撃を開始する。

柚月は連續して魔法を使ったので少し辛そうだ。

柚月と美羽の魔法がぶつかり合っているため様子があまり見えない

……

「もう大丈夫だよね……」

柚月は肩が上下に揺れるほど息が荒い。  
美羽も少し疲れがあるようだ。

段々様子が見えるようになってくる。  
そこには人が立っている影が見える。

「まだダメなの！？」

「らしいな……」

「お前が死んだら意味ねーだろ！」

立っている人影はルードではなかつた。

巨大な剣を横に構え盾のように使つていてる大男が立つていてる。

そしてその後ろには驚いた表情のルード。

「ほら全員そろつたぞ。遊びは終わりだ」

「わかつてるよ！」

なにを話しているのかわからない。

そしてルードの後ろには敵がさらに増えてルードを含めると六人になつていてる。

「やつと終わりだ……」

ルードは不気味に微笑んでる。

そしてルード以外の五人が異動する。

もう一度ルードのまわりを「闇」が覆う。

その「闇」は形を変え周囲をドーム状になつて包み込む。

「さあ！これでやつと始められるよ！」

「闇」に囲まれているためまわりが薄暗く感じられる。

「なにを始めるんだ……」

「聰一君、もしかしたら魔力の塊を……」

「そんなわけないですよ。俺たちがここにいるんだから……」

「もしも、このドーム状の魔法が魔力を包み込んで

外部に影響がでないようにするためのものだとしたら?」

「……どうすればいいんですか」

「多分もう手遅れだと思つわ」

美羽は遠くを指差す。

その先には光るものがある。

とても大きくてものすごい力を感じる。

「まさか……あれが魔力の塊……」

「多分そうね」

「さあ、これで僕の願いが叶う!」

ルードのまわりにある「闇」は確実に強力なものになつていて。

「もう終わりにするよ」

どんどん「闇」は巨大化していく。

そしてドーム状の「闇」の中を埋め尽くしていく。

聰一は両手を大きく広げてできるだけ広範囲の「闇」を吸収できるようにする。

少しずつだが確実に「闇」を吸収できている。

後ろにいる柚月と美羽には絶対に「闇」を触れさせとはいいけない。

そう思い必死に「闇」を吸収しつづける。

そして後ろの柚月と美羽は攻撃を始める。

美羽は今までに聰一に見せたことが無いほど強力な魔法を。

柚月は今までにやつたことがないほど連續で魔法を使い続けている。

「無駄だよ!」

聰一は「闇」を吸収し続けているはずだった。

しかしどんどん「闇」の範囲は増えていく。

このままでは後ろの柚月と美羽にも被害が……

「くそーッ!」

大声を出しながら聰一は吸収と合成を同時に進行。

こんなことをしたのは初めてだ。

「闇」を吸収しながら「闇」を発生させる……

吸収した分と新たに発生させた「闇」が打ち消していく分、

これが止められる「闇」の限界だ。

それでも足りない。

「聰一君！もう少し頑張つて！」

美羽の表情はとても恐ろしくしかし頼もしく見えた。

かまいたちが実体化して見えるほど巨大になっている。

それは「闇」を切り裂き、どんどんルードに近づいていく。

「私もがんばる！聰一君もがんばって！」

柚月も全ての力を使い今まで最大の大きさの黒い球体を作り出す。黒い球体は「闇」を貫きルードに向かっていく。

「これで終わりだ！」

聰一は吸收をやめ、合成に全ての力を使い「闇」を発生させる。

聰一の作り出した「闇」はルードの「闇」をのみ込んで行く。

「まさか……僕の負け……」

聰一、柚月、美羽三人の魔法はルードに当たり全ての魔法が消えていく。

そして倒れているルードはなぜか嬉しそうな表情している……

## act24 五人の敵

「終わった……」

「まだよ……他に五人いるわ」

「やるしかないですよね……」

「待つて、聰一君は魔力の塊を吸収して。あれがあれば常識が狂うから……」

「わかりました……」

聰一はフラフラのまま魔力の塊に近づいていく。

「闇」の中から解放されて体に照りつける木漏れ日はとても気持ちがいい。

「まさかルードが負けるとはな……

しかし魔力の塊を消されるわけにはいかない。悪いが俺たちとも戦つてもらおう

「お前らの相手は私たちよ！」

柚月と美羽は立ち上がり五人を見ている。

「ほう、ずいぶん元気な女の子たちじゃないか！」

巨大な剣を持っている大男が剣を振り上げ柚月に飛びかかる。

その瞬間、柚月は重力を発生させると大男は地面に叩きつけられる。

「聰一君……早く魔力の塊を……」

柚月の声は、とても無理をしているように聞こえる。

少しでも早く終わらせるために聰一は動かない足を無理矢理進ませる。

そして魔力の塊に右手をつける。

その瞬間にとても強大すごい魔力だつことがわかった。

正直、全て吸収しきれるか不安だ。

「聰一君！なにやつてるの！早く初めて！」

「わかりました」

魔力の吸収を始める。

ルードとの戦いで体内に溜まっていた魔力を全て使つたため、魔力が空の状態で吸収することができる。

後ろでは柚月と美羽が戦っている。

二対五のため、かなり不利だがなんとか互角の戦いに持ちこんでいる。

柚月の魔法で相手の動きを止め、そこへ美羽が攻撃をする。

これを繰り返しているだけのため攻略されてしまえば勝ち目が無くなる。

敵の一人が柚月から離れる。

その位置はちょうど柚月の魔法の範囲外だ。

近くの敵に集中しているため柚月も美羽もそのことに気が付いていない。

その敵は遠距離攻撃用の魔法を使う。

光の線が柚月に向かって放たれた。

その光の線は柚月の魔法の範囲に入つても早さが変わらず進み続ける。

しかし少しづつ進む方向が下になつてくる。

柚月はそのことに気がつき足下に来ることがわかつたので少し飛んでそれを避ける。

しかし離れた位置からの攻撃が可能な敵がいるということは、これから戦うのにさらに不利になる。

「柚月ちゃん、遠くの敵にも集中して…」

「わかりました」

美羽の言つとおり遠くの敵にも集中すると柚月の魔法が弱くなつてしまつ。

そのことに本人たちは気づいていないため敵の動きが早くなつて見える。

「！？」

美羽はかまいたちを使い襲いかかつて来た敵に反撃する。

柚月ちゃんの魔法が弱くなつている！？

でも近くの敵だけに集中させたら危険だし……

なら、できる限り私が遠くの敵を攻撃して隙を作らないと……

美羽は遠距離にも届く魔法に切り替える。

そして柚月の魔法の範囲外にいる敵に対して攻撃を仕掛ける。

こんなに遠くの敵に攻撃するのは初めてだつたため、うまく制御ができない。

そのせいで簡単に避けられてしまう。

しかし美羽の魔法が敵に届くまでの時間の間、敵は攻撃に集中しているはず。

その隙を利用して一気に敵に近づく。

そして遠くから使つた魔法を避けた瞬間に別の魔法を使つた。この距離ならば間違なく当たる。

隙だらけの敵にとつては美羽の魔法を避けることは不可能。

美羽の魔法は敵に直撃し、その敵はその場に倒れ込んだ。

「あと四人……」

美羽は少し安心していたが柚月は一人で四人の敵の相手をしている。つまり敵の攻撃対象は柚月になつていてるわけだ。

これならば背後から強力な一撃を叩きこむことも可能だ。

一撃で全員を仕留める自身は無かつたが、一人でも敵を減らせればいい。

美羽はもう一度、攻撃の準備をする。

「気づかないと思ったか？」

後ろから、とても低く恐ろしい声が聞こえてくる。

驚き振り返ると、そこには一人の大男が立つていた。

大男は巨大な剣を振り上げている。

その動きは遅く隙だらけだ。

楽々避けることができた。

しかし、そこから流れるように攻撃が繰り出される。

予想外だつたがこの大男の弱点は「遅い」こと。

それでも避けるのがギリギリだった。

次の攻撃に備えて美羽も攻撃をする準備をし、魔法を使う。  
魔法は大男の脇腹に当たり服が赤く染まつっていくのがわかる。

「ウツ……」

大男は剣を地面につき、体を支えている。

これで二人目を戦闘不能にした。

残るはあと三人。

これだけ長い間戦つっていて生き残る相手だ。

今までの二人ほど簡単に倒せるはずがないだろう。

柚月は残りの三人を相手に身を守ることしかできていなかった。

## act25 魔力の光

敵の背後から美羽はかまいたちを発生させ、攻撃する。そんな簡単に当たるわけもなく敵に樂々避けられる。そのとき美羽の方に一人の敵が近づいてくる。

「邪魔しないでくれないかな？」

若い男、見た目は普通なのが恐ろしい笑みを浮かべている。

右手には長さ三十センチほどの刀……

その小さな刀から繰り出される攻撃は今までとは格が違うほど早い。そのせいで避けることはできなかつた。

しかし浅くしか当たっていないため美羽はなんとか耐えている。

攻めなかつたら負ける！

美羽はどのように戦うかを考える体力は残っていなかつた。そのため使つてはいる魔法もとても雑で危険なものだ。

「そんな魔法の使い方しても無駄だよ」

美羽の攻撃は一切敵に当たつていない。

それでも美羽は魔法を使うことをやめなかつた。

ただ魔法を使うだけ……

それでもやらないよりはマシ。

聰一君だつて魔力の塊を吸収するのをがんばつてはいるんだから

……  
そう自分に言い聞かせ、魔法を使い続ける。

その横では柚月が戦つてはいる。

戦つてはいるとは言つても柚月は全く攻められていない。

自分の身を守るのが限界らしい。

そして前には巨大な魔力の塊を吸収し続けてはいる聰一の姿。

皆、必死で戦つてはいる。

そのとき聰一が吸収してはいるはずの魔力の塊が光を放つ。

この光は聰一たちにとつては希望の光……

敵にとつては絶望の光に感じられただろう。

皆、目を閉じている。

いつの間にか戦いもおさまっている……

どれだけの時間、光が発生していたのだらう……  
十分……二十分……もしかしたら、たったの一瞬だったかもしれない。

光が消えた後に残っていたものは、ただ立ちつくす柚月と美羽……  
そして倒れている聰一。

敵の姿は、もうなかつた。

柚月の瞳からは涙がこぼれている。

静かにそれは流れ続けている。

「柚月ちゃん、もう終わつたんだよ……」  
「はい……とても怖かつたです……」

美羽は柚月を抱きしめている。

柚月は美羽の胸の中で静かに泣き続ける……

「そうだ……聰一君は……」

「柚月ちゃんは優しいね。聰一君なら大丈夫よ」

柚月と美羽は倒れている聰一の近くに行く。

氣絶している聰一からはものすごい魔力が發せられている。

このことは、まだ魔法についてあまり詳しくない柚月でも感じることができた。

「これは少し聰一君がんばりすぎたかもね……」

「大丈夫なんですか？」

「大丈夫だと思うけど、一応むこうの世界に連れていくわ

「私も行きます」

「わかったわ。じゃあ早速行くわよ

聰一の横で美羽は移動するための魔法を使つ。  
ブラックホールのようなもの……

柚月と美羽はその中に聰一を抱えて入つていく。

「…………？」

聰一は重い体を無理矢理起こして、まわりを見る。  
誰かの家のようだ。

この部屋には見覚えがある……

ガチャ

ドアが開き、氷璃が入ってくる。

「もう大丈夫なの？」

「はい。なんで俺はここにいるんですか？」

「魔力の塊を吸収してて氣絶したんじゃないの？」

「そういえば……美羽さんと柚月は！？」

「あの二人がここまで運んできてくれたのよ。

聰一君が無理してたみたいだつて言つて」

「そうですか……」

「気分はどう？まだダメ？」

「もう大丈夫です。それで魔力の塊はどうなったんですか？」

「ああ、あれなら強力な光を放つて消えていつたつて言つてたわよ

？」

「そうですか……じゃあ美羽さんと柚月は、あの五人を倒したんですね……」

「違うわよ。その敵は魔力の塊が放つた強力な光にのみ込まれていつたらしいわよ」

「さあね。聰一君の合成魔法が奇跡を起こしたんじゃないの？」

「そんなことありませんよ……俺はなにもしてませんよ」

「そう……じゃあ柚月ちゃんと美羽が返つてきたら、魔力の塊のまわりでおきたことについて、推測だけど説明するからもう少し休んでて」

「わかりました」

氷璃は部屋から出でていく。

聰一はもう一度、布団に潜り眠りにつく。

## act26 光の正体

「聰一君、起きて」

聰一は聞きなれた声で目覚める。

目を開けると柚月の姿があった。

「聰一君、早く！氷璃さんが色々説明してくれるって  
「わかった……」

聰一は起き上がり、皆が待っている部屋に向かう。

その部屋には柚月、美羽、氷璃の三人がいる。

「じゃあ全員そろつたから、始めるわね。

まず魔力の塊が最後に放った光なんだけど……」

「それは俺じゃないですよ」

「待つて、これから説明するから。

その光は多分、聰一君が無意識のうちに合成を始めちゃったからだ  
と思うの」

「だから俺はなにもしてませんって……」

「ううん。美羽から聞いた話によると、あの量の魔力を吸収するの  
は無理だと思うわ。

だから聰一君の体が限界に達した時、

今までに吸収した魔力とまだ吸収していない魔力を合成して、  
強力な光の魔法ができたんじゃないかな？」

「そうなんですか？」

「確信は無いけど、それしか考えられないからね。

それで、そのとき聰一君が吸収した魔力はこっちの世界に来て全て  
放散されちゃったの。

そのときの様子は私も見ていたから間違いないわ

「それって、なにか困るんですか？」

「うん。地球の魔力だから、もしかしたら悪影響が出るかもしれない  
いわ」

「どうすればいいんですか？」

「その魔力の塊は、この世界のあちこちに散らばったからそれを回収しなくちゃいけないわね」

「どこにあるかわかりますか？」

「それは、これからやるわ。だから今はわからないわね」

「じゃあわかつたら俺に回収させてください」

「いいの？ それぞれの「魔力 자체」と戦うことになるわよ？」

「吸収すればいいんじゃないですか？」

「そんな簡単に回収できるようなものじゃないわ。

一つ一つ違った戦いを強いられるうえに、どれもかなり強力なのよ

？」

「それでもいいです。俺が持ちこんだ魔力なんですから」

「そう……じゃあ私も着いていくわ。多分、相当危険だと思つから

……」

「わかりました。魔力の位置がわかつたら教えてくださいね」

「わかったわ。柚月ちゃんと美羽はどうする？」

「私にも責任があります。」

「しようがないわね。私も行くわ」

「よし、じゃあ私はこれから魔力の位置を確認するわ。

結構、時間がかかると思うから聰一君と柚月ちゃんは地球に戻つてもいいわよ？」

「こっちの世界についてもいいですか？」

「いいけど……戻らなくてもだいじょうぶなの？」

「どうせ、やることないですから。柚月はどうする？」

「私も残ります」

「じゃあ前と同じ部屋を使つていいわよ……

ああ、柚月ちゃんが使つてた部屋が今使えないから一人とも一緒に部屋でいい？」

「え？」

「私はいいですよ

「じゃあ、そういうことだ。おとはゆつくしていいわよ」

「わかりました」

「……」

また柚月と同じ部屋に泊る事になるとは思わなかつた……

「あ、聰一君だけちょっと待つて」

氷璃の要望通り聰一だけが残る。

柚月と美羽は部屋に向かっていく。

「聰一君、ちょっとお話があるんだけどいい？」

「いいですよ。でも、なんで俺だけ残したんですか？」

「話しの内容が内容だからよ。私の質問したことに全部ちゃんと答えてね」

「わかりました……」

「柚月ちゃんとは、どうまでいった？」

「は？」

何言つてるんだ、この人は。

でもそんなことを正直に言つわけにはいかない。

「だから、どこまつての？」

呼び方も変わつてたみたいだから、なにかあつたのかな一つで

「ありませんよ！」

「なんで？ 柚月ちゃんの」と好きなんぢゃないの？」

「それは……」

「じゃあ今日はがんばつてね。せつかく同じ部屋にしてあげたんだ

から」

「……」

「もう部屋に行つていいわよ。なにか進展あつたら教えてねー」

「いやです」

少し怒り気味に言つた。

それなのに氷璃は笑顔のままだ。

楽しんでいるのだろうか……

よくわからないが、なぜか氷璃の表情から悪意は感じれなかつた。

純粹に聰一と柚月のことを探つているのだから。

聰一は階段を上り部屋に戻る。

ガチャ

「あ、聰一君やつと戻つて來た。なんのお話だつた?」

「なんでもないよ……」

あの会話の内容をそのまま言つたら、俺が困りそうだ。

「なーんか怪しい……まあいいや。暇だから、なんかしようつよ」

「なにする?」

「トランプ」

「懐かしいな。いいけど二人でやつてもおもしろくなによな?」

「じゃあ美羽さんを誘おうよ」

「そういえばトランプ持つてきてくるの?」

「うん。じゃあ美羽さん呼んでくるねー」

柚月が部屋から出でいく。

「トランプなんていつぶりだらう?……」

ベッドの上にあるトランプをケースから出して眺めてみる。

カードはあまり傷ついておりず新品のような感じだ。

「聰一君、美羽さんつれてきたよー」

「うん」

「私ルール知らないわよ」

「大丈夫。教えるから」

そう言うと柚月はカードを配り始める。

## act27 トランプ

「どうすればいいの？」  
「まあ、配ったカード見て」  
「すごい！キレイな絵、描いてあるんだ」  
「うん。その絵が重要なんですよ」  
「なんのゲームやんの？」  
「大富豪に決まってるじゃん！」  
「いきなり難しくないか？普通、初めはババ抜きとか……」  
「じゃあ、そうする？」  
「そうだろ」  
「えーと……ババ抜きってなに？」  
「ジョーカーを最後に持っている人が負けっていうルールです」  
「ジョーカーって、なに？」  
「これですよ」  
聰一は自分の持っていたジョーカーを見せる。  
「これ？なんか他のと比べて派手じゃない？」  
「そうです。で、これを最後に持っていた人が負けです。じゃあ、やってみましょうか。聰一君からスタートで……」「ちょっと待つて。美羽さん、まだ出してないから」「なにすればいいの？」  
「同じ数字のカードを出せばいいんです」  
「じついうこと？」  
美羽は一枚のカードを出す。  
「そうです」  
「これとこれも同じ？」  
美羽はクイーンのカード一枚を見せている。  
「はい。これは似てるやつがあるので気をつけてくださいね。上の端のところに記号が同じやつが同じ数字です」

「大体わかつたわ。このあとはどうするの？」

「相手に手札を見せないようにして、お互にひきあいます。

今は聰一君の番なので一枚ひかせてください」

「わかつたわ」

美羽は手札を聰一の方へ近づける。

そして、その中から一枚選んでカードをひく。

「じつやつてひいて、

手札の中に同じ数字のカードがあつたら最初と同じように出してください」

「結構、簡単なルールね。次は？」

「私の手札から一枚ひいてください」

「……」

美羽は無言のまま柚月の手札を一枚ひく。

何度も繰り返しているが柚月の手札しか減っていかない。

「やつた！あがり！」

柚月が最後の一枚を出す。

「ちょっと待て。始めてから俺の手札、一枚も減ってないぞ？」

「私も……」

「え？どうじう」と？

「知らないけど、お前なんかしたよな？」

「なにもしないけど？」

「まあ、いいわ。続けましょう。柚月ちゃんがそんなことするとと思えないしね」

「そうですね」

ババ抜きは一人になれば一回ひぐ」と手札が減っていく。  
ジョーカーをひかなければ……

美羽は覚えたばかりだといふのに聰一とまともに戦っている。  
とはいっても、ただの運……

「どう？」一人になったときの心理戦は？」

柚月が言うには運ではないらしい。

心理戦……もしかすると最初から聰一と美羽の手札が減らなかつたのは

柚月の圧倒的な心理戦の強さのせいなのかもしない。

「そんなものねーよ。ただの運だろ？」

聰一は美羽の手札から一枚ひく。

「あ！」

ジヨーカーをひいてしまつた。

美羽が少し笑つてゐるよう видимо.

「もしかして、これも心理？」

「そうよ。私の番ね」

美羽が聰一の手札をひく。

これでジヨーカーではないほうをひかれると聰一の負けだ。

「やつたー！」

美羽が最後の一枚を出す。

「聰一君、初めてトランプやつた人に負けるつてどういふこと？」

「いや……運だろ……」

「実力だよ？じゃあ次のゲームで美羽さんに勝つてね」「わかつたよ……やるゲームは？」

「七並べは？」

「美羽さん、ルールわからないだろ……」

「教えながらでも大丈夫だよ」

「私なら大丈夫よ」

「じゃ、始めますか」

柚月はカードの中から七を集め縦に並べる。

「私からでいい？」

「いいよ」

柚月はスペードの六を出す。

そして聰一がダイヤの八を出す。

「どうすればいいの？」

「続いている数字のカードを同じ絵のところに出せばいいんですよ。ジョーカーは自分の持っているカードが出る場所に置いたらダメですよ」

「わかったわ」

美羽はスペードの五を出した。

この後は順調に進んで行く。

「クローバーの十、止めてるの誰だよ」

クローバーの十の位置にはジョーカーが置かれている。手札の枚数は聰一が一枚、柚月が一枚、美羽が一枚だ。

「私だよ」

柚月がジョーカーを取り、クローバーの十を置く。そして聰一がクローバーの十一、美羽が十一と置く。

「はい、これで聰一君最下位だね」

最後の一枚……クローバーの十三の位置にジョーカーを置き、手札がなくなる。

「柚月……俺が負けるようにしてないか？」

「うん」

「……」

「ここでなにも言い返せないのが情けない。

「でもイカサマはしてないよ」

「イカサマしなくても俺を最下位にできるのかよ……」

「うん。聰一君のやりたいことなんて、まるわかりだよ」

「……」

なんか嬉しい気がする……のは聰一が意識し過ぎているだけなのか  
もしれない。

「聰一君、顔赤いよ

「なつてませんよ……」

美羽に言われたが柚月はなにも気にしていないらしい。  
いつもどおりの笑顔のままだ。

「次はなにする？今度は真剣勝負で」

「わかった」

「今度は聰一君が決めてよ」

「うーん……」

「ねえ、二人とも今度はこっちの世界の遊びをしない？」

「やつてみたいです！」

「私も！」

魔法使いがする遊びというだけで、なんとなく楽しそうだ。  
「じゃあ、持つてくるからちょっと待つてて」

美羽は部屋から出ていく。

「どんな遊びなのかな？」

「わかんないけど、楽しそうだよな」

「うん。魔法が使える人がする遊びってことは、もっとすげること  
だよね」

ガチャ

「おまたせ」

部屋に入つて来た美羽は一枚の板を持っている。

「これですか？」

「うん。準備するから、ちょっと待つてて」

そう言つと美羽は板を床に置き、準備を始める。

「始まるよ」

板の真ん中に白い水晶がある。

その水晶が光るとともに、その中に吸い込まれていく。

「！」

「セツキの板の上よ」

「え？ 小さくなつたつてことですか？」

「セツ。これはそういう遊びだから。はい、一ijれ持つて

美羽は聰一と袖月に刀を差し出している。

「どうするんですか？」

「戦うのよ。死んだらもとの大きさに戻るから。痛みも感じないし」「もしかして、これってそういう遊びですか？」

「そうよ。魔法で戦うことはあっても武器を使って戦うことはめつてにならないからね。

戦う練習にもなるし、楽しめるしいんじやない？」

「これって遊びじやないよな……」

「いいんじやない？ 楽しそうだし。それで誰と戦えばいいんですね？」

「ああ、ijのゲームは日本の合戦を見本にしてるから今から敵がたくさん攻めてくるわよ。

だから、その敵を倒していくばいこの

「わかりました。武器はこれ以外にないんですか？」

「あるけど、多分これが一番使いやすいと思つよ」

「わかりました」

「……」

「聰一君、もしかして怖いの？」

「痛みも感じないし死んでも大丈夫なんだよ？」

「いや、楽しそうだなーって思つて」

そのとき前のほうが騒がしくなつてくる。

そして、たくさん武器を持つた人たちがこっちに向かつて走つてくるのがわかる。

「本当に合戦みたいだ……」

「そうよ。じやあ戦うわよ。魔法は使えないからね」

美羽さんは慣れているようだ。

相手の攻撃を最低限の動きで避けて攻撃を正確に当てる。

敵に攻撃があたっても血が出ないようだ。

しかし攻撃を受けた敵は倒れしていく。

「美羽さん、すごいね」

柚月も剣を使って攻撃を始める。

攻撃を避ける動きに少し無駄があるように見えるがちゃんと避けている。

## act29 地球の魔法使い

「魔法つかえるよ！」になつただけで動体視力も上がるのかよ……」  
これが正しいかどうかはわからないが柚月を見れば、なんとなくそんな気がする。

聰一は遊びながら楽しもうと思い、剣を握る。

敵の攻撃を見て気付いたが本当に動体視力が上がっている。  
どういう原理なのはわからないが、とにかく相手の動きがよくわかる。

そのおかげで避ける、攻撃をするを何度も繰り返すことができる。  
魔法が使えないのにここまで戦えたのは予想外だった。  
敵を全員無傷で倒すまでに三十分ほどかかったと思うが実際はもつとかかっていただろ。」

「二人とも強いのね」

「魔法が使えるようになると身体能力があがるんですか？」

「そんなことないわよ」

「でも……すごく戦いやすかつたんですけど……」

「それは聰一君が強くなつたからじゃないの？」

「本当にそれだけですか？」

「まあ地球から来たんだから例外はあるかもね。柚月ちゃんは？」

「私もです」

「そう……もう終わりだし戻るわよ？」

「わかりました」

また水晶が光る。

そして気がつくと、もとの部屋に戻っていた。

「そろそろ魔力の位置の分析も終わつたと思つし氷璃のところに行きましようか」

美羽が部屋から出る。

そのあとをついていくよつに聰一と柚月も部屋から出る。

「どう？ 場所わかった？」

「大体の位置はわかつたわ。明日から回収を始めましょうか」

「わかりました」

「じゃあ今日は、もう『』飯食べて寝ましょう」  
氷璃はキツチンに向かい夕食の準備を始める。  
それを見た柚月と美羽もキツチンへ。

「あのー、俺もなにか手伝えませんか？」

「聰一君は、ゆっくりしてて」

「……」

料理ができないというわけではないのだが……  
といふか結構、得意だが言葉に甘えることにした。  
一人で椅子に座つて夕食が完成するのを待つ。

「お待たせ」

柚月、美羽、氷璃の三人がテーブルに料理を並べる。

「いただきます」

テーブルに並べてある料理を食べていく。

「魔力の塊つて、この近くにあるんですか？」

「一つだけね。歩いて十分くらいのところよ」

「それ以外に何個あるんですか？」

「正確な数はわからないけど、多分十個くらいはあるわ」

「そんなにあるんですか……」

「うん。それも全部、どうすればいいかわからない状態で回収しな  
くちゃいけないからね」

「結構、大変そうだね」

「でも俺たちが持ちこんだものなんだからなんとかしないとな  
うん」

柚月がとても真剣な顔をしている。

聰一たちは夕食を食べ終えて入浴を済ませた後、それぞれの部屋に戻り寝ることにした。

「そういえば、この部屋ベッド一つしかないね」

「俺は寝袋で寝るから柚月が使っていいよ」

部屋の端には山奥に泊っていた時の道具が置かれている。

「でも、それじゃ聰一君に悪いよ……」

「そつは言つても一緒に寝るわけにはいかないだろ?」

「私は……いいよ……?」

柚月は顔を赤くしている。

「ここで断れないようだつたダメだ!」

自分に言い聞かせ、答える。

「わかつた。そうしよう

「え? いいの?」

「え?」

なにを言つてゐるんだ……

断るはずじやなかつたのか……

「じゃあ私、もう寝るから。聰一君も早く寝なよ?」

「う、うん……」

確かに早く寝なくては明日、困る。

しかし柚月と同じベッドで寝るのは少し……

あー、もう!

迷つっていても仕方ない。

覚悟を決め、柚月の隣に寝る。

「やつと来てくれた」

柚月がとても嬉しそうにしている……

天使のよつなかわいさだが今は悪魔の笑顔でしかない……

柚月の体は聰一の方を向いている。

ベッドが意外と大きかったため、体はそこまで近いわけではない。

耳元でスー、スーと柚月が息をする音が聞こえている。

柚月の顔を見ると、もうすでに目を閉じている。

「もう寝たのか。寝顔もかわいいな……」

そう思つて柚月の頭を撫でる。

「くすぐつたいよー」

「え？ 起きてたの？」

「うん」

これはヤバい……

寝ているからといって、調子に乗つた聰一が悪かつた。絶対にひかれだらう……

それも近くにいるのは男が聰一一人だけ。

このことが美羽と氷璃が知れば、その二人にも嫌われるだろう。

「また顔赤くしてる。聰一君、かわいいね」

なんで暗いのに顔の色が見えるんだよ……

まあ、事実なのだが。

「正直俺のこと、ひいたろ？」

「ぜーんぜん。嬉しかつたし」

「え？」

「本当だよ。私、聰一君のこと好きだから……」

「それって……」

「……私と付き合つてくれる？」

「うん……」

「やつたー 私、聰一君が初恋の相手だつたんだよ?」

「俺も柚月が初めてかな……」

「お互い様だね」

柚月は布団の中で聰一の手を握る。

「今日は眠れなさそうだなー。すゞく嬉しいもん……

でも寝なくちゃいけないよね。明日、大変だし」「

「そうだな……柚月、おやすみ……」

「おやすみなさい」

聰一と柚月はお互ひの手を握つたまま眠りについた……

このとき聰一と柚月の部屋の外に一人の人人がいた。

「作戦、成功ー 柚月ちゃんおめでとう」

「氷璃、盗み聞きとかやめなよ」

「いいじゃない。私がこうなるより手助けしたんだから」

「そうだけど……」

「それにしても地球の魔法使いつてす『い』ね

「なにが？」

「戦いも強いし……」

「他になにかあつた？」

「恋の魔法」よ

「氷璃もそういうこと言つんだ……」

「なに？おかしかった？」

「だって、絶対に恋とか無縁の生活してゐるでしょ？」

「まあね。でも……」

「でも、なによ？」

「なんでもないわ。じゃあ私たちも寝ましょつか」

「そうね」

「明日からよろしくね、最高の地球の魔法使ひの聰一君と柚月ちゃん

「最高の……ね……私もそう思つわ

「じゃあ、行きますか

ん

## act1 一つの魔力

「……」

聰一は次の日の朝、起きると左腕になにか重いものが乗つているような気がした。

そこを見てみると柚月が聰一の腕に腕を絡ませるよつに寝ていた。起きあがりたいのだが柚月を起こすわけにもいかないし……

「うん……」

柚月はまだ起きあつてない。

「コンコン」

「聰一君ー」

ドアをノックする音と美羽の声が聞こえてくる。

「すいません。今、起きます」

「わかつたわ。朝じはん、できてるから早く来てね」

「わかりました」

美羽が階段を下りていく音が聞こえた。

「柚月、起きる」

柚月の肩を揺する。

「うーん……もう少しー……」

「ダメ。もう起きなつて……」

「ほえー? ……あ、聰一君……」

「やつと起きた……おはよー」

「おはよー……」

「ほら、もう行くわ」

「うん……あつー! めん……」

柚月は腕を放す。

「早く。美羽さんと氷璃さんが待つてゐるから」

「うん」

聰一がベッドから出て、柚月もベッドから出る。

そして一階へと下りる。

「やつと起きてきた。すぐ出発するから、飯食べちゃって」

「はい」

椅子に座りテーブルの上に並んでいる料理を食べる。

「いりやつさま」

聰一と柚月は十分ほどで食べ終えて出発する準備をする。

……準備とは言つてもなにもすることはない。

「もう出発するけど準備いい?」

「はい」

「じゃあ、行くわよ」

氷璃についていき皆外へ出る。

「場所はわかつてゐから、私についてきてね」

「わかりました」

氷璃が歩き始め、その後を美羽、柚月、聰一の順で歩いていく。

氷璃は街から出て森の中に入つていぐ。

「この置くだと思つから、すぐね

迷いなくどんどん進んで行く。

この森は魔法を使えるようになつたばかりのころ何度も魔法の特訓をしていた。

「なんか、この森が懐かしく感じるな」

「そうだね」

「もう、つくわよ」

「本当に近いですね」

正面の方には少し開けた場所があるよつだ。

木々の生え方からそのことがわかる。

そして開けた場所に出ると、前に見たものより小さいが魔力の塊があつた。

「これが例のものらしいわね……」

「俺が吸收します」

「待つて。なにが起きるかわからないわよ」「わかつてます」

聰一は魔力の塊に近づいていき吸收を始めようとすると、

「お前は地球の魔法使いか」

どこからか声が聞こえてくる。

「なによ、この声……」

「私は魔力だ。この世界で最も必要とされるもの……しかし、今は違う。私がこのままここに残り続けたらこの世界に悪影響を及ぼすだろう」

「だから吸収しに来たんだよ」

聰一は魔力の塊に手をかざす。

「そんなことでは無駄だ。地球の魔法使いよ、お前に試練を与える……」

魔力の塊は光始める。

そして聰一と柚月だけが光の中へ吸い込まれていく。

「ここは……」

「聰一君、大丈夫？」

「うん。それより、なにをすればこの魔力の塊を吸収できるんだ?」

「お前たちに私を吸収できるはずがない。」

私は「魔力」だ。「魔力」は魔法の源。さあ、どのように戦つ! 目の前に置かれていた巨大な黒い人間の石像が動き始める。

「これと戦うのか……」

「さあ、かかつてこい!」

「やるしかないのか」

聰一は魔法の合成を始める。

黒い球体を作り出し石像に向かつて放つ。

「魔法では私は倒せない」

今まで跳ね返されたことのなかつた黒い球体が簡単に跳ね返される。それも敵は腕を軽く振っただけだ。

「どうなつてんだ?」

「わからいわ。でも戦わないと……」

柚月も魔法を使い石像の動きを止めようとする。

「無駄だ！」

……早い！

敵はただ腕を振り下ろしただけのようだがその巨体から繰り出される攻撃は、

とても早く威力もある。

その攻撃をかろうじて避けるものの、敵はただ腕を振り下ろしただけの攻撃。

ここで苦戦してこのようでは勝つなど不可能なことだ。

「柚月、なにか武器になるようなものないか?」「ないよ……」

「どうすればいいんだよ……」

「これなら、あるけど……」

柚月がポケットから取り出したものはトランプだった。

「武器には……ならないよな……」

「やうだよね……」

「悪いがお前に勝ち目はない。

魔法の効果が無いということは、武器が壊れているのと同じ。そして私の体は石だ。素手では壊せるわけがないだろう」

「どうすればいいんだよ……」

石像は、また腕を振り下ろすやう。

今度の狙いは柚月のようだ。

美羽と一緒にゲームをやつたときと回じように身軽な動きで避ける。あのゲームは実戦同様の経験ができるらしい。

「避けでも無駄だ。攻撃の意味がないのだからお前に勝ち目は無い。

素直に負けを認める。」

「そんなわけにはいかないんだよ！柚月、トランプ貸してくれ」

「いいけど、どうするの？」

「もしかしたら、なにができるかもしないだろ」

聰一は柚月からトランプのケースを受け取る。

「そんな紙きれでなにができるというのだ？」

今度の攻撃は石像も本気だ。

肩の位置に構えられた拳が一気に聰一に向かつて飛んでいく。

その攻撃をギリギリの所で避けたが、地面に当たったときに飛んだ瓦礫に当たってしまう。

「ほら、もう終わりだろ？」「

そのまま石像は腕を横に振る。

その攻撃は聰一に直撃する。

聰一は結構な距離を飛んでいき地面に叩きつけられる。

「聰一君！大丈夫！」

柚月は聰一のほうへ駆け寄る。うつとある。

「あいつはもう駄目だよ。さあ、次はお前の番だ！」

石像の攻撃はとても強力なものだったが、柚月は全てギリギリで避けている。

こんな攻撃を受けてしまつたら、一発で……

聰一君は大丈夫だったのかな……

柚月は聰一の方を見る。

聰一は少し無理しているような動きで立ちあがむ。うつとする。

よかつた。大丈夫みたい。でも今は集中しないと……

柚月は、もう一度石像の攻撃に集中して動き続ける。

「動きだけは早いようだな。しかし無駄だ！」

疲れが溜まつてくれればいずれ動けなくなる！ そうなれば私の勝ちだ」

確かに石像の言つとおりだ。

しかし柚月は聰一になにか作戦があると信じている。

だから、できるだけ聰一が立ちあがつたことが気づかれないように

……

そして時間を稼ぐために柚月は動き続ける。

「柚月！ よく耐えてくれた。もう終わりだ！」

聰一は魔法を合成し重力を発生させ一枚のトランプで石像の腕を挟む。

一枚のトランプは、どんどん石像の腕にめり込んで行く。

「なにをした？」

「お前には魔法が効かないんだろ？」

なら魔法の力を利用してトランプでお前の腕を碎こうと思つたんだ

よ

「なるほど……直接、魔法で攻撃をしていない……よく考えたものだ」

「関心してる場合じゃねーぞ？腕が碎かれそつなんだからな？」

「わかっている」

トランプはさらに腕にめり込んで行き、ついに腕を砕いた。

「聰一君、すごい！」

「いや、でも無駄らしいな……」

砕けた腕の部分の破片は地面に落ちると浮いていき、もう一度腕になる。

「さあ、簡単に私は倒せないぞー…どうするの…」

「一気に決着をつけるだけだ！」

聰一はもう一度、魔法を合成させる。

今度は一枚のトランプなどではない。

五十四枚、全てのトランプを使い石像の体中を包み込む。

「これで終わりだ！」

そして腕を砕いた時と同じように全身が砕け散った……

石像がいた場所に残つたのは破片のみ。

跡形もなく砕けたようだ。

「これが地球の魔法使いか……私の負けだ……」

石像の破片は光初め一か所に集まる。

「聰一君、吸収できるんじゃない？」

「そうだな」

光に手をかざすと簡単に吸収することができた。

「これで、この魔力の塊は終わり？」

「そうみたいだな。どうやら、もとに戻れるみたいだぞ」

魔力の塊の中に吸い込まれたときと同じように、まわりが光る。そして気がつくと森の中に戻っていた。

「聰一君、大丈夫だつた？」

「はい。黒い石像と戦わされました」

「それが魔力の本当の姿だつたってことね……」

「そりなんですか？」

「多分そうよ」

「そういうえば聰一君、なんでトランプだけあの石像に勝てると思ったの？」

「ああ、あれは石像が地面を殴ったときに石像の手に傷がついたんだよ。俺が使った魔法を弾いたときは無傷だったのにね。

それで物理的な攻撃だつたら通用するかなって思つてさ……」

「よくトランプで挟んだだけで壊せたわね……」

「なんか、あの石像すごく物理攻撃に弱いみたいだったからさ。トランプとはいっても、押す力が大きければ物をつぶすことくらいできるでしょ」

「まあ、あれだけ薄かつたら簡単には折れないしね」

「そういうこと」

「えーと……なにがあつたかわからない私たちには全然わからないんですけど……」

「すいません。そういうえば俺たちが魔力の塊の中にいた間、なにかありましたか？」

「それが、なにもなかつたのよね」

「そうですか……まだ時間もあるみたいですし、次の魔力の場所に行きませんか？」

「そうね。回収するのは早い方がいいからね」

氷璃は次の魔力の塊の位置も把握しているらしく、歩き始める。

「次の魔力の位置までは結構あるけどいい？」

「大丈夫です」

「じゃあ、このまま進んで行くわよ」

聰一、柚月、美羽の三人は氷璃についていき次の魔力の場所へと向かう。

act3 昼食

「あの氷璃さん……」

「なに？」

「次からどんな戦いになるかわからないので武器があつたほうが多いと思うんですけど」

「確かにそうね。じゃあ一回戻る？」

「えー、ここまで来たのに？」

「私は構いませんよ」

「じゃあ三対一だから一回戻りましょうか」

「わかったわよ……」

美羽はあまり乗り気ではないみたいだが来た道を引き返していく。  
そしてさつき吸収した魔力があつた場所を通る。

その場所は普通の状態に戻っている。

一度吸収してしまえば、もう戻る事はないのだろう。

「聰一君、心配しなくても大丈夫よ。

一度吸収した魔力は、もう聰一君だけのものなんだから」「はい」

そのまま来た道を引き返していく、美羽の家につく。「時間もちょうどお昼だし、ご飯も食べてこきましょうか」

「そうですね」

「じゃあ私、買い物に行つてくるから」

氷璃はそう言いつと店がある方向へ歩いていく。

「あー、あれだけ歩いたら疲れたなー もう家の中に入らひつけ」

そう言って美羽は玄関の鍵を開け家中に入つていく。

「ふつ」

家中に入ると美羽はすぐに椅子に座る。

「二人とも元気ねー」

「そんなことありませんよ。俺だって疲れました」

「私もです」

「じゃあ氷璃が返つてくるまでゆっくりしてましょ」  
「はい」

聰一と柚月も椅子に座り氷璃の帰りを待つ。

「ただいまー」

氷璃が帰つて來た。

右手にだけ買つたものが入つていてる袋を持つている。

「今すぐ作るから。美羽、手伝つて」

「えー 疲れてるし……」

「俺がやります」

「え？ 聰一君が？」

「はい。地球では一人暮らしなので料理くらいできます」

「うーん……じゃあ手伝つてもらおうかな……」

「はい」

「私もやります」

「柚月は休んでていいよ」

「でも……」

「大丈夫だつて。氷璃さん、始めましょう」

「そうね。じゃあ二人とも少し待つててね」

聰一と氷璃はキッチンに向かう。

「聰一君、本当に料理できるの？」

「できますよ。なに作るんですか？」

「うーん……こっちの世界の料理なんだけど、私が考えたものだから名前はないわ」

「そうですか……なにをすればいいですか？」

「この野菜を切つて」

「どんなふうにですか？」

「任せるわ」

「は？」

「この料理はどんな野菜の切り方でも成り立つかから、聰一君の好き

な切り方をしていいわ

「わかりました」

聰一は包丁を握り野菜を切り始める。

「そういえば昨日の夜どうだった?」「え?」

「せつかく一緒に部屋にしてあげたんだから、なんかあつたでしょ?」

「なにもありませんよ!」

「そう……」

私は全部、知ってるんだけどね

「なにか言いましたか?」

「うん?なんでもないよ」

「切り終わりましたよ」

「ありがとう」

「次はなにをすればいいですか?」

「うーん……あとは、なにもないわね。聰一君もむこうに行つていいわよ」

「そうですか……わかりました」

聰一は柚月と美羽のいるリビングへ戻る。

「あれ?もう終わったの?」

「氷璃さんに、もうやることないから戻つてって言われました」

「じゃあ、もうできるんだ」

「多分そうですね」

「氷璃さん、なに作るつて言つてた?」

「オリジナル料理を作るとは言つてたけど、どんな料理かはわから

ない」

「へー どんな料理だろ?」

「聰一君ー 運ぶの手伝つてー」

「はー。今行きます」

もう一度キッチンに向かつ。

act 4 滝の魔力

「氷璃さん……これって……」

「そうよ。聰一君もよく知つてゐる野菜炒めよ」

「そつならそつて言つてくださいよ」

「聰一君がどんな切り方するのかなーつて思つてた」

「なんですか……それ……」

「別にいいじゃない。ちゃんとした形になつたんだから」

「そつですけど……」

「ほら、柚月ちゃんも美羽も待つてゐるんだから早く運んで」

「わかりました……」

聰一は四人分の野菜炒めを運ぶ。

そして氷璃はパンをテーブルの上に出す。

「なんか不思議な組み合わせですね」

「そう?」じつちの世界では普通よ。じゃあ、食べましょうか

「いただきます」

野菜炒めの味は地球のものとあまり変わらない。

使つてゐる野菜は違うのに不思議なものだ。

「そついえば、どんな武器があるんですか?」

「ああ、ちょっと待つてて」

美羽は食事の途中にもかかわらず武器を取りに行く。

「こつこつのしかないわよ」

美羽が持つて来たものは短剣、刀、弓矢……

「あのー 今さらですが、なんでこんなものがあるんですか?」

「護身用だけ?」

「魔法使えるんだから大丈夫なんぢゃないですか?」

「ただけど……一応ね。いつ魔法が使えなくなるかもわからぬ

し

「そんなことがあるんですか?」

「あるわよ。魔法使いのスランプみたいなものかな」

「そりなんですか……」

「で、どの武器持つていいく?」

「うーん……俺はなんでもいいや。柚月は?」

「私は、この短剣がいいかな」

「じゃあ、弓矢も持つていけば?」

「なんで?」

「攻撃範囲が狭いから。俺は、刀だけでいいや」

「じゃあ、これでオーケーね」

「美羽さんと氷璃さんは持たないんですか?」

「私たちはいいわ。使い慣れてないし。ほら、早く食べちゃって」

「あ、すいません」

聰一と柚月はテーブルの上に並んでいるパンと野菜炒めを少し急いで食べる。

そして食器を片づけて、もう一度魔力を回収するために出発する。

「あー 疲れたー」

「美羽、つるさい」

「氷璃に言われたくないわよ」

「運動不足なんだから少しきらじに耐えなきことよ」

「はいはい。氷璃は厳しいねー」

「聰一君と柚月ちゃんは大丈夫?」

「大丈夫です」

「はー 若いっていいわねー」

「あんただつて言つほど歳とつて無いでしょ」

「ただけどさー」

「まあ、いいわ。もう少しでつくから我慢して」

「わかりましたよー」

この森はとても広い。

そしてあたりは木々に覆われているため、まわりの様子がよくわからぬ。

足下も植物が生い茂り、歩きづらい。

「おかしいわね。私の予想だと、このあたりなんだけど……」

「なにもないです」

「もしかして近くに滝があるんですか？」

「なんで？」

「水が勢いよく流れる音が聞こえませんか？」

「……確かに」

「本當だ」

耳をすませると、聞こえてくる音からはとても大きい滝……

もしくは流れの速い川があることがわかる。

「もしかしたら、そこに魔力の塊があるかもしれないわね。行ってみましょっ」

聰一たちは音の聞こえる方へ進んで行く。

音の発生源に近づくにつれて音の大きさは増していく。

それは予想以上で他の人が話していることが聞こえなくなるほどだ。

「すごい音ね」

「なにか言いましたか？」

「えー？ なにー？」

話しても、なかなか聞こえない。

もう少しで音の発生源につくはずだと思つた時、前が明るく見える。

「あれ？ もう森終わり？」

明るく見えたのは一部、木が生えていない場所があつたからだ。

そして、木のない場所に行くと目の前には巨大な滝がある。

この滝が音を発していたようだ。

しかし、なにか様子がおかしい。

崖の上から滝が流れているのだが、

真ん中に一か所だけ岩もないのに水が流れていらない場所がある。

「あれ、どうなってるの？」

「え？ なに？」

「ここまで近くに来ると喋っていることはわかつても、どんなことを言つているのかもわからない。」

そのとき滝の流れが止まる。

「……どういうことだよ」

水の流れが止まつたおかげで声は聞こえるようになつた。

「もしかして、ここに魔力の塊があるの？」

「わからないわ。でも……」

確かになにもないのに流れが止まるなどおかしなことだ。それも今まで流れていた水は空中に止まつたままだ。

そして滝の中心が光始める。

「やつぱり、ここに魔力の塊があつたのね……」

その光は少しずつ聰一たちのいる方へ近づいてくる。

「これが二つ目の魔力の塊……」

「どうやら、あなたたちが私たち魔力を回収しているようね」

「この魔力も喋るのかよ……」

今回の魔力の塊の声は女性のものだ。

「あなたたちは……悪そうな人じゃないわね」

「私たちはあなたを回収しなくてはいけないんです」

「わかつてるわ。私たちみたいに外部から持ち込まれた魔力をそのままにしておいたら、

この世界にどんな悪影響が起きるかわからぬものね」

「そうです。だから……」

「私は別にかまわないわ。」

「じゃあ……」

「ただし！ 私を吸収した人には私自身……つまり、この魔力自体の力を持つてもらうわ」

「どういうことですか？」

「さあ、どうこう」とだらうね

「教えてください」

「私と戦つて勝つたらいいわよ」

「わかりました」

「じゃあ、ここで戦うわけにもいかないしちょっと来てもいいわ  
魔力の塊が光る。

そして聰一たち全員が魔力の中に吸い込まれる。

## act 5 時の魔法

「あの、氷璃さん……ついでですか？」  
「なに？」

「魔力の塊と戦うってことは、その魔力の中に入つて戦うってことですか？」

「多分そういうことね。一つ田もそうだったし今回もそうだからね」「さあて、やつと始められるわね」

「なにをすればいいんですか？」

「私は時を操る魔力よ。さつき言つた私自身を持つつていうのは、所持者自身の時間を狂わせるということ。

もし、あなたたちが私を回収しに来なかつたらこの世界の時間は狂い始めて

酷いことになつていたでしょうね。

だからあなたたちには時……つまり私自身と戦つてもらうわ」「どんな戦いになるんだ……」「

「聰一君、気をつけた。今までとは格が違うわ」

「わかつてます。時を操る魔法……なにをされるんだ……」

「まずは私が行つてくるわ。相手のことがわからないと戦えないからね」

魔力の塊の姿は白い球体のままだ。

その球体にむかつて氷璃は氷の塊を飛ばす。

「氷の魔法か……おもしろいわね。でも無駄よ  
魔力の言つとおりらしい。」

氷璃の作り出した氷は水になつて地面に落ちていく。

「！？なによ、あの魔法……あんなの見たことないわ  
次は私が……」

柚月は黒い球体の魔法を使つ。

黒い球体は魔力に向かつて飛んでいく。

しかし途中で消えてしまつ。

「今度は魔法が消された！？」

「あなたたちに私の魔法をどうすれば突破できるかわかる？」

「風なら、どうなるのよ…」

美羽は風を発生させる。

「それも無駄だよ」

まっすぐに吹いていた風の向きが一気に変わり魔力がある方向とは全く違う方向に行く。

「聰一君！あとは君しかいないわ。直接、吸収してみて」「わかりました」

聰一は走つて魔力に近づいていく。

「今度は直接来たかーでも無駄なんだよね」

聰一の動きは一気に遅くなり魔力が高い位置に上がつてていく。

「浮いてたら攻撃も当たらない……」

「ダメだ……どうしていいか全然わからないわ……」

「時を操る相手に簡単に勝てると思った？」「

「……そうだ！聰一君、さつき吸収した魔力使える？」「

「使えますけど……それがどうかしたんですか？」

「あの魔力が使つている魔法が時を操る魔法だとして、さつき吸収した魔力が魔法を受けないんだとしたら……」「そういうことですね！わかりました」

「なにか気づいたみたいね」

「はい。次は絶対に止められませんよ」

聰一はもう一度さつきと同じように魔力に向かつて走つていく。

「なるほどね……でも君を止める以外にも避ける方法ならあるんだよ」

魔力が動く速度がとても速くなり聰一の攻撃を避ける。

「あの魔法……自分にも使えるのか……」

「どうすればいいんだよ！攻撃が当たらないんじゃ……」

「攻撃が当たらないって……前にもあったよな……」

「聰一君も思い出した？あいつの戦つたときの！」

「うん。魔法同士で相殺させたんだっけ？」

「そうよ。今回もあれが使えるのかな？」

「ためしてみる？」

「うん」

「でも相手の魔法が「時間操る」だから……

進められるときは戻す魔法、戻されるときは巣める魔法じゃないと……」

「……やつぱり無理ね？」「…

「多分、無理だと思つ。まづ時間を操る魔法を使えないと……」

「そつか……」

「聰一君、柚月ちゃん気をつけや！」「…

「どうかしたんですか？」

「あいつは今まで攻めてこなかつた……でも、ついにやる気になつたみたいね」

魔力の方を見ると空中で左右に動いている。

そして通つた場所には白い線ができ、通るたびに太くなつてこむ。

「どんな攻撃が来るのよ……」

柚月は迷わず黒い球体を作り魔力の方へ放つ。

しかし今度は時間を操られたのではない。

白い線の中へ吸い込まれていく。

「また違う魔法に変わつた！？」

「これは違う魔法なんかじゃないわよ。でも詳しいことを教えるわけにはいかない。

それを見破るのがあなたたちのするべきこと……

できなければ次に戦うことになる魔力に勝つことなんて不可能よ

「つていうことは……もしも、全ての魔力を回収するために必要なことが一つ一つの魔力との戦いに隠されているとしたら石像との戦いの中にヒントがあるってこと？」

「かもしれないけど……今は、まだわからない

「じゃあ、どうすればいいのよ……」

「お悩みのようですねー 単純に考えてみなよ。すぐわかるから」「へそ……」

「まあ、いいわ。とりあえず戦いを続けましょ」

魔力のまわりにある白い線が急激に太くなる。

そしてその中から白く光る鋭く尖ったものが見える。

「私も本気で殺しに行くわよ！」

魔力がそう言つた瞬間、三個の鋭く尖った光が聰一たちに向かって放たれる。

それに素早く反応して氷璃が氷の盾を作る。

act 6 種明かし

「やつぱり戦いは、いつでなくちゃね」「氷璃の表情は楽しんでいるように見える。

「私も本気でやろうかな」

あたりの気温が一気に下がる。

「ヤバ……聰一君、柚月ちゃん、氷璃から離れて！」

「え？」

「いいから！早く！」

「わ、わかりました」

聰一、柚月、美羽の三人は氷璃から離れる。

「なんで離れなくちゃいけなかつたんですか？」

「氷璃が本気を出すって言つたら近くにいるだけで凍え死ぬわよ

「そんなに寒いんですか？」

「うん。氷璃は魔力の無駄をなくするよりも、一度にたくさん魔力を使うからね。まわりにも影響が大きいのよ」「そうなんですか……」

氷璃は氷の塊をいくつも作り出し、それを魔力に向かつて放つている。

それに対する魔力は白い塊を……

二つの魔法は見事に相殺しているように見えるが氷璃のほうには、まだ余裕がある。

「あなた一人で本当に大丈夫？」

「あんたこそ魔力とはいえ、相当つらいんじゃない？」

「へー あなたには、そう見えるんだ……」

「なんで？」

氷璃の作り出した氷は次々と水になつていき地面を濡らしていく。

「忘れたの？私の魔法がなんだつたか」

「そうだつた……『時を操る魔法』すごい魔法よね……」

「どうしたの？もう終わり？」

魔力はもう一度、白い塊を氷璃に向かつて放つ。

「でも攻撃が私に当たるとは限らないわよ」

氷璃は攻撃が効かないのならば身を守る事に集中する。

「だから氷じやダメだつて」

氷璃の作り出した盾も水に変えられ地面を濡らしていく。

「時間操ると攻撃……同時にできるの……」「

少し厳しそうだがなんとか攻撃を避ける。

「聰一君、柚月ちゃん、私たちも戦うわよ」

「はい」

「柚月ちゃん一気に攻めて！」

「わかりました」

柚月は離れた位置から魔力を狙つて黒い球体を放つ。

「三対一に戻つても、あなたたちは勝ち方に気づけないと勝てないわよ？」

黒い球体は白い線の中へと吸い込まれていく。

「普通に攻めてもダメなら俺がやります！」

聰一は魔力の方へ走つていく。

「聰一君、魔力は浮いているのよ？どうするの」

「美羽さん！俺の体を風で浮かせてくださいー！」

「そういうことね。いくわよ」

美羽が発生させた強風が聰一の体を持ち上げる。しかし美羽の魔法は風だ。

持ちあげられる重さには限界がある。

「氷璃！手伝つて！」

「はいはい」

氷璃は美羽の魔法で浮いている聰一の足下に氷で足場を作る。

そこから聰一は魔力に向かつて跳ぶ。

「私も手伝えます！」

柚月の魔法も加わり聰一の体は魔力に向かつて一直線に飛んでいく。

「そう来たかーでも無駄。私も動けるんだからね  
「させません！」

柚月は重力の発生地点を聰一と魔力の間にする。  
これで同じ場所に聰一と魔力が引かれていく。  
「あれ？これは、さすがにヤバいかも……」  
「終わりですよ！全部、吸収しますからー！」  
魔力に触れる寸前で魔力の姿が消える。

「あれ？」

「でも、そんな簡単に吸収されるわけにはいかないんだよね  
「なんで！？」

「なんか、もう戦いにも飽きてきたし種明かししてあげるわ  
「なんだよ、それ……」

「私の魔法は時間を操る魔法なんかじゃないわ  
「は？」

「だから、私の魔法は時間を操ったんじゃなくて「魔力の状態」を変えたのよ」

「それで氷璃さんの氷の魔法は水になつたっていうこと……」  
「でも……私の風の魔法は……」

「それは気圧を変えただけよ。あと重力も簡単に弱めることができ  
だし」

「なんていいう最強魔法……」

「それがそもそもないのよね。使つたらすぐ疲れるし。  
それに私自身が魔力だから自分を強くできても、  
自分が魔力じやなかつたら、なんの意味もないんだよ  
「それって、あなたが使つたら最強ですよね……」  
「だから魔法を使つたら私は疲れるし、  
自身の状態を変えるつていうことは体にも相当な負担がかかるのよ  
ね」

「そりゃあ、あなたの言つていた「勝つ方法」ってなんですか  
「え？ 私に魔法を使わせ続ければいいだけ。

いずれ私は疲れて魔法を使えなくなる。

それに気付けなかつた君たちは、あまり攻めてこなかつたから……」

「それでつまらくなつて、自分から戦いを終わりにしたつていいことですか？」

「終わつてなんかいわよ。まだ戦いを続けてもらひうわ。

私の魔法がなにかわかつただけで私に勝てると思つてゐの？」

「私たちも、ずいぶんあまく見られたものね」

氷璃は、また氷の魔法を使う。

しかしそれも水に変えられしまう。

「そうそう。そうやつて魔法を使って私が疲れるのを待てばいいのよ

「聰一君、私たちが攻撃を続けるからあいつが疲れたたらすぐに吸収してね」

「わかりました」

聰一にそつ言うと柚月、美羽、氷璃の三人が魔力に対して攻撃魔法を使い続ける。

やつぱり使つた魔法の状態は変化させられ全ての攻撃が魔力に当たつていない。

聰一も後ろから少しずつ攻撃魔法を使つてゐる。

しかし、その攻撃も魔力には当たつてない。

「なんで？全然、疲れてないじゃん……」

## act7 状態変化魔法

魔力の動きは全く変わっていない。

疲れが溜まり、動きが遅くなつた所を聰一が吸収する予定だつたが、魔力が疲れる前に、こちらが疲れてしまいそうだ。

「柚月ちゃん、もうつらそうだから休んでいいわよ」

「大丈夫です……」

「あれ？ もしかしてあなたたちのほうが先に疲れちゃうの？」

「そんなわけないでしょ……」

美羽はつらそうな表情をしているが魔法を使い続けている。

「二人とも、少し休んで」

「まだ大丈夫だつて……」

「いいから休んで！ 三人同時に魔法を使えなくなつたら終わりだから！」

「わ、わかったよ……」

氷璃がこんなに声を荒げたところを見たのは初めてだ。その姿はとても恐ろしいものだ。

秘めている魔法の力……それを感じさせられる。

柚月と美羽は言われたとおり魔力から離れていく。

「あなた一人で大丈夫なの？」

「大丈夫なわけないでしょ……でも、こうしないと……」

「へー あなたの結構、魔法に詳しいのね」

氷璃の魔法は、さつきより強力なものになつていて、一気に魔力の体力を奪うつもりなのだろう。

氷璃の使つている強力な魔法ですら魔力は簡単に水に変えていつてしまう。

「氷璃があんなに苦戦するなんて……」

「あの魔力には疲れが無いんじゃないんですか？」

「それがないと思う。あの魔力が嘘をつくとは思えないからな」

「そうだけど……」

「氷璃さん……一人で大丈夫かな……」

「多分、一人であいつの体力を全部奪うのは厳しいと思うわ」

「確かにそうですね……」

「三人で同時に攻めても、全然平気みたいだつたし……」

「あれ？ 魔力の動き、少し遅くなつてない？」

「気のせいだろ」

「絶対、遅くなつてるって」

聰一は魔力と直接戦っていないので気づけていないのかもしぬないが魔力の動きが遅くなつているのは事実だ。

氷璃の魔法が強力になつたということは魔力が水にしたものでもう一度、氷にして攻撃をしていったのでそのぶん氷璃のほうが有利になつた。

「確かに遅くなつてるな……」

「そろそろ私たちも戻ろうか」

「はい」

柚月と美羽は氷璃に近づいていく。

「氷璃、次は氷璃が休んで」

「もう大丈夫なの？」

「人の心配するより自分の心配をしなよ

「わかつたわよ……頼んだわよ……」

美羽の言うとおり次は氷璃が聰一の近くに来る。

「氷璃さん！ 大丈夫ですか？」

「うん……」

氷璃の歩き方はとてもつらそうだ。

フランフランと、いつ倒れてもおかしくない様子だ。

「肩、貸しましょうか？」

「大丈夫よ……」

そのとき氷璃は聰一の方に倒れる。

「やっぱりダメじゃないですか……」

「『めんね……聰一君に迷惑かけたら最後に困るから……』」

「俺は全然戦つてないから大丈夫ですよ」

「そう……あとは頼んだわよ……」

氷璃は聰一におさえられたまま氣絶した。

「無理しすぎですよ……」

氷璃が氣絶した理由は魔力を一気に使いすぎたためだ。

そのせいで体に負担がかかり、さらには脳も疲れさせてしまつ。

「魔力の動き……相當遅くなつてる?」

柚月と美羽が連續で攻撃をしているので、そろそろ魔力にも限界がきていくようだ。

「聰一君! 手伝つて!」

「わかりました」

聰一は氷璃を地面に寝かせて柚月と美羽が魔力と戦つている方に行く。

「柚月ちゃんも限界みたい……そして私も……」

「聰一君、あとは頼んだわよ……」

「美羽さん!」

美羽も倒れてしまった……

氷璃と同じように氣絶をしているようだ。

バタン!

横でなにかが倒れたような音……

「柚月!」

お前も相当、無理してたのか……」

「あれ?三人がかりでも私に勝てないの?」

「つるさい……お前は絶対に俺が吸収してやるよ!」

「無理だよ……」

「黙れ!」

「だから無理なんだって!」

「黙れ!」

聰一は魔法を一気に合成させ魔力に向かつて攻撃を始める。

「本当に頭、悪いのね！少し黙つてて！」

魔力は聰一の動きを止めるために手足に光の輪をつける。

「なんだ……これ……吸収できない」

「そうよ。それは「私の」魔法じゃないからね」

「どういふことだよ……」

「そのうちわかるかな……」

まあ、いいや。私はもう戦う気ないから攻撃しないでくれない？』

「嘘つくな！」

「本當だから……まあ、その状態じゃ攻撃できないか」

「……」

「じゃ、私の話聞いてくれる？」

「わかったよ……」

## act 8 宇宙初の魔力

「あなたたちが回収しようとしている魔力は全部で十個。一個回収してて、私も回収すると考えるとあと八個か……」

「それが、なんだよ」

「その魔力十個が結構、重要なものでね。」

「この世界……宇宙で初めて魔法を作り出した人が作りだしたものなの」

「でも俺たちは地球に送り込まれた魔力の塊を回収するつもり……」「なんでかわからないけど

「地球に送り込まれた魔力 자체が私が言ったものと同じだったのよ」「じゃあ俺が一つ目の魔力を吸収したってことは……」

「そう。あなたの体の中に、その魔力があるってこと」「その魔力があつたら、なにかあるのか?」

「あるわよ。いいことでも悪いことでもない、ただあなたが大変になるつていうだけの影響がね」「それつて……」

「これから教えるわ。

「これから教えるわ。

「とりあえずあなたのやるべきことは十個の魔力全部を回収すること。そして、その後に宇宙で初めて魔法を使つた人……

簡単に言うと魔法の神様ね。その人にあつてもらうわ」

「それだけ?」

「そうだけど、神様が初めて作り出した魔力を体内に十個も持つているつてことは

「神様も期待してるつてわけ。だからなにを頼まれるかわからないわよ」

「そういうことね……」

「これで私の話は終わり。そして私の役目も……」

「役目つて?」

「あなたにこのことを伝えること。

そして、次から戦う魔力が私と同じように記憶を持っているとは限らないわ。

一個目の魔力のようだ……」

「これから、お前はどうするんだよ？」

「あなたに吸収してもらわ。これからは私の魔力を使ってもいいから。

じゃあ、よろしくね」

「…………わかった」

魔力は地面に近づいてくる。

そして聰一は魔力に手をかざし、吸収を始める。

「これから、あなたの運命がどんなふうに変わるかわからないわ。でも、こんなに頼もしい仲間がいるんだつたら心配はないわね。そして私もついてる。がんばってね」

吸収しているときに聰一の頭の中に魔力の声が流れ込んできた。

気がつくと、元の滝の場所へ戻つていた。

そして滝の流れも普通になつていてる。

「宇宙で初めて作られた魔力か……」

柚月も美羽も氷璃も気絶したままだ。

男とはいえ、三人の人を同時に運ぶことは不可能だ。なので、ここで皆が目を覚ますのを待つことにした。

「なんもすることないな……」

まわりには自然が溢れているが何もすることがない。

近くを見ても、あるのは三人が眠つている姿があるだけ。自然があるとはいっても動物がいるわけでもない。

「本当にやることないな……」

「うう……」

氷璃が少し苦しそうな声を出す。

「氷璃さん…大丈夫ですか？」

「うん……」

氷璃は目を覚ましたようだ。

「まだ起きない方がいいですよ……」

「大丈夫よ。魔法の使いすぎなんて、すぐに治るんだから……」

「そうなんですか？」

「そうよ。少なくとも私はそうだから」

「じゃあ美羽さんと柚月は……」

「どれだけ時間かかるかわからないけど、絶対起きるから大丈夫よ

「そうですか……」

「そういえば、どうやってあの魔力を倒したの？」

「それは、ですね……魔力が魔力自身についての説明をしてくれた

んです」

「どういうこと？」

「俺たちが回収しようとしている魔力は全部で十個あって、その魔力は全て宇宙で初めて作られた魔力らしくて……」

「でも私たちが回収しようとしている魔力って、

地球に送り込まれた魔力がこの世界に散らばったものよね？」

「地球に送り込まれた魔力自体が宇宙で最初の魔力そのものだった

そうです」

「なんで、そんなものが……」

「それは魔力にもわからないと言つていました……」

「そういえば今日だけで一個の魔力を回収しているわよね？」

「はい」

「じゃあ、あと八個つてこと？」

「それと聰一君の中には、その魔力があるの？」

「はい」

「その魔力、使えない？」

「わかりません……でも無理だと思いますよ」

「そんなふうに言つちゃダメよ。さっそく、試してみましょ

「ここですか？」

「うん。あ、でも今戦つたばかりだもんね……」

「大丈夫ですよ」

「そう? ジャあ始めましょ!」

「でも……」

聰一は柚月と美羽が寝ている方を見る。

「あ、確かにここで試したらどんな魔法かわからないから危険かもしれないわね」

「少し、離れましょ!」

「そうね。でも柚月ちゃんが美羽が目覚めたときに私たちがいなかつたら困ると思つから、あまり遠くにはいかないようになないとね」

「はい」

聰一と美羽は木が少なく柚月と美羽のいる位置から見えるギリギリの位置まで離れる。

「やつてみて」

「はい」

聰一は合成を始める。

## act9 新しい合成方法

この方法で本当に正しいのかはわからないが、なんとなくという感覚に任せて魔法を合成する。

しかし、発生したものは「氷」。

これでは今までとなにも変わらない。

「やっぱり無理なのかな？」

「でも……今のいつもとは少し違う感覚でした」

「もう一回やってみる?」

「はい」

さっきのなんとなく感じたもの……さっきはそれに忠実に従つたわけではない。

次は完璧に感じたとおりに合成をする。

「え? これって……」

今度は「氷」は発生しなかった。

そのかわりに白い煙のようなものが発生する。

それはとても冷たく、凍えるようなもの……「冷氣」だ。

「うーん……これでも、いつもと同じよね……」

「はい……もう一回やってみます」

次は少し自分の考えも交えて合成のしかたを変える。

二つの魔法を合わせるのではなく、状態を変化させる魔法を氷の魔法に使うような感覚……

そんなふうに合成をする。

「もしかして……」

「今度はできましたよ!」

魔法の姿を見なくても成功したことが自分でわかつた。

そして発生したものは「氷」の魔法ではなく、「水」の魔法になつていた。

「す」「……」

「これで使える攻撃が増えましたね」

「でも、ただ水を発生させるだけだつたら……」

「大丈夫です。柚月の魔法もあれば形を変えることも可能だと思つので」

「そう? ジャあ……あの滝に向かつて思いつきり水を放つて」

「わかりました」

もう一度、滝の前に戻る。

さっきの感覚どおりに「氷」の魔力を「水」にする。

さらに「重力」の魔法で水の形を変える。

とても難しいと思うがやつてみなくてはいけない。

「これで、いいはず……」

三つの魔法を同時に合成する。

いつもは一つしか合成していなかっため少し感覚が違う。

しかし体に負担がかかるとかつらいとかそういうたものではない。そして完成させたものを滝に向かつて放つ。

水は鋭い刃のような形になり滝を切り裂いていく。

その衝撃で水しぶきが飛び散る。

「すご~いわね!」

「ありがとうございます」

「これなら次の戦いも大丈夫そうね」

「俺、一人じゃ無理ですよ」

「大丈夫。無理でもやってみらわないと困るからね」

「ううん……冷たいなー」

「美羽! ? やつと起きたかー」

「うん。つていうか今のは?なんか冷たいものが……」

「聰一君が新しい魔力を手に入れたのよ」

「へー どんな魔法?」

「さっき戦った魔力と同じ魔法」

「え?あれ?もう無敵じゃん」

「そんなことありませんよ。次の魔力はもっと強いと思いますし……」

確かにそうだ。

今回の魔力も相手が最後に戦う気がなかつたから勝てたようなものだ。

もしも、そのまま戦つていたら……

「そういうえば柚月ちゃんは大丈夫なの？」

「あんたより魔法を使つた経験ないんだから起きるわけないでしょ

……」

「そうだよね……」

「聰一君、一回家に戻ろうと思つんだけどいい？」

「はい。柚月は俺が運びます」

「じゃあ、もう行きましょう。魔力の位置をもう一回確認したいし

……」

「えー 私、今起きたばかりよ？」

「元気そうだから大丈夫よね」

「……わかったわよ」

「じゃあ行きましょうか

「はい」

聰一は柚月を背中に抱える。

「聰一君、結構力持ちなのね」

「柚月が軽いからですよ」

「でも、すごいと思うわよ。人を抱えたまま歩くのが

「そうですか？」

「うん。じゃあゆっくり歩くから無理しないでね」

「大丈夫です」

「聰一君だけじゃなくて、私の心配もしてよ……」

「聰一君に運んでもらえば？」

「なんで、そうなるのよ……」

「俺は構いませんよ」

「ほら、聰一君もいって」

「ここさ。歩くか？」

「じゃあ私が運びつか？」

「もっ……わかったわよ……歩くか？」

「それでここなのよ」

美羽は元気そうだ。普通に歩いてこない。

## act9 新しい合成方法（後書き）

「CLEAR」という小説を投稿しました。  
現在、六話まで書いています。  
よければ、「CLEAR」も読んでみて下さい。  
ジャンルは恋愛です。

## act10 柚月の負担

「そういえば、あの魔力じゅうげって倒したの?」「えーとですね……」  
「待つて。柚月ちゃんが起きてから説明したほうがいいわ。もう一回、説明することになるから」「わかりました」「もしかして、なんか新しいことわかったの?」「はい」  
「それで氷璃が家に帰りたいって言つたの?」「そうよ。これからしばらく忙しくなるわよ」「まさか、また戦うの?」「そうなるわね」  
「次は本当にヤバいんじゃない……」「聴一君と同じ」と言つてゐるわね。確かに魔力も強力なものになると思つわ」「じゃあ、絶対勝てないじゃん……」「だから戦術を考えるんじゃない? そのために一回帰るのよ」「それでも……」「それし聴一君もいるしね。絶対大丈夫だよ」「俺ですか……」「…………」「…………」「お、柚月ちゃんも起きたみたいね」「あれ? 私、魔力と戦つて……」「氣絶したのよ」「じゃあ、魔力は……」「それは家についてから説明するわ」「そうですか……って聴一君! ? 自分で歩けるから、もう大丈夫……

…

「ダメ。起きたばかりなんだから、そのままにしてる」

「でも……」「…

「無理はダメよ。いつもの元気がないもの」

「そうだ。ちゃんと掴まつてろよ」

「うん……」「…

柚月は聰一の胸の前で腕を交差させて聰一に掴まつてこる。すごく疲れている様子だ。

柚月を背負つたまま歩き��けていると、すぐに掴まつてこいる手の力が弱くなる。

そして顔が聰一の顔のすぐ横に来る。

スースーと静かに柚月が呼吸する音が聞こえている。

柚月はもう一度寝みつてしまつたようだ。

「柚月ちゃん、そうとう疲れてたんだね」

「そうですね。最初から俺が戦つていれば……」

「それだったら今頃、全員あの滝の前で氣絶してたわね」

「なんですか？」

「聰一君が一つ目の魔力を吸收してあるのに一番最初に氣絶したら、あんなふうに自分から吸収させてくれなかつたと思つよ」

「そういうことですか……」

「うん。でも次からは戦つてもううから

「はーー！」

聰一は力強く返事をする。

「いい返事ね

「ありがとうございます」

帰り道は来た時よりも長く感じる。

三人とも疲れていたため歩く速度が遅くなつてゐるようだ。

「やつと一つ目の魔力があつた場所まで來たわね」

「ちよつと休憩しようよ……」「…

「そうね」

「あー やつと座れる」

美羽は近くにあった丸い岩に座る。

そして氷璃も同じように丸い岩に座る。

聰一は柚月を背負っていたため座らずに立っている。

「……聰一君、ごめん……」

「え？」

「私、もう大丈夫だから……」

柚月の声が聞こえ手の力も元に戻っている。

「本当に大丈夫か？」

「うん」

聰一は柚月をゆっくりと下ろす。

「柚月ちゃん、本当にもう大丈夫なの？」

「はい……」

「まだ元気なさそうね」

「大丈夫です……」

氷璃の言つとおり、声にはまったく元気がない。

聰一は、まだ倒れそうな柚月の手をひき岩に座る。

「柚月も座れよ」

「うん……」

柚月は聰一の横に座る。

「もう、しばらく休んでから行きましょう」

「はい」

四人が岩の上に座っている間はほとんど会話がなかった。

全員、話す気力がないようだ。

特に柚月は顔色も悪く、真っ白だ。

「そろそろ行きましょうか」

「はい。柚月、もう一回……」

「歩けるから大丈夫……」

「じゃあ、手だけでも……」

「ありがとう」

聰一が差し出した手を柚月は軽く握る。

「無理そりゃだつたら、すぐ言えよ」

「うそ……」

「じゃあ、行くわよ」

氷璃が歩き始めるが柚月にあわせて並み、ゆっくり歩いていく。  
この速度で歩いていくと、ここからでも相当時間がかかりそうだ。  
会話もまつたくないまま歩き続ける。

## act11 柚月の気持ち

何度も柚月が倒れそうになつたが無事、家について事ができた。  
家についてすぐに柚月を部屋のベッドに寝かせる。

「今日は、ゆっくり休んで明日また詳しいことを話しましょうか」

「じゃあ、私も寝るね」

「氷璃さん……布団もらつていいですか?」

「いいわよ。ちょっとついてきて」

言われた通りついていくと氷璃の部屋につれていかれた。

そこにある押入れのような場所から布団を取り出して一階の聰一が  
寝る部屋に運ぶ。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。ゆっくり休んでね。明日から、また大変になるから」

「はい」

氷璃も部屋から出ていき聰一は布団を敷いて横になる。  
自分では、あまり気づいていなかつたが聰一も疲れていたようで  
布団に入つてすぐに眠りについた。

どれだけ深い眠りについているのだろう……

夢を見ることがすらできない。

そんな深い眠りから起きた時の体は、とても重く起きあがることも  
難しい。

目は開いているが体だけ、まだ眠っている。そんな感じだ。

「聰一君、大丈夫?」

「柚月……」

「美羽さんも氷璃さんも、まだ起きてないみたいだし寝てた方がい

「いよ

「そう言われてもな……」

「でも起きあがれないんでしょ？」

「そんなことないよ……」

「お前は大丈夫なのかよ？」

「私はずっと寝てたからね」

「そういうえば俺、どれくらい寝てた？」

「私もさつき起きたばかりだからわかんない」

「そうか……」

「聰一君……」

「どうした？」

「聰一君……」

「どうした？」

「今、動けないんだよね？」

「うん。それがどうかした？」

「横に寝てあげようか？」

「なに言ってんだよ……」

「いいじゃん。昨日だって、いつして寝たでしょ？」

「ただけど……」

「嫌？」

「……いいよ

「嫌？」

「……いいよ

「やつたー

「やつたー

柚月は聰一の横に寝転がる。

そして聰一の腕に抱きつく。

「聰一君が私をここまで運んできてくれたんでしょう？」

「まあな……」

「ありがと

「お……おう……」

「なーに照れてんの？かわいいからいいけど

「それ、バカにしてる？」

「お……おう……」

「なーに照れてんの？かわいいからいいけど

「ゼーんぜん」

「絶対してるよな……」

「そんなことないよ。それより早く体、治してよ」

「そうだな。このまま動けないっていうのは流石に……  
明日も戦わなくちゃいけないわけだし……」

コンコン

「聰一くん 起きたー？入るわよ」

「ちょ……柚月、離れる」

柚月は慌てて聰一から離れてベッドに座る。

「あら、もう一人とも起きてたんだ。じゃあ一階におりてきて」「聰一君が体、動かないみたいなんですけど……」

「え？聰一君も情けないわねー」

「すいません……」

「冗談よ。あれだけの魔力を吸収して動けなくなるなんて当たり前だよ」

「そりなんですか？」

「うん。でもこのままじゃ困るわね……なんとか起きれない」「そもそも大丈夫かもしだれません」

聰一はもう一度、体に力を入れるよう試みる。

今度はちゃんと力が入り立ちあがることができた。  
しかしフタフタする。

「うーん……なんとか大丈夫そうね」「はい」

「じゃあ行くわよ」

「聰一君、肩かす？」

「大丈夫。流石に女の子の肩をかりるのはな……」「遠慮しなくていいって」

柚月は聰一の背中に手を回し体を抑える。

「ありがとう……」

「いいのよ。聰一君だって運んでくれたでしょ」

リビングに行くと美羽も、もう起きていた。

「さあ、明日からのことについて話すわね」

「は」「

「さつき、確認してみたら確かにあと八個の魔力があつたわ」「場所はどこですか？」

「ここからは結構、離れているわ。だから聰一君が地球から来た時に持つてた荷物……」

「テントですか？」

「そうそう。それを使つたりほかの町に泊つたりしなくちゃいけなくなるわね」「

「移動する魔法はないんですね？」

「残念ながら、それはないわね」

「わかりました」

「話はそれだけ。明日からの移動距離とかも考えると、もう休んでた方がいいわね」

「俺、さつき起きたばかりですよ……」

「そうよね……まあ、いいわ。できる限り体を休めておいてね」「はい」

「じゃあ、部屋に戻つていいわよ」

氷璃の話が終わり聰一と柚月は部屋に戻る。

「次はどんな敵なのかな？」

「さあな。でも今日より強いのは勘弁……」

「そうだよね。そういうえば今日の魔力はどうやって倒したの？」「

「うーん……実際、俺はあまり戦つてないんだよね……」

「そうなの？」「

「うん。魔力のほうも、あまり戦わうとしてなかつたし……」

「じゃあ吸収できたってこと？」「

「そうだな。そのおかげで新しい合成方法も見つかつたし」「

「そりなんだ。どんな魔法？」「

「うーん……簡単に言うとあの魔力と同じような魔法かな……」

「す」「いじやん！それだったら次からの戦いも余裕なんじゃない？」

「やつであればいいけどな……」

「そういうふうに考えちゃダメだよ。絶対、勝つって考えてないと」

「そうだよな。明日もがんばりつか」

「うん！」

「じゃ俺一応、横になつてるから」

聰一は床に敷いてある布団に入る。

やつぱり寝れない。

わつきまで、ずっと寝ていたのだから当然のことだ。

そのとき体の上になにかが乗つかつた。

「どうせ眠くないんでしょ？」

「ちょ……おりる……」

「やだよ」

柚月は聰一の背中に手を回して、顔を近づける。

「柚月……」

「ねえ……もうここのよね……」

「うそ……」

聰一と柚月の距離はどんどん小さくなつていいく。

聰一は唇に柔らかい感触を感じた。

「聰一君……大好き……」

「俺も大好きだよ……」

今度は聰一が柚月を抱きしめる。

「私……こんな気持ち初めてだよ……」

「柚月……これからもずっと一緒にいよつな」

「うん」

聰一と柚月が一人きりの部屋には、窓から星の光が差し込んでいた。

act1-2 危険な森

「ノノノン

「聰一君、柚月ちゃん、もう起きてー」

「……はー……」

美羽が階段を下りていく足音が聞こえる。

「聰一君、起きて……」

「……もう朝か……」

「うん。着替えて早く下に行こい」

「そうだな……」

そう言つと柚月は服を脱ぎ始める。

「ちよ……むじう向いて着替えろよ……」

「聰一君なら見られても平気だよ?」

「そういう問題じゃ……」

「早く着替えなよ」

「むじう向いてろよ……」

「聰一君のなら見ても平気だよ?」

「いや……俺が恥ずかしいから……」

「わう?」

柚月は聰一がいる方向と逆をむく。

「じゃあ行こつか

「うそ」

聰一と柚月は部屋から出て一階へ行く。

「二人ともおはよう。今日はもう魔力の場所がわかってるけど  
その場所まで行くのに時間がかかるから朝ごはん食べたらすぐに出発  
するけどいい?」

「はー」

テーブルの上には、聰一と柚月のぶんだけ朝食が置いてある。

「いただきまーす」

椅子に座り朝食を食べる。

できるだけ早く食べるよつに心がけたが十分ほどかかった。

「「」ひそかに

「食べ終わつた?じゃあ、もつ出発したいんだけどいい?」

「はい」

「しばらぐ家に戻つて来れないと思つかりテント……だっけ?

それも一応、持つていきましょうか」

「持つてきます」

聰一はもう一度、部屋に戻り地球から持つてきたキャンプ道具を持つ。

「よし。あとは忘れ物ない?」

「大丈夫です」

「じゃあ出発するわよ」

家から出ると昨日通つた森とは別の方向に進んで行く。

「昨日とは違つて今日、通るばしょは危険な猛獸とかいるから気をつけね」

「わかりました」

街中を五分くらい歩いていくと大きな門のよつなものがあった。

氷璃はその近くにいた武器を持っている男に近づいていく。

「なに話してんですか?」

「通してもらうための交渉をしてるのよ。み

まあ氷璃だつたら余裕で通してもらえたと思うけどね

そんな話をしている間に氷璃が戻つてくる。

「さあ、行きましょう」

氷璃がそう言つた瞬間、門はゆつくつと開き始める。

そして聰一たちは門を通り國の外へ出る。

「なんか生えてる木の種類が違いますね」  
「うう。ドニンジム ナニウヂツヒラグ ハジカヒ

「うん。でもむやみに触つたらダメだからね」

「なんですか？」

「町から出るとき門」があつたの覚えてる?」

「  
」

「あれは危険な生物や植物があるから町の人に入らないようにして

「ノルマニ

ガサガサ

横の草の中から、なにか動く音が聞こえる。

「氣をつけてね。小さくとも危険なのがいるから」

れかりあつた」

それは、まわりに比べて草が少ないというだけでかなり歩きづらい。

ミシミシ……バキー！

歩いている横の木が突然倒れてくる。

危ない！」

きに倒す。

「なんで急に木が……」

「氣を失ひ……もしかしたら」

タリタリ……」

「これは、ちょっとヤバいかも……」

美羽は少し焦つているようだ。

「危険な動物なんですか？」

相当危険よ。好戦的で気性も荒い……」

「殺すのには一歩は一歩ある」

「どうぞお入り下さい」

「気温を下げれば眠るわ」

「狼つて冬眠しないんじや……」

聰一の言葉を聞かず氷璃はまわりの気温を下げる。

すると、さつきまで唸っていた狼は静かになり動かなくなっている。

「なんですか？」

「ヒツチの世界には気温の変化があまりないのよ。

だから体温調節をすることが難しいの。

私も地球に育ったとき体温調節ができないくて風邪ひいたし」

「そうなんですか……」

「うん。だからこの森の大体の動物は簡単に戦闘不能にできるわ。

じゃあ進みましょうか」

倒れている大きな木の上を通り先に進もうとする。

「柚月、登れるか？」

聰一は柚月に対しても手を差し出す。

「ありがとう」

その手を引き柚月も木の上に登らせる。

その木の直径は一メートル七十センチといつたといふで聰一の身長と同じくらいある。

「あの狼……どうやってこの木を倒したんだろ……」

木の根元のほうを見てみると狼が噛んだ跡がある。どうやら、なんども噛みつかれてもろくなつた木がちよつと聰一たちが通つた時に倒れたようだ。

「おつれるか？」

木の上からおりよつとする柚月の足を震わせている。

「ちゃんと支えるから飛べよ」

「……うん」

柚月は目を閉じてゆつくり聰一の方へ飛んでいく。

ちよつといい位置に来たため聰一が柚月をキャッチするのは簡単なことだった。

「もしかして、ヒツチの高さでも怖いのか？」

「うん……」

柚月は恥ずかしそうに頬を赤らめている。

どうやら柚月の高所恐怖症は相当重症らしい。

「今みたいに、いつどこからああいう動物が出てくるかわからないから気をつけてね」

「はい」

「あと植物にも……」

そのとき氷璃に木のツルがむかついてくる。

「なんで言つたそばから来るのよ……」

氷璃はそのツルを氷を使って切り落とす。

「この辺の植物は動くから気をつけてね

「動くんですか……」

「そうよ。地球じゃ考えられないでしょ

「はい……」

さすがは魔法の世界だ。植物も動くというのだから。しかもそれは木が意識的に動けるというところらしい。

act13 巨大動物

「あと、どれくらいで着きますか？」

「今日は多分、着かないわね」

「そんなに遠いんですか？」

「うん。地形の影響もあるしね」

ガサガサ……

「またですか？」

「わからないわ」

音の聞こえたほうからは小さなヤマアラシのような動物が出てくる。

「かわいいですね」

「待つて。その動物は別に影響ないけど触つたら毒針で刺されるわよ」

「そうなんですか？」

「うん。こんな環境だもん。それくらいしないと身を守れないでしょ」

「そうですよね」

ヤマアラシには近づかず、もう一度歩き始める。

まわりの景色がほとんど変わらないので本当に正しい方向に進んでいるのかわからない。

しかし氷璃には全く迷っている様子がない。

少し進むたびに草むらから音が聞こえてくる。

なんだか森に住んでいる動物たちに観察されているような感じだ。さらに視線も感じるということは、やはり動物は聰一たちの方を見ているということだ。

「あの……なんか見られてませんか？」

「動物たちが私たちがなにをしに来たのか見てるんじゃない？」

「そうですか……」

「だから、なんか余計なことしたらすぐに襲われるかもね」

「あまり怖がらせないでください。……」

「でも、本当よ。ここに人が来ることなんて滅多にないからね」

そのとき遠くからドンドンと大きな足音が聞こえてくる。

「あの……これヤバくないですか？」

「うん……ちょっとまずいかもね。……」

「どうするんですか？」

「できるだけ足音の聞こえる方から離れましょ。」

氷璃は少し歩くルートを変えて足音が聞こえる方と逆に向かって歩く。

「そつち行つても大丈夫なんですか？」

「うん。少し遠回りになるけどね。あと……」

目の前に木の棒が落ちてくる。

それも先端が尖っていて、あたつたら確実に死ぬだろう。

「……こいつ、危険な植物が多いから気をつけてね」

「危険すぎませんか……」

「でもあの足音を出してる動物にあつよつはマシだと思つたけど?..」

「確かにそうですけど……」

「まあ、いいわ。私がどの植物がなんなのかわかつてるから」

「そうですか……」

歩く速度はさらに遅くなる。

氷璃がまわりの植物を警戒しているからだ。

「あれ……もしかして……」

目の前に巨大な影が見える。

「足音から離れるように歩きましたよね。……」

「うん……」

確かに足音とは逆の方向へ歩いていたはずだ。

それなのに目の前に巨大な影……

「あの……どうするんですか?」

「なにもしてこなればいいんだけどね。……」

そういうわけにもいかなそうだ。

この正体不明の巨大な動物は威嚇するような声を出している。  
「やっぱり、やらなくちゃいけないんですか？」

「だらうね……怒ってるみたいだし」

巨大的な動物はゾウのような姿をしているが大きさは全然違う。  
そして前足で聰一たちを踏みつぶそうとする。

足の大きさも相当なものだが後ろに下がれば簡単に避けられる。  
「ちょ……どうするんですか」

「私がやります」

柚月が一步前に出て重力を強くする。

巨大な動物は動けずに苦しそうな声を出してくる。

「柚月ちゃん、すごい！」

「ありがとうございます。私の魔法はこのいつときしか役に立たないでの……」

「今のうちに眠らせちゃおうか」

氷璃は気温をどんどん下げていく。

さつきの狼と同じように冬眠状態にさせようつだ。

気温は相当下がっているはずだ。

しかし巨大な動物はまだ眠っていない。

「もしかして……寒さを感じてない？」

どうやらこの大きな動物は厚い皮膚に覆われているため寒さを感じないらしい。

「あまりやりたくありませんが俺がやります」

聰一は前の魔力を吸収したことにより使えるようになつた魔法を使い、

巨大な動物の鼻の部分に水の塊を作り出す。

さらに苦しそうな声を出す巨大な動物……

「聰一君！もうやめて！」

「え？」

柚月に言われて聰一は初めて気づく。

この魔法を続けて使えばこの巨大な動物は死んでしまう。

巨大な動物を殺させないために柚月は聰一に「やめて」と言つたのだ。

「じゃあ、どうすればいいんだよ……」

「もう大丈夫。この動物はもう戦う気がないみたいだから」  
柚月の言つとおり、もう巨大な動物は威嚇するような声は出していない。

そして少しづつ森の中へと入っていく。

「なんであの動物は俺たちを襲おうとしたんだよ……」

「さあね。繩張りだつたんじゃない？」

「氷璃さんは、あの動物を知ってるんですか？」

「全然知らないわ。でも、もう動物には襲われないでしょ」

「なんですか？」

「あの巨大な動物がこの森のボスみたいな存在だと思つから」

「そうですか……」

「うん。でも植物には気をつけてね」

「はい……」

また森の中を黙々と進んで行く。

ただでさえ歩きづらいといふのに、やつきの巨大な動物の足跡がある。

地面が「ボロボロ」とさらに歩きづらい。

植物にも警戒しなくてはいけないので足下だけ見ていてはいけない。

ただ歩くだけで、こんなにもまわりに注意するのは初めてだ。

これだけ危険なのだから森の入り口に門があることにも納得できる。

「やつと、ここまで来たか……」

前の方に町のようなものが見える。

どうやら今日ははちやんとした場所で寝れそうだ。

「これは、どこの国ですか？」

「国じやなくて、ただの町よ」

「え？」

「だから出発したところと同じこと

「こんなに広いんですか？」

「結構、歩いたように感じたけど実際は昨日より歩いてないわよ？」

「そうですか……」

「うん。とにかく同じ国だから安心して」

「はい」

この町も入り口のところには門がある。

しかし警備の人がいるわけでもなく、簡単に町に入ることができる。

「ここに来るのも久しぶりねー」

「私は初めてなんだけど……」

「あれ？ 美羽が小さい頃に一回だけ来なかつたっけ？」

「うーん…… 覚えてないな……」

「そつか」

町の中は、店などが多く美羽の家がある町より賑わっている。

「やつぱり都会はいいわねー」

「うん。これだけ食べ物が売つていれば色々な料理が作れるわね」「確かに色々な物が売つていますね」

「こここの町は他の国と近いから、色々な物が集まるのよ」

「そうなんですかー」

「そんなことより、今日泊るところを……」

「そうだった。それが一番重要よね」

街中をまわりを見ながら歩き続ける。

本当に色々な物が売つている。

食べ物だけではなく、聰一や柚月の見たことがない道具まで……

さらには魔法関係の道具だと思われるものも売つている。

「なんか、おもしろいですね」

「聰一君たちにしてみれば珍しいもんね」

「はい」

「うーん…… やつぱり、このへんに泊れそうな場所はないわね……

あっちの方に行つてみましょうか」

氷璃は一番広い道から少し細い道のほうに入つていく。

その方向には民家がたくさんあるように見える。

「ここつて家しかないんじゃないですか？」

「確かにそうね…… 戻りましょー」

もう一度、広い道に戻る。

そらにまっすぐ進み続けて、やつとそれらしこものを見つける。  
一応、宿泊可能という看板が店の前に出ているが普通の民家にしか  
見えない。

「本当にこりなんですか？」

「うん。意外とこりいう宿つて多いのよ」

氷璃は宿の玄関のドアを開ける。

「ほら、ただの家じゃなかつたでしょ」

玄関はとても広く、靴がたくさん置けるようになつていてる。

「いらっしゃい。四人かい？」

入つてすぐに五十歳くらいの女性が置くから出てきた。

「はい」

「じゃあ、このマークに泊る人の名前書いておいて。部屋はいくつ  
用意する？」

「どうする？」

「私は一つでいいと思いますよ」

「私も別にいいわよ」

「じゃあ一部屋で」

「あの……俺は？」

「別にいいじゃん」

「……」

柚月はいいとして、なぜこいつの世界の女性陣はそういうことを気に

にしないのだろう……

「聰一君、行くわよ」

「はい……」

柚月と美羽、氷璃はカウンターの横にある階段を上つていぐ。

その後を聰一もついていく。

act15 炭酸水

一階にある今夜、泊るための部屋の中に入る。普通の宿の部屋にしては大きい。

外から見たときは、そこらへんの民家と変わらない大きさだったが中に入つて見ると

違いは明らかなものだつた。

「結構、広いですね」

「うん。ゆっくりできそうね」

聰一は今まで背負つっていたキャンプの道具を部屋の隅に置く。「あの、ここつてお風呂はあるんでしょうか？」

柚月が氷璃に小声で聞いている。

「さあ。一階にいる人に聞けばわかるかもね。私もお風呂、入りたいし行きましょうか」

「はい」

柚月と氷璃は聰一が置いた荷物の中から着替えを取り出して部屋を出ていく。

「美羽さんは行かないんですか？」

「私はご飯を食べてから行くわ」

「そうですか」

「はー 今日も一日歩いて疲れたー」

美羽はベッドに倒れ込む。

「あー このベッド柔らかくて気持ちいいー 聰一君も寝てみたら

？」

「俺はいいですよ」

「なんかのど乾いたなー」

「なんか飲み物、買つてしま jóうか？」

「うーん……じゃあ一緒に行こー」

「はー」

美羽は荷物の中から財布を取り出す。

結構、厚みがある財布だ。

「行きましょう」「美羽がなにをして働いているのかはわからないがお金持ちのようだ。

部屋のドアを開けて美羽が外に出る。

そのあとを追うように聰一も部屋から出る。

一回、宿の外に出て飲み物を売っている店を探す。

「せつかくだから、こっちの世界で有名な飲ませてあげようか?」「いいんですね?」

「うん。ちょうど私もそれが飲みたかったし」「どこに売ってるんですか?」

「すぐそこよ。来る時に見て飲みたいなーって思つてたの」

美羽が指差した方向には屋台のようなものと「炭酸水」と書かれた看板がある。

「あれですか?」

「うん。ここの炭酸水がおいしいんだよねー」

美羽は少し早歩きで屋台に近づいていく。

美羽が注文している間に聰一も美羽の横に行く。

「はい、これ持つて」

美羽に渡されたのは四本のビンに入った水色の液体……

例えるならばサイダーといったところだ。

「じゃあ戻るわよ」

「はい」

屋台は宿のすぐ斜め前にあつたため、すぐに宿に戻れる。

キンキンに冷えているビンを持っていたせいで聰一の腕は冷たくなつている。

「冷蔵庫もあるし、柚月ちゃんと氷璃が戻ってきたら飲みましょ?」「はい」

冷蔵庫の形も地球とあまり変わらない。

そして飲み物が入っているビンも普通にガラスでできているものだ。

魔法の世界といつても使う道具が同じなことに驚く。

「あの……これ、どうやって開けるんですか？」

「あー そつか冷蔵庫の使い方知らないのか」

「はい……」

「ここを開いて」

美羽に言われたとおり横についていたボタンのようなものを押すと正面の部分が開く。

「こりこりふうに開けるんですか」

「うん。すうじでしょ」

冷蔵庫の中を見ると奥に青い光を放つ水晶が見えた。

「なんですか、これ？」

「それには魔力が込められていて、そのおかげで冷蔵庫の中が冷やされているの」

「そうなんですか……すうじですね」

「やっぱり地球から来たら魔法って便利に感じる?」

「うーん……地球の道具とあまり変わらないですね」

「やっぱりそうよね。ただ使うエネルギーが魔力か科学的なものかの違いだし」

「そうなんですか?」

「そうよ。ここちの世界の道具は地球のものとほとんど同じよ」

聰一は少し意外に感じた。

魔法があるのならば、もつと便利な道具を作れると思つていたからだ。

「ふー 気持ちよかつたー」

部屋のドアが開き、風呂上りの柚月と氷璃が入ってくる。

「お、ちょうどいい。今、美羽さんと飲み物買つてきたから一緒に飲まない?」

「本当に~お風呂から出たばかりだから喉、乾いてたんだよねー」

聰一はもう一度、冷蔵庫を開けて炭酸水を取り出す。

「美羽さんと氷璃さんも飲みますか?」

「うん」

「私も」

四本のビンを持つて部屋の真ん中にあるテーブルに置く。

「飲みましょうか」

美羽はビンの栓を抜いて、少しづつ飲む。

「やっぱり、これおいしいわね」

「これ飲むの久しぶりだわ」

氷璃もビンの栓を抜いて飲み始める。

聰一と柚月は栓を抜くのに苦戦している。

「開け方わからない?」

「はい……」

「かして」

美羽にビンを渡すと簡単に栓を抜いた。

「どうやったんですか?」

「うーん……力加減かな?」

「難しいんですね?」

「慣れだね。私も最初は地球の缶ジュース開けれなかつたもん」

「開け方、教えてくれませんか?」

柚月は氷璃にビンを渡そうとする。

「両側から同じくらいの力で押して、上にあげればいいんだよ」

「こうですか?」

柚月が氷璃の言ひとおりになると簡単に栓が抜けた。

「そうそう」

聰一と柚月はほとんど同じくらいのタイミングで炭酸水を飲み始める。

「おーしゃー……」

そして同時に同じ感想を言ひ。

「普通、炭酸水って味しないよね?」

「うん……でもなんか甘くておいしい……」

「そりゃあね。色々な果物の果汁が入ってるもん」

「Jの青い色果汁の色ですか？」

「うん。こっちの世界には青い果物が多いからね」

「なんですか……」

「うん」

四人とも炭酸水を飲み終える。

「じゃ、俺は風呂行つてきます」

「わかつた。ご飯までには戻つてきてね」

「はい」

部屋からでて一回に行く。

そして、すぐに宿の人人に風呂場の場所を教えてもらつた。  
その方向に進んで行くと、風呂場の入口がある。

脱衣場から風呂の中を見ると結構、広いようだ。  
中には誰もいない。

「思ったより、広いなー……」

聰一はこんなにも広い風呂に入るのが久しぶりだった。

そのため、思わず浴槽の中へ飛び込む。

誰もいないからといって少し騒ぎすぎたと思い、浴槽の壁に寄り掛  
かかる。

「なんか、すゞく落ち着くなー」

そのまま体を温めたあと、浴槽から出て体を洗う。

シャワーなどは地球上にあるものとほとんど変わらないため、  
いつもどおりに使うことができる。

体と髪を洗つた後、もう一度浴槽につかり風呂から出る。  
体を拭いて着替えを済ませて部屋に戻る。

「お、ちょうどいいじゃん。もうご飯だから  
「わかりました」

聰一が部屋に戻ると氷璃が言つ。

「もう少ししたら部屋に料理を運んでくれるつて  
テーブルのまわりには座布団が置いてあり、柚月と美羽が座つてい  
る。

聰一が柚月の隣に座ると、氷璃は美羽の隣に座つた。  
「失礼します」

そのとき、ちようじ宿の人が料理を運んでくる。

テーブルの上に料理を並べると、また部屋から出でていって。

「なんか豪華ですね」

「うん。まだあるみたいだし」

「失礼します」

また宿の人が料理を持つてくる。

そして、さつきと同じようにテーブルに並べる。

「まだありますので少々お待ち下さい」

部屋を出でていき、すぐに戻つてくる。

そして料理をテーブルに並べる。

「これで全部です。」*（ゆっくつじうわ）*

宿の人は一礼すると部屋から静かに出でていく。

「たくさんありますね」

「うん。知らない食べ物ばかりでしょ？」

「はい」

「じゃあ、食べましょうか。いただきます」

「いただきます」

テーブルの上に並んでいる様々な料理を食べていく。

「これ、なんですか？」

「青リングゴよ」

「えーと……青リングゴつて縁じやないですか？」

聰一が指差したリングゴについている皮の色は青だ。

「しようがないじゃない。」うちの世界のものと地球のものの色が違うのは

「そうですね」

聰一が青いリングゴを一口食べる。

「甘いですね」

「うん。さつき飲んだ炭酸水にも入つてるのよ」

「そうなんですか？」

「私も食べてみます」

柚月も青いリンゴを一口食べる。

「これ、地球のやつより美味しいですね」

他にも、よくわからない料理がたくさんあつたが全部美味しいものだつた。

「ひづりさまー」

「おいしかつたですね」

「そうねー」

「じゃあ私、お風呂入つてくるね」

美羽が立ちあがり着替えを持つて風呂場に向かつ。

「私はもう寝るわ」

そう言つと氷璃はベッドに寝転がる。

「おやすみー」

「おやすみなさい」

「氷璃さん、寝ちゃつたね」

「うん。俺も寝ようかなー」

「私は美羽さん来るまで寝ないよ?」

「わかった。じゃ、おやすみ」

「おやすみー」

聰一は倒れ込むようにベッドに寝る。

「ふー 明日になつたら魔力と戦うのかなー」

「聰一君、寝た?」

「起きてるよ」

「美羽さん来るまで起きててくれない?」

「いいよ

「私の魔法つてさ……」

「どうした?」

「なんかいい使い方ないのかな?」

「普通に使うだけで十分強力な魔法だと思つけど?」

「でも、氷璃さんの魔法も美羽さんの魔法も色々な形があるじゃん」

「そつだけど、柚月の魔法は重力を操るつていうだけで十分だよ」

「ン」

「失礼します。食器をさげてもよろしいでしょうか?」

「はい」

宿の人は食器を重ねてまとめてさげていく。  
料理を運ぶ時は三度にわけていたが今は一度にまとめてさげている。

「あれ、氷璃もつ寝ちゃったの?」

「はい」

「じゃあ私たちも寝ましょうか」

美羽は髪を乾かしながら言つてゐる。

「俺はもう寝ますよ」

「じゃあ私も寝ます」

「電気、消していい?」

「はい」

美羽はバスタオルを置くと部屋の電気を消してベッドに入る。

「おやすみ」

「おやすみなさい」

電気を消すと、三人ともすぐに眠りについてしまった。

act17 影の蛇

「……」

次の日の朝、一番最初に起きたのは聰一だった。

コンコン

「失礼します。朝食をお持ちしました」

宿の人が入ってくる。

起きているのは聰一だけだ。

「あ、ありがとうございます」

宿の人は料理をテーブルの上に並べて、もう一度部屋から出していく。

「氷璃さん、美羽さん、柚月、起きてよ」

「うーん……おはよう……」

最初に起きたのは美羽だった。

「もうご飯ですよ」

「そうだ……昨日、早めに朝食の準備してって頼んだんだ……」「もう一度、宿の人が入ってきて料理を並べる。

「これで全部です。ごゆっくりどうぞ」

宿の人が部屋から出ていくと、柚月と氷璃も起きる。

「ご飯、早くない?」

「早めに行つた方がいいでしょ?」

「それもそうか……」

氷璃は起きあがると、すぐに座布団に座り料理を食べ始める。

「聰一君……もう朝一……」

柚月も少し寝ぼけているが起きあがる。

「私たちも食べましょう」

美羽も座布団に座る。

「柚月、食べるぞ」

「うん……」

柚月の手を引つ張り座布団の上に座らせる。

「いただきます」

「いただきます……」

柚月は眠そうな顔のまま料理を食べている。

「今日で魔力の場所につきますか?」

「多分つくわ」

「また森の中を歩くんですか?」

「そうね。昨日よりも危険だから気をつけで」「そうですか……」

「じゃ、私もう食べたから。『じちそうさま』氷璃は席を立ち荷物をまとめていく。

「私も。『じちそうさま』

美羽も立ち上がり荷物をまとめている。

「『じちそうさま……』

柚月も、もう食べ終わつたようだ。

聰一は少し急いで食べる。

「『じちそうさま』

「あんまり急がなくともよかつたのに」「急いでませんよ……」

「まあいいわ。早く行つた方がいいものね。そろそろ出発しましょ

う

「はい」

聰一は荷物を背負い氷璃についていく。

一階で氷璃が宿の人に料金を支払い、宿から出る。

「じゃあ、行きましょうか

来た方向とは逆の方向に歩き、町の外へ向かう。街中は朝だからなのか、とても静かだ。

「ここからは、どれくらい歩くんですか?」

「昨日より歩くわよ」

「そうですか……」

「それにここから先の道は、はつきりしてないし……」

「迷わないんですか……」

「さあね。運次第よ」

「……」

氷璃が「こんな」と言つとは思つていなかつたので聰一は少し驚いた。

しかし美羽はそんなに氣にしていなさそうだ。

柚月は、少し驚いているようだが何も言わない。

氷璃の妹である美羽が気にしていないのだから、こつものことなのだろう。

「あの……美羽さん……」

「氷璃のことなら心配しなくて大丈夫よ。こつちの森の中に知り合いがいて、

その人に魔力について聞くみたいだから」

「そうですか……」

氷璃は一切迷うことなく、町はずれの門まで進んで行く。  
こつちの門はとても簡単なつくりで警備員もいない。  
昨日の森よりも危険だというのに、不思議だ。

その門を開いて氷璃は、森の中へと進んで行く。

まだ朝早く天気も少し曇っているので森の中は薄暗い。  
「なんか不気味だね……」

柚月は聰一の着ている服を掴む。

「そうだな」

昨日通つた森とは生えている木や草なども違ひ、茹むしている。  
足下も滑りやすくなつており、少し危険だ。

頭上からは不気味な鳥の鳴き声も聞こえている。

「あの……ここ本当に大丈夫なんですか？」

「私も初めて来たからわからないわ」

氷璃は一度、来たことがあるのか迷わずに入んで行く。

「そういえば氷璃さんの知り合いがいるんでしたっけ？」

「うん。鍛冶師のおじいさんらしいわよ」

「鍛冶師ですか……」

「鍛冶師って包丁とか刀とか作る人のことよ?」

「はい。わかつてます……」

そのとき横からサアサーという音が聞こえてくる。

「なんですか……今の……」

「ちょっと危なそうね……」

音の聞こえた方向を見てみると黒い長い影が見える。

「なんですか……これ……」

「ちょっとヤバいわね……氷璃、どうすればいいの?」

「やっぱり気絶させるしかないんじゃない?」

黒い長い影の正体は巨大な蛇の群れだった。

しかも目だけが黄色く光り、それ以外の部分は影そのものだ。

「私がやります!」

そう言って柚月は魔法を使う。

重力を強くして蛇の動きを封じようとする。

しかし蛇の動きは変わらない。

「なに? この蛇……私にも種類がわからないわ……」

「氷璃がわからないんだつたら、どうすればいいのよー。」

そう言いながらも美羽は風で蛇を切り裂こうとする。

確実に当たっているはずなのだが蛇の体をすり抜けていく。

「やっぱり影相手じゃダメなの……」

氷璃は蛇の増したから氷の棘を作り出して攻撃する。

この攻撃も蛇の体をすり抜け、蛇はどんどんこちらへ近づいてくる。

「そうだ! 水の魔法……」

聰一は、ふと新しく使えるようになった魔法の事を思い出す。

そして、その魔法を使つことにする。

ものすごい勢いで水が蛇に向かって飛んでいく。

水の勢いはとても強く、まわりの岩をも切り裂いていく。

しかし、それでも蛇には全く傷がついていない。

「本当にどうなってるんですか……」

そのとき蛇がいた場所で爆発音とともに煙が発生する。

「今度はなに……」

煙が少しずつ消えていき、そこに人影が見える。

「また、この蛇が出たのか……」

「誰？こんなところに人がいるとは思えないけど……」

「大丈夫。私の知り合いだから」

どうやら、この無数の刀を背負っている男が氷璃の知り合いのようだ。

それなら敵ではないということなので安心できる。

「久しぶりね、リュウー！」

「おお、その声は……」

「まさか私のこと忘れたってことはないわよね？」

「忘れてねえよ。あの氷の魔法使いだろ？たしか名前は……」

「やっぱり覚えてないんだ？」

「ちょっと待て！今、思い出す。でも俺のことをリュウーって呼ぶってことは

絶対に名前を知っているはずなんだが……」

「もういいわ。氷璃よ。思い出した？」

「ああ！あいつか！俺が刀作るのに冷たい水が必要になつたときに氷を作つて、その代用してくれた……」

「やつと思い出したわね。じゃあ今すぐ、リュウの住んでる小屋まで案内して」

「なんだよ、急に……」

「事情は歩きながら説明するから、お願ひ

「わかつたよ……ちやんとついてこいよ。それでなにがあつたんだ

？」

「宇宙で初めて作られた魔力がこの世界中に散らばっているわ。数は全部で十個

「ほつ……そりや、すげー話だな。それと俺に会いに来たことはないか関係あるのか？」

「私の調べによると、このあたりに魔力があるはずなのよ」

「そうか？俺は全然気付かなかつたぞ？」

「魔力自体についてじゃなくて、森の中で変わったことはないの？」

「うーん……あるとすれば、さつきの影みたいな蛇が出ることかな」

「あの蛇はなんなの？」

「俺にもよくわかんねーけど、刀を使えば簡単に始末できるわ」

「じゃあ、魔法が効かなかつたのは……」

「物理攻撃しか効かないからじゃねーの？」

「それって、前に聰一君が戦つた石像と同じ……」

「まあ、いい。ほらここが俺の住んでいる小屋だぞ」

小さな木製の小屋がある。

壁などには苔が生えていて、形もあまりよくない。

そしてまわりに生えている木々には無数の刃物がつきたせつてている。  
「それで魔力について俺が知つてゐる」とは全部話したわけだけど……

…

「もうひとつお願いがあるわ

「なんだよ？」

「聰一君と柚月ちゃんに武器を作つてあげて

「お？久しぶりに依頼が来たな！任せとけ！」

「先に言つておくけど二人とも少し特殊な魔法使いだからね」

「そうか……まあいい。それにあつた武器を作ればいいんだろ？」

「そういうこと

「よし、じゃあそこ」の少年少女ついてここ

「はい」

リュウは小屋の中へと入つていぐ。

小屋の中には小さなベッドと刀を作るための道具と材料が置かれて  
いるだけだ。

「あの……

「言い忘れてた。俺は龍虎だ。」この名前で呼ぶなよ。」

「え？」

「女っぽいだろ。だからリュウって呼べよ」

「はい……」

「それでお前らは？」

「聰一です」

「柚月です……」

「じゃあ聰一、使う魔法を説明しろ」

「はい。二つ以上の魔法を合成する魔法です」

「それはつまり二つ以上の魔法を合わせて新しい魔法を作るっていうことでいいんだな？」

「はい」

「じゃあ、ちょっと待つて。前から使ったかった素材がやっと使える……」

リュウは少し笑っているように見える。

小屋の隅にある小さな石でできた階段を下りていったリュウはすぐに戻ってくるが、手には黒く輝く石が持たれている。

「それは、なんですか？」

「ちょっと前に拾った常に魔力を発し続ける石ころだよ」

「それって……」

「正体はわからぬ一けど、お前なら上手く使えるんじゃない？」

「そうですか？」

「まあ試してみる。ダメだったらすぐ作り直すから

「わかりました」

リュウが黒い石をハンマーで叩くと黒い粉が取れしていく。

「これで、この石ころの正体がわかるぞ」

黒い粉が取れるにつれて、石は白い光を放ち始める。

「この輝き……」

その光には見覚えがある。

前に戦った魔力と同じ輝きをしている。

「もしかして……」

急に魔力の光が強くなる。

「なんだ……」

その光を見た瞬間、柚月と聰一が倒れる。

「君……もう一つも魔力を集めたんだ……」

「まさか……」

「そいつ。僕が三つめの魔力」

「どうする気だ……」

「おっと、僕は戦う気はないからね」

「じゃあ、どうするんだよ」

「君の武器になる」

「武器……」

「そいつ。リュウさんに武器にしてもらひの。やつすれば君には魔法だけじゃない

強力な武器が手に入るでしょ？」

「確かに……」

「じゃあ、そういうわけでようじく

光の強さが元に戻る。

そして柚月とリュウが立ちあがる。

「なんだよ……今の光……」

「聰一君……もしかして今の……」

「うん……魔力だった……」

「大丈夫なの？」

「大丈夫。俺の武器になってくれるつてわ」

「そいつ……」

ここまで簡単に三つ目の魔力が手に入るとは思っていなかつた。しかし戦わずして済んだことは、とてもよかつた。

あと七つもあるのだから、できる限り戦闘は避けたかったからだ。

「よし、じゃあ氣を取り直して……」

リュウはもう一度ハンマーを握り、魔力を叩き始める。

「こんなもんか……」

ハンマーを置くと、今度は金属の塊を持つてくれる。

「それ、なんですか？」

「これは剣の刃の部分になるものだ。

今から、形を変えていくからなんか要望があればそのとおりにするぞ」

「任せます」

「そうか。じゃあ、刀のような形状と剣のような形状どっちがいい？」

「これだけは決めてくれ」

「なにが違うんですか？」

「刀は刃になつていてるのが片面だけ。剣は両方とも刃になつていてる」「剣をお願いします」

「了解。ついでにそつちを選んだ理由は？」

「両方とも切れる方が得した気分になるじゃないですか」

「お前、おもしろいやつだな」

リュウが少し笑っているように見える。

「よし、じゃあ今から作るから待つてろ」

リュウは小屋の置くにある暖炉のような物の中に金属の塊を入れる。十秒程してから、熱された金属の塊を巨大なハサミのような道具で取り出し、

それを横にあつた台の上に乗せる。

金属の塊に素手で触ると、形を変えていく。

「熱くないんですか?」

「熱いよ。でもこつしないと俺の魔法は役に立たないからな

「どんな魔法なんですか?」

「金属の形を変えるんだよ。でも少し熱さないとダメだから戦闘には使えない」

これでリュウが鍛冶師をやつている理由も納得できる。

金属の塊はどんどん形が変わっていく、少し剣の形に近づいてきた。そのとき真ん中に穴を開ける。

そしてリュウは立ち上がり、もう一度地下室に入る。

次は別の金属を持ってくる。

それも同じように暖炉で暖めて形を変える。

魔力を金属を塗るようにして包み込み、一つの球体を作る。

剣の真ん中に開けておいた穴に金属を塗った魔力をはめる。

「よし、これで中心部は完成だ」

金属の形を変えれる魔法のおかげなのか、ここまで作業がとても速く終わつた。

「あ、一つ忘れ物

リュウはまた地下室に入つていぐ。

戻つてくると、また金属と丸みを帯びた石を持つてくる。

「あとは、この金属で刃を作つてくつつけて砥げば完成だ」

持つてきた金属は暖炉に入れずにそのまま形を変えていく。

そして剣の中心になる部分のまわりにくつづけていく。

「金属同士をくつづけうことも可能なんですか？」

「まあな」

そして丸みを帯びた石で刃を砥いでいく。

「よし。完成だ。とりあえず持つてみろ」

「はい」

剣の形は少し厚く、重い。

真ん中には魔力の塊が包まれた球体も埋め込まれている。

「重いですね……」

「そのくらい耐える。っていうか慣れる」

「私の魔法を使ってみたら?」

「そのてがあったか」

剣から常に魔力が発し続けられているところとは、その魔力と柚月の魔力を合成して剣自体にかかる重力をなくすればいいということだ。

「すげー。これならなにも持つてないのと同じだ……」「どうだ? 気に入ったか?」

「はい。ありがとうございます」

「次は、そつちの少女の番だ。なんの魔法を使うんだ?」

「私は……重力を操る魔法です」

「また、おもしろい魔法だな。じゃあ重さは考へなくていいか?」

「はい」

「よし。待つてろ。いいのが思いついた」

リュウは地下室に行こうとする。

「……物運ぶの手伝ってくれないか?」「はい」

聰一と柚月もリュウについていき地下室に入る。

地下室は意外と狭く壁にある棚にたくさんの金属が収納されている。

「今から出すやつ全部、持つてってくれ

「はい」

リュウは地下室を一周するようにまわり必要な金属を出していく。  
その種類は、とても多く数十種類はある。

「こんなに使うんですか？」

「おう。でもたくさん使つてことは、とても重くなる。  
でも、その分さまざまな金属の性質をあわせ持つ強力な剣になるん  
だぜ」

「そうなんですか……」

「あと、組み合わせ方も難しいし量の調整も難しいから、  
さつきのように、すぐには完成しないぞ。これで全部だ。持つてけ」

「はい」

聰一は金属を持つ。

一つ一つが小さいため、一度持てるのは五つほどだ。

「意外と重いですね」

「えーと……少女の方、魔法を使つてこれを運んでみてくれないか  
？」

「はい」

柚月が魔法を使うと金属はとても軽くなる。

「おお！すこいな。これなら大丈夫だ」

三人で使う金属を一階に運び、わかりやすいように並べる。

「サンキュー。じゃあ作り始めるぞ。まず少女、どんな形状の武器が  
いい？」

「私は……なんでもいいです……」

「じゃあ大量の武器をまとめて持ち運びできるようにするかい。  
重量はどんなんにあっても関係ないんだろ？」「

「はい」

リュウは一つの金属を持ち、暖炉に入れる。

## act20 武器の完成

「そういうえば少年の魔法は他人の魔法をパクれるっていう解釈でいいのか？」

「そういえば一度吸収した魔力はずつと使えます」

「すごいな。じゃあ、また別の武器が欲しくなつたら俺のところに来いよ」

「はい」

金属を暖炉から取り出して形を変えていく。

その形は一枚の刃のようだ。

「なんの武器を作ってるんですか？」

「槍だよ。軽くできるんだつたら飛び道具にも使えるだろ」「魔法を使っている柚月や、それと同じ魔法を使えるようになったら聰一も気付けなかつたことにリュウはすぐに気づいている。

このまま色々なことを教われば様々な戦い方ができるようになるだろ」

「こんな感じでいいか？」

リュウは槍の先端部分を持つて柚月に見せていく。

「あの……私、武器のことあまり知らないです……」

「そうか……じゃあ誰にでも使いやすい形のものにしておくわ」「ありがとうございます」

槍の先端部分はかなり大きなものだつた。

それをさらに砥ぎ、もう一度地下室に入つていく。

地下から持つて来たものは鉄パイプのようなものだ。

それに、さつきまで砥いでいた先端部分をつける。見た目はとてもシンプルな感じだ。

「ちょっと持つてみ」

リュウは柚月に槍を渡す。

「重いんですけど、魔法使えば大丈夫です」

「そうか。持ちづらいか?」

「大丈夫です」

「じゃあ、これでオッケーっと」

そう言つとリュウは先端部分をはずす。

「なんではすんですか?」

「これに他の金属を混ぜて、さらに鋭いものにするんだよ」

「あのー、ちょっとといいでですか……」

「おう。なんでも言つてくれ」

「もう少し見た目をかわいくできませんか?」

「かわいく?任せとけ。そのかわり他の注文は受け付けないぞ?」

「はい」

リュウは鉄パイプを置き、地下室から持つてきておいた金属を暖炉に入れて熱したあと素手で金属を混ぜていく。

「言い忘れてた。かわいいデザインにするんだつたら一本しか作れないけどいいか?」

「大丈夫です」

リュウの表情が少し変わり、混ぜ合わせた金属の形を変えていく。

どうやらデザインには、かなりこだわりがあるようだ。

そう考へると、聰一の剣もかなり考えられたデザインになつていてる。

槍の先端部分はどんどん形が変わっていく。

もう普通の槍の先端とは思えないほどだ。

そして今の形は魔法の杖の先端のような形だ。

柚月がかわいいと思うかは別として、女の子ならば一度は憧れるであろう

魔法少女が持つてゐる杖と大差ない。

次は鉄パイプだ。

その部分にも様々な装飾を施し、見た目をよくしていく。

十分ほどの間、小屋の中は金属がこすれ合う音しか聞こえていなかつた。

「よし、完成だ!こんなにデザイン考へるの苦労したのいつぶりだ

よ……」

完成したものは最初に見た鉄パイプに刃をくっつけただけの槍と全く違つ。

とこ「うか物理攻撃に使えるとは思えないよな形状をしている。」「す」「ぐ、かわいいですね」

「そうか。喜んでもらえて嬉しいよ」

「あの……」れ、本当に武器になるんですか?」

「なるよ。先端はちゃんと斬れるようになつてるから」

「そうですか……」

「そういうえば美羽さんと氷璃さんは?」

「あれ? 魔力探しに行くつて言つてなかつたっけ?」

「そうだつけ? リュウさんについてきて、この小屋についたときにはもういなかつたような……」

「そう言われば……とりあえず小屋から出ぬか」

「お? もう帰るのか?」

「はい。ありがとうござりました」

「おひ。また来いよ」

小屋から出たが美羽と氷璃の姿は見当たらない。

「どこ行つたんだろ……」

「近くだけ探してみようか」

「うん」

聰一と柚月はリュウの小屋が見える範囲で美羽と氷璃を探す。地面を見てみるとわかりやすく足跡が残つてゐるわけでもないので探しようがない。

「あれ? もう完成したの?」

背後から聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「美羽さん!」

「結構、早く終わつたのね」

「はい。どこ行つてたんですか?」

「氷璃と魔力を探しに行つてたんだけど、結局見つからなかつたわ」

「それなら大丈夫です。ここにありますから」リュウに作つてもらつた剣を指差し美羽に言つ。

「どういうこと?」

「魔力を持っていたのはリュウさんだつたんです」

「えーと……でもあの人は魔力のことを知らないって言つてたけど……」

「本人も気づいていなかつただけです。偶然拾つた石ころが魔力の塊だつたんです」

「そんなことがりえるの?」

「でも実際、魔力はこの剣に込められていてるので……」

「それに石が喋るわけないじやないですか」

「それなら、それが魔力で間違いないといふことね?」

「はい。氷璃さんはどこですか?」

「もうすぐ来ると思うけど……」

「あれ?もう終わつたの?リュウの鍛冶も早くなつたわね」

氷璃は美羽がいる方向とは逆の方向から、聰一たちのほうに来る。

「魔力は、もう見つけましたよ」

「そう。よかつたわ。この調子なら次の魔力まで行けるわね」

「まだ、この近くにあるんですか?」

「今日中につくかどうかはわからないけど、この森の奥にもう一つあるわ」

「わかりました」

「それにしても柚月ちゃんの持つてるの、かわいいわね。

それ、リュウがデザインしたの?」

「私がかわいくしてくださつて言つたら、こうしてくれました」

「そう……リュウにそんな才能があつたのね」

「聰一君の剣も見た目いいし、使いやすそうだね」

「はい。でも凄く重いんですよ……」

「本当に戦いで使えるの?」

「この剣からは常に魔力が発せられているので、柚月の魔力と合成

すれば

剣の重さを変えることができます

「これで魔法も物理攻撃もできるようになつたつてわけね」

「はい」

「よし。じゃあ次の魔力に向かいますか」

氷璃は森の奥に向かつて歩き始める。

まわりは木ばかりなので本当に進んでいいのかわからない。

そして、いつ何に襲われるかもわからない。

サアア……

さつき蛇が現れたときと同じ音が聞こえてくる。

## act21 蛇の再来

「もしかして……」

音の聞こえたほうを見ると案の定、影の蛇がいる。

今回の蛇は大きさが普通ではない。

長さはどれだけあるか、見えないのでわからないが地面から頭までは三メートル以上ある。

「なんで、こんな大きい蛇がいるんですか……」

「どつちにしろ戦わないダメね……」

これだけ大きな蛇が近くにいることに今まで気付けなかつたというのが少し不思議だ。

しかし今は、この蛇との戦闘に集中しなくてはいけない。

聰一は背負っていたリュウが作った剣を抜き、蛇に向ける。それでも蛇は全く動搖していない。

口を大きく開けると、そのまま聰一に噛みつけにする。

噛みつくとはいっても、この大きさならばのみ込まれてしまう。

剣の攻撃範囲に蛇の頭が入るタイミングに合わせて、思いつきり剣を振り下ろす。

蛇の頭からは大量の血が流れ出している。

姿は真っ黒な影だが流れ出している血は赤。

それも、とても綺麗な赤だ。

それでも蛇は聰一をのみ込もうとしている。

ザンッ！

なにかが風を切るような音を出し、飛んでいく。

その瞬間、蛇の頭部は少しずれて聰一は攻撃を受けずにすんだ。

蛇の頭部を見るとかわいい装飾が施された棒のようなものが見えている。

「聰一君、大丈夫！」

柚月は真剣な表情で聰一に叫んでいる。

「な……なんとか……」

「動きは私が封じるわ！」

氷璃が言つと蛇の上に無数の氷でできた杭ができる。

その杭は蛇に向かつて一気に落ちていく。

これで蛇の動きはほとんど封じた。

あとは聰一が剣を使ってどごめをさすだけだ。

剣を振り上げる。

そのとき蛇の体の横から何体もの蛇が出てくる。

その蛇は巨大な蛇にくつついたまま触手のようだ。

触手の先端も蛇の顔になつており、噛まれれば危険だらう。

そう判断した聰一は攻撃の対象を触手に移す。

横に剣を振ると触手を簡単に切り落とすことができたが、すぐに再生してしまう。

「これは厳しいかも……」

聰一がつらく感じているとき、柚月は黒い球体で、氷璃は氷で剣を作り

美羽はかまいたちを発生させ、蛇に攻撃している。

そのおかげで無数の触手をどんどん切り落としていく。

柚月、氷璃、美羽の三人が隙を作ってくれている間に

聰一は本体の巨大な蛇めがけて剣を振り下ろす。

確かに当たった。

そして大量の血も流れている。

それでも触手は再生を続け、蛇の頭は動き続けている。

「どうなつてるんだよ……もしかして死なないのか……」

ふと思いついたことだが、その可能性がゼロというわけではない。

もしもこの蛇が死なないというのなら、この場所から逃げるか永遠に戦い続けなければいけない。

しかし前者の逃げるという選択はとても危険だ。

巨大な蛇にあつたときに気配を感じなかつたということは不意をつかれるか、追いつかれてしまう可能性がある。

「だんだん触手の再生が遅くなつてませんか?」

「なつてる! もう少しだ!」

触手と戦っている柚月と氷璃が言つのだから間違いない。

たとえ死なないとしても疲れがあるのならば、なんとかなる。

できる限り触手の数が減つたとき一気に切り刻む!

聰一はそう決めた。

再生能力が弱まつているときに体を切り刻めば、再生されずに済むかもしれない。

触手の再生速度から再生能力が半分くらいになつていてるのがわかる。これくらいの量ならば攻められる。

聰一は蛇の側面に走り込み、胴体に猛スピードで切りこむ。

深く当たつたため手に不思議な感触を感じる。

完全に切り落とした。

蛇の胴体は大量の血とともに真っ一つに裂けていく。地面に叩きつけられた蛇の体は、まだ動き続けている。

完全にとどめを刺さなくては……

聰一は、もう一度蛇に向かつて切りかかる。

今度は一発ではなく連続して。

氷の杭が蛇の動きを止めていたおかげか全ての攻撃が当たつたいる。蛇の体は切り裂かれ、肉塊と化している。

「もう……大丈夫だよな……」

それから蛇が動くような様子はなかつた。

しかし影である姿はどんどんぼやけていく。

ほとんど形がわからなくなつたとき、液体のようになつてあたりに散らばつた。

「どうなつてるんですか?」

「私にもわからないわ。こんなふうになるなんて……」

「もしかして生物じゃないとか?」

「ありえるかもね。生命力も再生能力もあいえないほどだったし……」

…

「でも血は出てましたよね」

「うーん もしかしたら、もう一つの魔力がなにか影響を及ぼしているのかかもしれないわね」

「なら早く見つけないと、この森に悪影響が出ますね」

「そうね。急ぎましょう」

氷璃は奥に向かつて歩いていく。

その後を聰一、柚月、美羽の順でつづっていく。

まわりの様子を見ながら歩いていく。

さつきのように気配に気づけないまま危険な生物にあうわけにはいかない。

植物や動物が動く音が聞こえるたびに、その方向に注意するためなかなか進めない。

## act22 怪鳥

キイイイ……

空から不気味な鳥の鳴き声が聞こえている。

その鳴き声は、どんどん聰一たちの方へ近づいてくる。

「あれ、なんですか?」

空には巨大な鳥の影がある。

「もしかして、私たちを狙つてる……」

氷璃の予想は的中した。

鳥は一気に聰一たちの方へ近づいてくる。

さつき戦つた蛇と同じように体は影でできている。

キイイイ!

鳥は奇声を発しながら爪を振り下ろす。

「今度はこいつと戦うの……」

爪の攻撃範囲は狭かつたため避けることはできたが、相手は空を飛べる。

その点では、とても不利だ。

また爪で攻撃をしてくる。

「やつぱり、やらなきゃダメね……」

氷璃は氷の盾を作る。

鳥の爪は鋭く、氷の盾は簡単に切り裂かれてしまった。

「どうすればいいんですか?」

「柚月ちゃん! 武器!」

「はい!」

柚月は蛇に槍を投げた時と同じように鳥に向かって槍を投げる。

投げる瞬間は極限まで軽く、投げた後は対象に向けて一気に加速させる。

その速度は目にもとまらないという表現がふさわしいほどだ。しかし、その速さも鳥の動体視力には敵わず爪で弾かれる。

「なんで当たらないのよ……なら私が！」

美羽はかまいたちを発生させ、鳥の体を切り裂こうとする。鳥は大きく羽ばたき、強風を発生させながら上昇していく。

「飛ぶか…… そうだ柚月ちゃんの魔法なり……」

「試してみます！」

柚月は上空の鳥にかかる重力を大きくする。

それでも鳥の動きは変わらず空を飛び続いている。

「どうします？」

「静かに。相手に集中しないと、いつ攻撃されるかわからないわよ」

氷璃は飛んでいる鳥をジッと見つめている。

キィィイ！

鳥は、また奇声をあげて一気に降下してくれる。

その体制から一気に聰一たちを仕留めようとしていることがわかる。

鳥は翼を閉じ一つの矛となつて聰一たちに襲いかかる。

聰一はその攻撃にあわせて攻撃をするために剣を構える。

「聰一君！ダメ！」

氷璃が大声で叫び、聰一の前に巨大な氷の壁ができる。

氷璃は鳥の突進がどれくらいの威力なのか、見ただけでわかった。それに対しても聰一が攻撃をすれば、たとえ当たつたとしても聰一の身が危険なことも。

鳥は速度を落とすことなく氷の壁に突っ込んでくる。

氷の壁はかなりの厚さなのだが鳥の突進には耐えられず、すぐに砕ける。

しかし鳥は氷の壁にあたったため速度が一気に落ちた。

この速度ならば樂々攻撃することができる。

聰一は剣を振り、鳥の爪を切り落とそうとする。

鳥はその攻撃に素早く反応して爪でおさえる。

聰一の剣と鳥の爪がこすれ合って火花が散っている。

その隙に柚月が槍を鳥の翼の部分にむけて投げつけた。

槍は翼に命中し、鳥の羽根が飛び散る。

影とはいって、その羽根が飛び散る姿はとても美しく見える。

「 キイイイー！」

鳥の悲鳴からは、かなりの苦しみが感じられる。

蛇のときは弱点がわからなまま戦いが終わつたが、IJの鳥の場合  
は翼が弱点のようだ。

ダメージも大きいつえに飛べないようできる。

「 今うちに終わらせるよー！」

氷璃が使つた魔法は大量に氷の針を作り出すものだ。  
その氷は鳥の体中に突き刺さつていく。

鳥からは、もう奇声すら聞こえない。

ゆっくりと地面に倒れていき、液体状になつて消えていく。

「 意外と楽に終わったわね」

「 柚月のおかげだな」

「 私はなにもしてないよ……」

柚月は地面に落ちている槍を拾つ。

「 IJの調子だと、まだ襲つてきそうね」

「 そうですね」

聰一たちは、さらにまわりを警戒しながら森の奥へ進んで行く。

「 さつきの蛇もそうだけど今の影でできた鳥、絶対に誰かが操つて  
るわ」

「 なんでわかるんですか？」

「 攻撃が普通じゃなかつた。」

普通の鳥なら空中からの攻撃は、もっと反動がないようにするわ

「 そりなんですか？」

「 まあ、あの鳥は普通の鳥じゃなかつたから関係ないかもしれない  
んだけどね」

「 蛇のほうは、なにがおかしかつたんですか？」

「 噛みつき方よ。あんな地面に当たるような噛みつき方は絶対しな  
いわ」

「 もしかして動物に詳しいんですか？」

「そりゃあね。ずっと動物と暮らしてたから」

「そうなんですか……もつと色々な話を聞かせてくれませんか?」

柚月は、こっちの世界の動物に興味を持つたらしく氷璃から色々な話を聞いている。

森の中は相変わらず不気味なままだが柚月と氷璃はとても楽しそうに話している。

とても、いつ敵に襲われかわからない状態とは思えない。

「来たわね……」

氷璃の目つきが変わった。

### act23 影の猛獸

影の鳥と戦つてから、まだ五分も経っていないというのに次の敵が現れたようだ。

まだ少し遠くにいるので、はつきりとした姿は見えない。

「今度は、なんですか？」

「わからないわ。でも蛇とか鳥みたいなあまいものじゃないわ」少しずつ影が近づいてくるにつれて姿が見えてくる。

猛々しい鬚に鋭く光る目、太い四本の脚。

その姿は、まさにライオンそのものだ。

「今回は本当にヤバいですよ……」

「なにビビッてんのよ」

氷璃は氷の杭を作り出し、ライオンにむけて放っていく。

しかしライオンは当然のように避けて、

瞬間移動とほとんど変わらない速度で聰一に飛びかかる。

聰一は全く気づけていなかつたが剣を構えていたおかげで、直撃はせずにするんだ。

「くそ！」

目の前に立るライオンにむけて剣を横に振る。

キンッ！

ものすごい金属音が鳴り響いく。

ライオンの爪は鋼鉄となんら変わりがないようだ。

その隙に氷璃が氷の杭を放つがライオンはそれにもすぐに反応し、爪で切り裂く。

こんな状態ならば絶対に勝てるはずがない。

「こいつは俺に任せてください……」

「なに言つてゐるの……無理に決まつてゐでしょ！」

「大丈夫です……」

聰一は剣を構えなおしてライオンに斬りかかる。

ライオンは、それを爪でおさえて逆の爪を使い聰一を切り裂く。する。

聰一は剣の長さを利用して、うまくライオンの攻撃を防ぐ。ライオンが怯んでいる隙に袖月の魔法を合成しライオンの顔の位置まで飛ぶ。

剣を頭の上に構えて剣にかかる重力を一気に上げる。

そうすることにより剣は地面上に向かって一気に落ちていく。

それに掴まっている聰一も同時に落ちる。

その攻撃をライオンは爪でおさえたものの、

剣の威力はとても強く、爪を切り落としから顎にも浅い傷をつけた。

「聰一君、その戦い方つて今見つけたの」

「はい」

「すごいわね……」

爪を切り落としたからなのかライオンからは戦意が感じられない。「悪いけど、もう終わりだ……」

聰一は死を覚悟したライオンに対し、頭に一撃を打てると止めをさす。「早くしないと、もっと危険な敵が現れるかもしれません。急ぎましょう！」

「そうね」

ライオンは分裂して消えていく。

「お前ら強いんだな」

「誰だ！」

正面から聞こえてきた声からは聰一たちを挑発しているかのようを感じられる。

「俺が魔法で作ったやつら、倒しだろ？」

「もしかして今、戦つてたライオンも……」

「そうだよ！ そいつも俺の魔法だ！」

「なんで私たちを襲わせたのかしら？」

氷璃の表情はとても怖い。ものすごい殺氣まで感じられる。

「邪魔だからだよ！勝手に人の森に入つて来てんじゃねーぞ！」

「ここは、あんたの森じゃないわよ！」

氷璃は男のもとへ走り込んで行く。

その速さと同時に使つてゐる魔法の量や種類は、凄まじいもので本氣でこの男を殺そうとしていることがわかる。ここまで何度も動物に襲われたことに対する怒りがあつたからだろう。

氷で作られた剣で男の体を横に斬り払う。

完全に腹部に当たつた。男の上半身が少し浮く。

「さすが氷璃！これくらいの相手だったら楽勝だね」

「まだ……」

「え？」

「まだ終わつてないわ……」

「その通り。俺の魔法は「自然融合」だからな！」

「自然融合？」

「私にもわからないわ。でも殺せないんじゃ……」

「大丈夫。ちゃんと決着はつくから。お前らが死んでな！」

黒い液体が男の足下に集まつていく。

その液体は蛇や鳥を殺した時に発生したものと同じだ。形がどんどん変わっていき、少しづつ姿がわかつてくる。

ライオンの体に巨大な翼、そして龍のように巨大な尻尾……

今までに戦つた蛇と鳥とライオンが混ざつたかのようだ。

「まさか自然融合つて……」

「今わかつてもおせーよ。それに今使つたのが自然融合の全てでもねーし」

巨大な三匹の動物が融合した影は、腕を振り上げ襲いかかつてくる。

「こんなのと戦うのは、もう慣れてるよ！」

キンッ！と金属音が鳴り響き、聰一の剣が擦れ合い火花が散つている。

「さつきのと同じ強さだと思つたのか？無駄だよ。バカが！」

まわりの木の影が動き始め、浮き出る。

「一人に一体ずつ相手を用意してやるよ」

浮き出た木の影は一つに分裂して、それぞれ柚月と美羽に襲いかかる。

それに反応して柚月と美羽も魔法や武器を使い応戦している。

「氷の魔法使い、これでやっと集中して戦えるな」

「あんた、なにが目的なのよ」

「特にねーよ。ただ魔法が使えるようになつたら戦いたいもんだろ？」

「使えるようになった……」

「そんなことどうでもいいだろ！ いくぞ！」

男の足下から影の塊が飛んでくる。氷璃はそれを氷で突き刺して相殺する。

攻撃後の隙に氷璃は男の足下に氷の棘を発生させる。

「うわ！」

「まさか私が魔法を使つたことに気づかなかつた？」

「つるせー！」

男は氷璃にむかって殴りかかるつとする。

「今度は素手？」

氷璃は男の拳を軽く避け、腹部を膝で蹴りあげる。しかし、その蹴りは男の体をすり抜けていく。

「え？」

男は一瞬、不気味な笑みを浮かべて蹴りがすり抜けて隙だらけの氷璃の背中を殴る。

「うつ……」

「所詮、女だつたらその程度だよな！」

「黙れ……」

氷璃が静かに呟くと男の左胸には氷の棘が突き刺さっている。聰一、柚月、美羽に襲いかかっていた影も消えている。

「氷璃……落ち着いて！」

「つるやこ……」

氷璃は地面に膝をついている。

そして苦しそうにハアハアと息を荒げている。

「なんとか大丈夫そうね……」

「どうしたんですか？」

「氷璃にも色々あるのよ……」

「そうですか……」

「……一応、説明するわ。これからのためにも……」

「はい」

「氷璃が本気になれば相手が魔法を使えなくすることくらい簡単な  
のよ。

それで今は魔法を使えなくしないと殺せないと確信したから使つ  
たんだと思つ

「それで氷璃さんは、こんなにつらそうなんですか？」

「多分ね。私もそこまで詳しいことはわからないから

「ごめん……迷惑かけたわね……進みましょっ……」

氷璃はフラフラしながらも森の奥へと進んで行く。

そのあとを聴一たちもついていき、魔力がある場所を田指す。

## act24 消えたモノ

「さつきの私の魔法どうだった?」

「魔法つて……」

「相手が魔法を使えなくしたやつよ」

「あれ、魔法なんですか?」

「うん。私が使える魔法の中でも相当、強力なものよ

「どういう魔法なんですか?」

「相手が魔法を使うのに一番集中するとじるを凍結させて魔法を使

えなくしてるので。

それで、さつきのは上手くいったた?」

「……多分、成功してたと思います」

「そう……ならいいんだけど、まだ完璧じゃなくて……」

「すごいですね」

「そんなことないわよ。相手が集中している場所を把握しないといけないし……」

「それでもすごいですよ」

「そうかしら? ありがとう」

「あの……次の魔力までどれくらいですか?」

「もしかして、さつきの戦いで疲れた? 休もうか?」

「大丈夫です」

「そう……あまり無理しながら。あと魔力の場所まで今日中につくのは無理だと思うわ」

「そうですか……」

柚月は少し怖がっているようだ。

無理もない。何度も猛獸に襲われたのだから。

「大丈夫よ。もう襲われるとは思ひじ……」

「ありがとうございます……」

まわりの様子も一切変わることなく、同じまでも不気味な森が続い

ているようだ。

一応、地面は道のようになつていて、それでも歩きつい。

「なんか、さつきから同じ場所を歩いてるような気がしない？」

「そうですか？森なんだからまわりの景色が変わらないのは普通なんじゃないですか？」

「それでもおかしいわよ。ほら、あの木さつきも見たでしょ？」

氷璃が指差した先には、他の木とあまり変わらない木が生えている。

「わかりませんよ……」

「じゃあ、仕方ないわね。いつしまじょい」

氷璃は氷の杭を道の真ん中に打ち付けた。

「これで、もう一回ここを通ればわかるでしょ？」

「はい」

氷の杭を残して、もう一度森の奥へと進んで行く。

「あの……やっぱり普通に進んでるんじゃないですか？」

「うーん……私が勘違いしてただけかも……」

氷の杭を打った場所から、もう五分以上歩き続けている。

それでも氷の杭がある場所にはつかない。

「やっぱり同じ場所を歩いていたみたいね」

「なんですか？氷の杭はありませんよ？」

「あるわよ」

「どこですか？」

「ほら」

氷璃は地面に落ちているなにかを拾い、聰一に見せる。

「これって……」

「私が作った氷の杭の中心部よ」

「溶けたってことですか？」

「うん。でも完全に溶けないよ。中心だけ強力な魔力で作つていたの」

「でも、この気温だつたら溶けるのにもつと時間がかかりませんか？」

「もしも誰かが私たちをこの森を永遠に歩かせようとしていたら?」「

「そいつが氷を溶かそうとした……」

「そういうこと。道もずっとまっすぐだつたし、こんなことは魔法でしかできない」

「つていうことは、この近くに魔法使いがいる……」

「そういうこと。動いても無駄だから、ここで様子をみましょう」

「はい」

聰一たちは道の端に腰をおろし少し様子をみると同時に休憩することにした。

「柚月……どうした?」

「な……なんでもない……」

柚月はなにかに怯えているかのように震えている。

「怖いのか?」

「うん……」

「大丈夫。約束しただろ?俺が守るって……」

「ありがと……」

聰一は柚月の手を握り、柚月を落ち着かせる。

「まだ姿を見せないか……」

「どこにいるのかわかるんですか?」

「全然わからないわ。でも絶対いる……」

「……!」

柚月?氷璃さん?美羽さん?

不思議なことに今まで話していた氷璃もいなければ、手を握つていた柚月の姿もない。

## act25 元の場所

「なんで急に……」

さらにまわりにあるものは全て今まで見ていたものと全く違ひ色になつてゐる。

「場所が変わつた……」

ヒュッ！

なにかが風を切る音が聞こえる。

その音は聰一に近づいていく。

カン！

飛んできたものに気づいた聰一は剣を横むきに出し盾のよひに構え飛んできたものを弾く。

「葉っぱ？」

地面に落ちたものは確かに近くの木の葉だった。

しかし先端は鋭く尖つており、さりに木の葉とこゝよりつな硬さではない。

なぜこんなものが飛んできたのか全く理解できない。

それに今まで見ていた葉は緑色のじく普通のものだった。

飛んできた葉の色は赤。

それも血に染まっているかのような恐ろしき雰囲気を醸し出していく赤だ。

ヒュッ！

また同じ音が聞こえる。

すぐにつの方向を向き剣を構えるが、少し様子が違つ。聞こえてくる音の数がどんどん増えていく。

カン！ カン！ カン！ カン！

全ての葉を弾き返しているが数は、さりに増えていく。雨のように限りなく、突き刺さるように降り続けていく。今は全てを防ぎ続けなくてはいけない。

しかし必ずいつかやむときが来るはずだ。

そのときにまわりの木々を斬り倒し、葉が降つてくるのを止めればいい。

葉は止むことなく降り続けている。

聰一の腕には相当の疲労が溜まつていく。

もう剣を構えるのですら辛い。

もともととても重い剣だ。いくら重力の魔法を使っているが、それは自分の魔法ではない。そのせいで減らせる重さにも限界がある。

「くそ……」

どんなに聰一がつらとしても、そんなに止めと願っても止むことなく降り続ける。

まるで木々が聰一を殺すために葉を降り続かせているかのようだ。木々が敵ということは、この森自体が敵といつこと。

「どうすればいい……」

守りながら勝つ方法を考える。

「あんた、なんのためにここまで来たのかわかつてる?」

「誰だ!」

誰もいないのに話しかけられたことに驚くより先に集中しているときには、話しかけられた怒りで思わず大声で叫ぶ。

「そんなに怒らなくても……」

「……」

どこから聞こえているのかわからない声を相手にしている暇などない。

もう一度、降り続いている葉に集中し身を守る。

「そんな使い方しても無駄だよ」

剣の中心にある魔力を埋め込んだ場所が白い光に包まれている。

「なんだ……これ」

その光はどんどん大きくなつていき聰一の体を包み込む。

「せっかく魔力が込められてるんだから普通の剣と同じように使つて駄目なんだよ」

「くそ……」

今でも葉が降り続いているがそれが剣に当たる」とはなくなっている。

「突然なんだよ……それにこの光、……」

「自分で使つて気付けなかつた?」

「お前は誰だよ」

「手に持つてゐるのに気づけない?」

「まさか、あのときの魔力、……」

「そうだよ」

「「」の光は……」

「別空間を作つたんだ」

「別空間?」

「そう。君が今いた場所は魔力によつて作られた別空間。その中にもう一つ別空間を作つて一時的に外の空間から干渉受けないようにしてゐる」

「どうすればここから出られんんだよ?」

「「」の空間はとても強力な魔力で作られてゐる。

だから簡単に壊すことはできない。そして外側の様子を見ればわかるように、とても危険。

今、君を包み込んでいる空間もすぐに壊されちゃうだらうね

「だつたら、どうすれば……」

「壊す「方法」は簡単。君の合成魔法があればね。

でも「壊す」のは無理。今の君の魔力の量が少なすぎる」

「じゃあ、このまま死ねつて言つのか?」

「いや、そういうわけでもないよ。君の魔力が増えればいいんだから

「」

「どうやって増やす?」

「さあ。それは自分で考えな」

「おい、ちょっと待て!」

「……」

返事が返つてくることはなかつた。

「どうすればいいんだよ……

別空間？魔力が足りない？魔力が足りないのなんてどうしようもないだろ？……

魔力……もしかして……

剣の中心を見る。ここには魔力の塊が込められている。

「もしかして……」

その部分に触ると大量の魔力が体の中に流れこむようだ。  
これならば魔力は十分に足りるはずだ。

しかし、この空間を「壊す」方法がわからない。

「魔力を壊す……この空間を壊す……違う！ もつといい方法が……」

今まで見てきた色々な魔法のことを思い出す。

どの魔法を使えばいいのか、どうすれば効果的なのか……

「そうだ……さつき氷璃さんは……」

影の動物を作り出していた人物と戦ったとき、氷璃は相手の魔力を凍結させていた。

しかしこの魔法は相手がどのように魔法を使っているのかを知ることが必要だ。

「できるかわからねーけど……やつてみるか！」

剣から吸収した魔力を合成し、もう一度剣の中に戻す。

そして空間を壊すために剣を振り上げ、一気に斬りおろす。

斬れた……少しづつ硝子のようにまわりの風景が割れていく。

ただ今まで自分のまわりに壁があつただけのようく感じさせられる。

「戻つた……？」

確かにまわりの風景と色は戻っている。

しかし柚月の姿も氷璃の姿も美羽の姿もない。

さらに森の中は氣味が悪いほどの静寂に支配されている。

さっきまで聞こえていた鳥の鳴き声も木々が揺れる音も聞こえない。

「皆も別の空間に飛ばされたのか？」

もしもそうだとしたら、とても危険だ。

さつき聰一がいた空間と同じようなものだつたら……

一刻も早く見つけ出さなくてはいけない。  
聰一はまわりを見まわしながらかヒントがないか探してみるとし  
た。

## act26 四つの魔力

さっきまで座っていた場所の背後に生えている木に氷の結晶がついている。

「氷璃さん……？」

この近くにいるかもしれない。

そんな期待をするが、いる場所は別の空間のはず。ここで、どんなに探そうと見つかるわけがない。

そのとき木が一気に凍りつく。

ものすごい冷気、これは間違いない氷璃のものだ。

「もしかして、ここに……」

別空間を壊すときは剣の魔力を吸収し、振り下ろした。

もしかするとこちらの側からも別の空間に入れるかもしれない。たとえ無駄だったとしても構わない。

どうせ見つけられないんだつたらなにもしないよりはいい。

聰一は剣を思いっきり振り下ろし凍りついている木を切り裂く。  
「入れるのか……？」

木の中に氷璃の姿が見える。

そして、その横には柚月と美羽が倒れている。

木の中に右手を入れてみると水面に手をつけたかのように表面が揺れる。

そのまま全身が中に入るよう進んで行く。

一瞬、目の前が真っ暗になつたように感じたが無事、中に入れたようだ。

この空間も、森とほとんど変わらない。

色の変化などもなく、何一つ違和感がない。

「氷璃さん！」

「聰一君……」

「大丈夫ですか？柚月と美羽さんも……」

「その一人は、もうダメかもしれないわ……そして私たちも……」

「なにがあつたんですか？」

「魔力よ……私たちが回収しに来た……まさかこんなに恐ろしいものだつたなんて……」

「じゃあ、この空間は四つ目の魔力が作りだしたものなんですか？」

「うん……でも、この魔力には絶対に勝てないわ……」

「聰一君……逃げて……」

「柚月！大丈夫なのか？」

「うん……」

柚月は無理矢理立ち上がり槍を杖のように地面について立つている。

「いつまでも寝ていられないわね……」

美羽も立ち上がる。

服の汚れや傷などから、どれだけの攻撃を受けたのかがわからないほど無数の傷がついている。

「四つ目の魔力って、どんな姿をしてるんですか？」

「……そんなことより、よく私たちを見つけられたわね」

「はい。俺も別空間に飛ばされていたので……」

「そう……今回の魔力は完全に空間を操つてくれるわ……」

「空間を操るっていうのは……」

「……詳しいことはわからないけど、魔法を使えば全て相手に操られる……」

さらに動こうとすれば、空間自体が変えられて動くことが無意味にさせられる……

「なんですか、それ……」

「まあ、いいわ……びつせもつ一度戦つたところで殺されるだけだから……

相手の魔法を知る必要がなければ特徴を知る必要もないわ……」

「……諦めるんですか？」

「そうね……今回ばかりはどうしようもないわ……」

「氷璃さんらしくないですわ……」

「やつよ……氷璃、私だって柚月ちりちゃんだって立ちあがったんだから……」

「無理に決まつてゐるじゃない！なんで負けたのかもわからない、相手の魔法もわからない。」

「そんなんじや何度も戦つても結果は同じにしかならない！」

「……戦わないでどうやって勝ち方を見つけるのよ。もう氷璃は来なくていいわ。」

聰一君、柚月ちゃん行きましょう」「う

「え？でも……」

「いいから、行くわよー手遅れになつても知らないからー！」

美羽は魔力がどこに行つたのかもわからないまま、歩きだす。体に大量の傷があるせいで、進む速度はとても遅い。

「氷璃さん、行きましょう」「う

「……」

「わかりました……先に行つてるので、ちりちゃんと来てくださいね」「すいません……」

柚月は氷璃に一礼する。

ゆつくり進んでいる美羽の後を聰一と柚月が追う。一人残された氷璃は、その場にしゃがみ土を拾う。「考えなしで戦つても無駄だつて……」

氷璃は拾つた土を思いつき握り、目を開じる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1385w/>

---

魔法の合成師

2011年11月19日18時58分発行